平成24年度

お茶の水女子大学部局別評価

自 己 評 価 書

平成２４年１０月

お茶の水女子大学文教育学部

目　　次

Ⅰ　学部の現況及び特徴　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅲ　基準ごとの自己評価

基準１　部局等の使命・目的　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

基準２　教育研究組織　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

基準３　教員及び教育支援者　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０

基準４　学生の受入　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７

基準５　教育内容及び方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２

基準６　学習成果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４６

基準７　施設・設備及び学生支援　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５７

基準８　教育の内部質保証システム　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６４

基準10　教育情報等の公表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７３

Ⅰ　学部の現況及び特徴

1　現況

（1）大学名　　お茶の水女子大学文教育学部

（2）所在地　　東京都文京区大塚２－１－１

（3）学部等の構成

学科：人文科学科、言語文化学科、人間社会科学科、芸術・表現行動学科

コース・環・講座：12 コースとグローバル文化学環、および日本語教育講座

関連施設：グローバル教育センター、外国語教育センター、人間発達教育研究センター

（4）学生数及び教員数（平成23年５月１日現在）

学生数：学部953人

専任教員数：74人　（理事除く、助教３含む）

2　特徴

【沿革と理念】

お茶の水女子大学は、昭和24(1949)年の新制大学発足とともに、その目的を「広く知識を授け、深く専門の学術を教授、研究し、知的、道徳的及び応用的能力を養い、もって社会の諸分野における有為にして教養高き女子を養成し、あわせて文化の進展に寄与すること」（学則第１条）と定めた。平成16（2004）年国立大学法人化にあたり、そのミッションとして「すべての学ぶ意欲のある女性の真摯な夢の実現の場」となることを掲げた（中期目標）。創立以来137年にわたり、日本の女子教育を先導してきた伝統を踏まえ、グローバル化時代の各界（研究・教育・行政・産業）で活躍する女性リーダーを育成し、同時に女性の雇用や生活環境の改善を図ることで、21 世紀の日本社会の革新を女子大学から発信する役割を担っている。

文教育学部は、本学の人文・社会系の中心学部として昭和２４年に文学部として設置され、翌年３学部体制発足により、文教育学部に名称を改めた。国内唯一の「文教育学部」として、文学部系統と教育学部系統（舞踊・音楽を含む）の融合学部として、世界にも例のないオンリーワンの学部となっている。

本学部は数度にわたる講座増設・再編を経たが、平成８（1996）年以降、それまでの６学科を、人文科学科、言語文化学科、人間社会科学科、芸術・表現行動学科の４学科に改組し、あわせて大講座化をはかった。学生は学科に入学後、2年次後期に専門コースに進学することとし、12の専門コースと、領域横断型の履修を可能とする「総合文化学コース」とに再編された。平成17（2005）年度には、総合文化学コースを発展的に改組して、学科共通のコースとして「グローバル文化学環」を設置し、同時に第２年次前期から専門コース・環へ進学することに改めた。

【教育研究上の特色】

文化は、生き方です、社会です、情報です。世界をミクロに、マクロに、学問してみませんか。

①　生きている人間とその社会

文教育学部には、人間をとりまくマクロな社会や環境から、ミクロな個々人の思想や心理や言語、あるいは文学・美術や音楽・舞踊といった芸術まで、多彩な研究分野があり、マクロとミクロの双方から学んでいく総合学部といえる。そこでは「生きている」人間とその文化や社会への関心が核となっている。教育や研究の対象は、古代から現代へ、日本から世界へと広がり、誕生から死まで人間の一生を追いかける。

②　多様な専門分野と少人数教育

本学部の最大の特徴は多様性である。哲学、歴史学、地理学、文学、言語学、教育学、社会学、心理学、芸術学など、70余名の教員の研究対象・分野・方法は、それぞれ異なり、学生は、自分の関心や進路にそって、多様な専門分野を広くあるいは深く学ぶことができる。第二の特徴がきめ細やかな少人数教育で、一人の教員あたりの学生数が少なく、学生の関心や特性に応じた、個別指導が可能となっている。

③　文理融合LAと複数プログラム選択履修制度

平成20（2008）年度から、全学で新しい教養教育として「文理融合リベラル・アーツ科目群」が開始され、23（2011年）度から「複数プログラム選択履修制度」が導入された。専門教育のカリキュラムを、主プログラム（44-48単位）と第二のプログラム（20単位）の２つに分け、学生が自分の関心や将来の進路にしたがって選択できる。文教育学部では、コース・環によって、11の主プログラムと24の強化・副・学際プログラムが提供され、また「日本語教育副プログラム」が新設された。人文科学科・言語文化学科・人間社会科学科の学生は、2年次に進む時に所属学科のいずれかの主プログラムまたはグローバル文化学を選ぶ。第二のプログラムでは、強化プログラムを選択し専門性を深めることも、他の学科やコースが

提供する副プログラム（または学際プログラム）を選択して広く学ぶこともできる。主プログラムの収容上限定員は、学生が希望のプログラムを選択履修できるように、ゆるやかに設定されている。芸術・表現行動学科の場合は、実技という専門特性を生かすために、プログラム制をとらないが、副プログラムを提供するとともに、学生は他の副・学際プログラムを履修することができる。

④　領域横断性

複雑化・グローバル化する現代社会では、ひとつの事象には複数の専門分野が関連し、どの分野においても領域横断的な知識と視野が必要となっている。複数プログラム選択履修制度を生かすことで、学科・コースをこえた多角的な学修が可能となり、多様な専門分野がバラバラに存在するのではなく、教育面でも研究面でも、相互に連携し、ハーモニーを奏でることが期待される。

Ⅱ　目的

（1）　平成22（2010）年に新たに制定された「大学憲章」では、本学の中長期的活動指針を次のように掲げる。

【教育文化】

一人ひとりを大切にする豊かな教育文化を維持し続ける。本学では、高度な専門教育と並んでリベラル・アーツ教育を重視する。リベラル・アーツ教育は、人文科学・自然科学・社会科学の素養やセンスを広く備えた知性を育むことを目指している。

【研究文化】

未来を拓く基礎研究を重視する。

【国際交流】

海外との研究・教育上の人的交流・文化的交流を意欲的に進め、広く活動を展開し、国際社会に固有の存在感を発揮する。本学は、開学以来、アジアの女子教育の拠点としての役割を果たしてきた。国境を越えた研究と教育の実践を積み重ね・・・自らもまた新しい文化を創造し、これを世界にむけて発信する。

【社会との交流】

社会との間で望ましい知の循環を実現することによって、社会的使命を果たしていく。

（2）　文教育学部は、本学のリベラル・アーツ教育の中核となっている人文･社会科学系の教養教育、外国語教育、スポーツ健康、および留学生向けの特別科目を担当している。また、専門教育の目的を「人文・社会科学系の学問を中心に、講義、演習、実験、実習等の多様な授業を通じて、学術研究のための確かな基礎と、国際的に通用する問題発見能力、情報処理能力、問題解決能力、コミュニケーション能力を備えた人材を養成すること」(学則第３条の２）と定め、基礎的な専門能力とともに、社会のさまざまな場で生涯にわたってそれを応用する力をもったジェネラリストを育成している。

（3）　各学科の目的および各コース・環の教育目標は次のとおりである。

<u>１．人文科学科</u>　人類の様々な歩みの中の現象を広く文化として捉え、深く幅広い知識を修得し、それらに立脚したオリジナルな問いを自ら見つけだし、必要な資料・データをねばり強く収集・整理した上で、独自の論理を築きあげる総合的な力を有する人材を養成する。(学則第３条の３）

哲学・倫理学・美術史（コース・プログラム、以下同）　LA（リベラルアーツ）の中核を担う哲学・倫理学・美術史の使命は、わたしたちの人生を、いかに考え、いかに生き、いかに表現し、いかに幸福なものとするかという、もっとも実際的な応用力の養成である。普遍的価値の学習を基礎にしつつ、根本につねにたちもどり現実の実践力を追求する。（『履修ガイド』に記載、以下同）

比較歴史学　歴史は社会の反映であり、歴史を学ぶことは社会での実践力となる。日本史、東洋史、西洋史という枠組みを思考の地域軸と時間軸として位置づけ、同時に相互の比較や連関・交流に着目し、比較史的観点や社会史の視角を重視しつつ、歴史研究を通して社会全体を俯瞰し総合的に把握できる柔軟な思考方法を養う。

地理学（地理環境学）　地理学は、文系と理系の知をローカルな地域・場所で考え、結びつける総合科学であり、さらに社会生活においては現実的な諸問題に解決策を与える応用科学・政策科学である。現実的な諸問題の解決のために、ローカル、ナショナル、グローバルの地理的マルチスケールのセンスを養成する。

<u>２．言語文化学科</u>　人間の言語活動や様々な言語表現の本質について深い知見を有するような人材、また、個々の言語に関して高い運用能力を有するような人材、更には各言語圏に固有の文化とそれら相互間の交流について幅広い知識を有するような人材を養成する。(学則第３条の３）

日本語・日本文学　日本語・日本文学について多角的に学び、言語と文学の観点から日本文化の本質を考察する識見と力量を育む。日本語学・日本上代文学・日本中古文学・日本中世文学・日本近世文学・日本近代文学・日本現代文学の各領域にわたって、基礎から応用へと段階をふみながら、その全般について学習する。

中国語圏　現代中国語のトレーニングを基盤として、中国の現代文化および古典文化、ひいては中国に対する総合的な理解を深めることを目指す。確実な中国語運用能力の土台のもとに、様々な分野で活躍しうる人材を育成する。

英語圏　英語圏の言語文化に関する研究を専攻し、柔軟な英語運用能力を習得するとともに、学術的研究の成果や深い思想を英語で正確に表現し、自信を持って広く世界に発信できる能力を身につけることを目指す。

仏語圏　フランス語の専門的知識と実践的運用能力／フランス語で営まれる様々な文化現象の理解／思想から映画まで、ファッションから移民問題まで、幅広くフランス語圏の文化と社会を学ぶ／ヨーロッパの文化や世界のフランス語圏の文化にも視野を広げる／日仏交流、日欧交流などの異文化交流にも関心を持つ。

３．人間社会科学科　人間社会科学科は、社会学、教育科学、心理学の幅広い基礎知識、深い専門的及び応用的知識を習得し、人間に対する深い理解に基づき、世界的視野に立って社会の広い分野において主導的役割を果たすことができる人材を養成する（学則第３条の２）。

社会学　理論的ないし実証的方法により、人間の意識と行動の社会的側面、およびその基盤をなす社会の構造と変動を多角的に分析・考察し、人間や社会を広く根本的に見通す力量を育て、学生それぞれが持つ社会に対する関心を育てる。

教育科学　「教育」という営みを理論と実践の両面から多角的に考察し、教育から人間や社会を広く根本的に見通す力量を育てる。教育にかかわる事象をテーマに選び、自分なりの知識、視点、方法で卒業論文をまとめる。

心理学　実証的な方法によって、人間や他の動物などの行動を観察・分析し、人間の心的な活動の仕組みや働きを解明する心理学という学問の基礎的な知識と、研究に必要なテクニックを学ばせるとともに、人間に関わる事象への深い理解と科学的な見方、更にどのような問題に対しても論理的、分析的に考えられる力を身につける。

４．芸術・表現行動学科　音楽や舞踊に代表される芸術及び表現行動を理論的研究と実践の両面から追求し、現代的問題への対応に適用できるような人材を養成する（学則第３条の２）。

舞踊教育学　舞踊を中心にスポーツや日常動作にわたる人間の身体活動や表現について実践を通しながら、多角的・総合的にその意義と特性を追究する。(『文教育学部履修案内』に記載)

音楽表現　単に演奏技術や理論的知識の習得にとどまるのではなく、音楽の背後にある豊かな人間の営みを捉える。人文･社会・自然科学の様々な研究との関連の中での、音楽の学問的研究と演奏の実践的習得を重視し、現代に生きる私たちの音楽を、最先端の視点で捉えることを目指す。(コースのウェブサイトに記載)

５．人文科学科・言語文化学科・人間社会科学科共通

グローバル文化学　「地域研究･地域文化(Comprehension)」「多文化交流（Communication）」「国際関係・国際協力（Collaboration）」を３つの領域を柱とし、グローバル化時代に、文化の差異を理解しながら、その差異をこえて協働し、新しい関係や価値を創り出していく力をもった市民を育てる。（『履修ガイド』に記載）

以上の各コース・環の教育目標から、学士課程においては、それぞれの専門領域の知識を修得するだけでなく、専門を通して、学問や人間の世界全体を見通す力を育成することに主眼が置かれているといえる。

（4）　教育職員免許（小中高）、学芸員・社会教育主事・社会調査士・地域調査士の資格に必要とされる科目を開設し、教員（常勤、非常勤）や教育産業や公務員に広く人材を輩出している。

Ⅲ　基準ごとの自己評価

基準１　大学の目的及び部局等の使命・目的

（１）観点ごとの分析

観点①：　大学の目的（学部、学科又は課程等の目的を含む。）が、学則等に明確に定められ、その目的が、学校教育法第 83 条に規定された、大学一般に求められる目的に適合しているか。

【観点に係る状況】

大学の目的は学則第１条に、文教育学部の目的は学則第３条の２に明確に定められている（資料１-①-A）。

資料1－①－A　大学及び文教育学部の目的

○国立大学法人お茶の水女子大学学則(抜粋)
（目的） 第1条　国立大学法人お茶の水女子大学(以下「本学」という。)は、広く知識を授け、深く専門の学術を教授、研究し、知的、道徳的及び応用的能力を養い、もって社会の諸分野における有為にして教養高き女子を養成し、併せて文化の進展に寄与することを目的とする。
（文教育学部の目的） 第3条の2　文教育学部は、人文・社会科学系の学問を中心に、講義、演習、実験、実習等の多様な授業を通じて、学術研究のための確かな基礎と、国際的に通用する問題発見能力、情報処理能力、問題解決能力、コミュニケーション能力を備えた人材を養成することを目的とする。 2　前項の目的を達成するため、前条第2項に定める文教育学部各学科の目的は、次に掲げるとおりとする。 一　人文科学科 人文科学科は、人類の様々な歩みの中の現象を広く文化として捉え、深く幅広い知識を修得し、それらに立脚したオリジナルな問いを自ら見つけだし、必要な資料・データをねばり強く収集・整理した上で、独自の論理を築きあげる総合的な力を有する人材を養成する。 二　言語文化学科 言語文化学科は、人間の言語活動や様々な言語表現の本質について深い知見を有するような人材、また、個々の言語に関して高い運用能力を有するような人材、更には各言語圏に固有の文化とそれら相互間の交流について幅広い知識を有するような人材を養成する。 三　人間社会科学科 人間社会科学科は、社会学、教育科学、心理学の幅広い基礎知識、深い専門的及び応用的知識を習得し、人間に対する深い理解に基づき、世界的視野に立って社会の広い分野において主導的役割を果たすことができる人材を養成する。 四　芸術・表現行動学科 芸術・表現行動学科は、音楽や舞踊に代表される芸術及び表現行動を理論的研究と実践の両面から追求し、現代的問題への対応に適用できるような人材を養成する。

別添資料・web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
web資料1－①－1	大学憲章 （http://www.ocha.ac.jp/introduction/charter.html）

【分析結果とその根拠理由】

学部及び学科別の目的は、本学の目的を各専門領域の特質に即して展開したものである。また、平成23年度に制定された「大学憲章」では、「高度な専門教育における長年の蓄積を生かし、それを発展させ、一人ひとりに豊かな学びの可能性を拓いてゆく。そのために、問題関心の広げ方、専門の深め方、固有のテーマの発見の仕方についても、自由度の高い学びを実現する」（web資料１-①-１）とし、文教育学部では多様な専門分野を個々人の学生の関心とニーズに合わせて広くあるいは深く学修し、現代社会で躍動する人材の育成を目的としている。

これらは、学校教育法第83条に規定された大学一般に求められる目的に合致していると判断される。

（２）優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

学則第１条の大学の目的では、1949年の新制大学発足時に定められた方針「広く知識を授け、深く専門の学術を教授、研究し、知的、道徳的及び応用的能力を養い、もって社会の諸分野における有為にして教養高き女子を養成し、併せて文化の進展に寄与すること」を堅持しつつ、平成20年度に定められた学部・学科の目的では、「国際的に通用する問題発見能力、情報処理能力、問題解決能力、コミュニケーション能力を備えた人材を養成する」ことを掲げ、現代社会が大学、とりわけ人文・社会科学領域に求める役割を明示している点が、優れている。

【改善を要する点】

特になし

基準２　教育研究組織

（１）観点ごとの分析

観点①：　学部及びその学科の構成（学部、学科以外の基本的組織を設置している場合には、その構成）が、学士課程における教育研究の目的を達成する上で適切なものとなっているか。

【観点に係る状況】

本学部は、平成８年度に、人文科学科、言語文化学科、人間社会科学科、芸術・表現行動学科の４つの学科 12 の専門コースに改組され、さらに、平成 17 年からは、学科共通のコースとしてグローバル文化学環が設置され、４学科 13 のコース・環から構成される学部となった（資料２-①-A、B）。 教育組織としては、学科およびコース・環に分かれているが、平成 19 年度より教員は人事上は大学院が本属となり、学部では教育担当として学科・コース・環に配属されている。

平成 23 年度より全学的に複数プログラム選択履修制度に移行し、文教育学部は人文科学科（哲学・倫理学・美術史、比較歴史学、地理学）、言語文化学科（日本語・日本文学、中国語圏言語文化、英語圏言語文化、仏語圏言語文化）、人間社会科学科（社会学、教育科学、心理学）の 10 のコースがそれぞれ主・強化・副プログラムを、グローバル文化学環が主･学際プログラムを、また新たに言語文化学科日本語教育講座が副プログラムを設けた。芸術・表現行動学科（舞踊教育学コース、音楽表現コース）は、実技教育を含む専門教育の特性を生かすためにプログラム制をとらないが、他学科他学部の学生のために副プログラムを提供している。文教育学部が開設するプログラムは計 35 となる。各プログラムの授業科目については、他コース他学科他学部の教員が担当するものもあり、教員組織と教育プログラムの柔軟で効率的な運営を行っている。

【分析結果とその根拠理由】

本学部は、人文科学、言語文化学、人間社会科学、芸術・表現行動学の教育研究を行うものであるが、本学部の教員組織と教員構成は、必要とされる分野（ディシプリン）、多様な地域･時代をバランスよくカバーしており、適切なものとなっている（資料２-①-C）。複数プログラム選択履修制度への移行により、学生は個々の興味や関心に応じて文教育学部内の他学科のプログラムも副プログラムとして選択することが可能となり、人文・社会科学のみならず理学や芸術学まで多様な専門分野をカバーする本学部の教員組織の長所が、教育組織としてより効果的に活用されるに至っている。

資料2－①－A　文教育学部の教育研究組織の編成

○国立大学法人お茶の水女子大学学則(抜粋)
（学部） 第3条　本学に、次に掲げる学部を置く。 　文教育学部 　理学部 　生活科学部 2　学部の学科及び収容定員等は、次の表のとおりとする。 　～(略)～ 3　前項に規定する学科に、次に掲げる講座を置く。 　文教育学部

人文科学科　形象分析学講座、哲学講座、比較歴史学講座、地理学講座 言語文化学科　日本語・日本文学講座、中国語圏言語文化講座、英語圏・欧州言語文化講座、応用言語学講座、日本語教育講座 人間社会科学科　応用社会学講座、教育科学講座、心理学講座 芸術・表現行動学科　舞踊教育学講座、音楽表現講座

資料２―①―Ｂ　文教育学部の教育組織

○国立大学法人お茶の水女子大学文教育学部履修規程（抜粋）
第2条　広領域に及ぶ幅広い知識と、高度で実践的な専門的知識を教育するため、学科ごとに、履修方法を異にする履修コース及びグローバル文化学環を設ける。

資料2－①－Ｃ　文教育学部専任教員 研究分野分布（平成 23 年度）

研究分野	教員数	比率
思想	4	5.4%
歴史（歴、考）	8	10.8%
文学	15	20.3%
語学	11	14.9%
社会学（含文化人類）	4	5.4%
地理学	5	6.8%
教育学	6	8.1%
心理学	6	8.1%
芸術（音楽、舞踊、美術）	9	12.2%
スポーツ	3	4.1%
国際学	3	4.1%
計	74	100.0%

地域	教員数
欧（英米仏独）	23
日本	46
アジアアフリカ	17
計	86

時代	教員数
古代	4
中世	12
近世	14
近代	13
現代	50
計	93

観点⑤：　教授会等が、教育活動に係る重要事項を審議するための必要な活動を行っているか。
また、教育課程や教育方法等を検討する教務委員会等の組織が、適切に構成されており、必要な活動を行っているか。

【観点に係る状況】

文教育学部教授会は、教授会規則第４条に基づいて、３つの重要な事項すなわち「学部の教育課程の編成に関する事項」「学生の入学、卒業その他その在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項」「その学部の教育研究及び運営に関する重要事項」について審議を行っている（web 資料２-⑤-１）。開催は月に１回程度定期的に開催されている。定例の教授会の前には、４つの学科主任、14 のコース・環・講座の主任による主任会議を開催し、教育・運営上の重要事項の連絡・調整を行っている。

また文教育学部には、教育課程や教育方法等を検討する組織として教務事項検討委員会がある（後掲資料３ - ① - Ｂ）。各コース・環から１名が委員として参加し、学部長も出席している。学部あるいは学務部会等の発議で

適宜開催し、教授会に書面及び口頭で報告している。

別添資料･web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
web 資料2－⑤－1	国立大学法人お茶の水女子大学教授会規則第4条 （http://www.ocha.ac.jp/reiki/act/frame/frame110000009.htm ）

【分析結果とその根拠理由】

教授会は、月に１回程度定期的に開催され、重要事項を審議・承認するための必要な活動を行っている。教務事項検討委員会については、すべてのコース・環から委員が選出されており、適切な構成と言える。また、審議の必要な事項に応じて適宜会議が開催され、コース・環の審議をへて議題を検討し、教授会や学務部会に報告・提案を行っている。

複数プログラム選択履修制度への移行により、学生は個々の興味や関心に応じて文教育学部内の他学科のプログラムも副プログラムとして選択することが可能となったが、実際の運用は平成 24 年度より開始される。運用上の問題点がないかどうか、教務事項委員会等の組織による注意深い経過の観察が求められる。

（２）優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

本学部の学科・環・コースの構成は、本学部が扱う幅広く多様な専門分野をバランスよくカバーしている。

【改善を要する点】

特になし

基準３　教員及び教育支援者

（１）観点ごとの分析

観点①：　教員の適切な役割分担の下で、組織的な連携体制が確保され、教育研究に係る責任の所在が明確にされた教員組織編制がなされているか。

【観点に係る状況】

学則にあるように、本学部は４学科を置き、学科内には専門分野に応じた講座を設けている（前掲資料２-①-A）。学生の教育に関しては、文教育学部履修規程第２条（前掲資料２-①-B）にあるように、学科・講座にほぼ対応する履修コースと学科共通のグローバル文化学環を設け、学部長以下、学科長、コース・環主任、学生の指導のための学年担任等を設けている（資料３-①-A）。なお、グローバル文化学環は人文科学・言語文化・人間社会科学の３つの学科に入学した学生が履修できる共通の専門教育プログラムであり、専任教員を配置し他のコースと同様の教育・運営体制をとっている。

【分析結果とその根拠理由】

資料に挙げた「学則」には文教育学部の中に４学科と各学科の中に教員組織としての講座が設置されていることが明記されている。これらの学科と講座は文教育学部に求められる教育の目的と領域に充分対応しているといえる。また、学科長、コース主任、学年担当が『授業時間割』冊子に明記され、学生にも周知されている（別添資料３-①-１）。このように学科、講座、コース・環、学生指導の責任の所在が明確化されている。また、文教育学部内の各種委員についても、資料３-①-Bにあるように、各学科から満遍なく委員を選出し、組織的な連携体制と責任の所在が明確に確保された教員編成体制がなされている。

資料3－①－A　平成 22 年度文教育学部主任等一覧(ファカルティ支援チーム作成､『授業時間割』に掲載)

H22　文教育学部主任等一覧

学部	学科	コース	学年担当				コース主任	学科長
			1年	2年	3年	4年		
文教育学部	人文科学科	哲学・倫理学・美術史	三浦（謙）	秋山	天野	頼住	高島	水野
		比較歴史学	古瀬	小風	岸本	安成	神田	
		地理学	宮澤	長谷川	水野	水野	水野	
	言語文化学科	日本語・日本文学	大塚	市古	荻原	浅田	菅	和田
		中国語圏言語文化	伊藤（美）	和田	宮尾	伊藤（さ）	和田	
		英語圏言語文化	ナガトモ	内田（正）	松崎	ｼｪｲﾌｧｰ	竹村	
		仏語圏言語文化	中村	中村	中村	中村	中村	
	人間社会科学科	社会学	坂本	杉野	平岡	坂本	杉野	米田
		教育科学	冨士原	三輪	池田	棚橋	米田	
		心理学	大森（美）	内藤	菅原	石口	大森（美）	
	芸術・表現行動学科	舞踊教育学	水村	新名	中村	猪崎	新名	永原
		音楽表現	小坂	永原	永原	小坂	永原	
	グローバル文化学環			荒木	熊谷	小林	三浦	

資料3－①－B　平成 23 年度主任･会議構成員一覧表(ファカルティ支援チーム作成)

平成23年度　学科長及びコース主任･会議構成員一覧(文教育学部)

学　科　長	
人文科学科	頼　住
言語文化学科	浅　田
人間社会科学科	米　田
芸術・表現行動学科	新　名

学科長･主任会議構成員		自己点検･評価委員会	
学 部 長	三浦(徹)	委 員 長	三浦学部長
哲学関係	頼　住	委員	
歴史関係	神　田	哲学	三浦(謙)
地理関係	水　野	歴史	神田
日文関係	浅　田	地理	水野
中文関係	和　田	日文	大塚
英文関係	戸　谷	中文	和田
仏文関係	中　村	英文	内田(正)
日語関係	岡　崎	仏文	中村(俊)
社会関係	杉　野	日語	森山
教育関係	米　田	社会	杉野
心理関係	大　森	教育	三輪
舞踊関係	新　名	心理	大森
音楽関係	小　坂	舞踊	新名
グロ文環	小　林	音楽	永原
		グロ文	森山

	学部入試方法検討委員会	教務関係事項検討委員会	情報ネットワーク委員会	広報委員会	FD委員会	人文科学研究編集委員		ピアサポートプログラム運営委員会	
		池田(委員長)	宮澤(委員長)						
哲学	三浦(謙)	秋山	三浦(謙)	宮澤	新井	人文科学	高島	学部長	三浦徹
歴史	安田	新井	安成			言語文化	荻原	コーディネーター	安成
地理	宮澤	長谷川	長谷川			人間社会	平岡	人文科学	安成
日文	荻原	大塚	大塚	和田	大塚	芸術表現	水村	言語文化	宮尾
中文	伊藤(さ)	伊藤(美)	伊藤(さ)			生活科学部	柴坂	人間社会	杉野
英文	野口･シェーファ	清水	戸谷					芸術表現	新名
仏文	田　中	中村(俊)	田　中					グロ文	荒木
日語	森山	加賀美	森山						
社会	(富士原)	(三輪)	杉　野	米田	坂元				
教育	富士原(委員長)	三輪	(杉　野)						
心理	内藤	坂元	石口						
舞踊	中村(美)	杉山	新名	猪崎	永原(委員長)				
音楽	永原	永原	小坂						
グロ文	森山	荒木	森山						

別添資料･web 資料

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
別添資料3－①－1	授業時間割 p. 1

観点②：　学士課程において、教育活動を展開するために必要な教員が確保されているか。また、教育上主要と認める授業科目には、専任の教授又は准教授を配置しているか。

【観点に係る状況】

各学部・学科の専任教員は、大学現況表のとおりで、学科の学生定員と配置される教員数は概ね平準化されておりおおきな偏りは見られない（資料３-②-A)。

資料３-②-Bに基づけば、文教育学部の教員の平均年齢は次の通りである。教授 57.0 歳　准教授 48.0　助教 37.0 歳　全平均 53.3 歳。大学院博士課程修了年齢を 28 歳と仮定し、定年を 65 歳とすれば、仮に教員配置に偏りがないとすれば、平均年齢は 46.5 歳となる。これに比すれば本学部の教員の平均年齢は高いといえる。特に准教授の平均年齢が高い。これは准教授に 30 歳代が少ないことが原因である。女性の教員比率は 42.1%であり、全学平均よりも高い。

資料３-②-Cの学部非常勤講師の担当状況を参照すれば、文教育学部において、専任教員(教授・准教授)が担当する授業割合は全授業では 57.8%であるが、教育上主要と認める授業科目(コア科目と教職科目を除く)では 66%、即ち約 2/3 を専任が担当しており（資料３-②-D)、教育上主要と認める授業科目には、専任の教授又は准教授を配置している（平成 22-23 年度の専任教員の学士課程の平均授業担当コマ数は 6.7 コマ)。

資料3－②－A　学科毎の学生定員と教員配置状況(平成 22･23 年度「文教育学部教授会構成員一覧表」に基づく)

学科	学科定員	平成 22 年度 教授	平成 22 年度 准教授	平成 22 年度 助教	平成 23 年度 教授	平成 23 年度 准教授	平成 23 年度 助教	教員一人あたり学生数 平成 22 年度	教員一人あたり学生数 平成 23 年度
人文科学科	55	12	8	1	13	5	1	2.62 人	2.89 人
言語文化学科	80	13	13	1	15	11	2	2.96 人	2.85 人
人間社会学科	40	14	6	0	14	4	0	2.0 人	2.22 人
芸術・表現行動学科	27	5	4	0	5	4	0	3.0 人	3.0 人
(グローバル文化学環	※26.25	6	2	0	6	1	0	3.25 人	3.57 人)
合　計		44	31	2	47	24	3		

文教育学部全体　　全 77　　全 74

(理事２名含、研究センターを主所属とする教員２名を除く)

※　グローバル文化学環の学生・教員は、人文科学科・言語文化学科・人間社会学科に所属し、学生定員は各学科の 15%以内となっている。本表ではグローバル文化学環の学生・教員数は各学科に含め、参考値として内数を（　）内に示した。

資料3－②－B　文教育学部専任教員年齢構成表(平成 23 年度)

年齢	教授			准教授			講　師			助　教			計		
－	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
65		1	1											1	1
64	2	2	4										2	2	4
63	1	1	2										1	1	2
62	4		4										4		4
61	2	1	3	1		1							3	1	4
60	2	1	3										2	1	3
59	1	2	3										1	2	3
58	1	3	4										1	3	4
57	1	2	3		1	1							1	3	4
56	5		5	1		1							6		6
55	1		1		1	1							1	1	2
54				1		1							1		1
53	2	1	3	2		2							4	1	5
52	3	1	4		1	1							3	2	5
51	1	1	2	1		1							2	1	3
50	1	1	2	2		2							3	1	4
49	1	1	2	1	1	2							2	2	4
48	1	1	2	1		1							2	1	3
47															
46					2	2								2	2
45				1	1	2							1	1	2
44															
43															
42				1	2	3							1	2	3
41					1	1								1	1
40				1		1							1		1
39															
38										1		1	1		1
37					1	1					1	1		2	2
36					1	1				1		1	1	1	2
35															
34															
33															
32															
31															
30															
29															
28															
計	29	19	48	13	12	25				2	1	3	44	32	76

※(理事2名、研究センターを主所属とする教員2名を含む)

資料3－②－C　学部非常勤講師の担当状況（平成 23 年度）

区 分	非常勤講師		開講総時間数	非常勤講師の
	人数(※1)	時間数(a)(※2)	［常勤・非常勤］(b)	担当比率(a/b)
文教育学部	454 人	13,437	31,830	42.2%

※全授業科目を対象として算出。　（出典：教務チーム作成）
※1：非常勤講師人数は実数（教員個人番号から算出）
※2：非常勤講師時間数は延べ数

資料3－②－D　学部非常勤講師の「教育上主要と認める授業科目」担当状況（平成 23 年度）

区 分	非常勤講師		開講総時間数	非常勤講師の
	人数(※1)	時間数(a)(※2)	［常勤・非常勤］(b)	担当比率(a/b)
文教育学部	237 人	6,943	20,415	34.0%

注1：「教育上主要と認める授業科目」とはコア科目と教職科目を除いた科目とする。　（出典：教務チーム作成）
※1：非常勤講師人数は実数（教員個人番号から算出）
※2：非常勤講師時間数は延べ数

【分析結果とその根拠理由】

文教育学部は４学科で構成されるが、各学科・学環の学生定員に対する教員配置の割合は、教員一人あたりの学生数を見れば、極端な偏りはなく、概ね必要な教員が確保されていると言える。しかし、平成 22 年度と 23 年度では教員数が３名減じており、将来さらに運営費交付金の大幅な減額が行われた場合には、学科の下にあるコースや主プログラムに必要な教員が充分確保されない状況が生じる危険性がある。また、教員の平均年齢は平成 23 年度で平均 53.3 歳であり、准教授の 48.0 歳を含めて、高年齢化が進んでおり、今後の若返りが求められる状況である。

観点⑦：　教育活動を展開するために必要な事務職員、技術職員等の教育支援者が適切に配置されているか。また、ＴＡ等の教育補助者の活用が図られているか。

【観点に係る状況】

教育課程を遂行するための事務組織として、教務チーム（17 名）、ファカルティ支援チーム（７名）、学生・キャリア支援チーム（15 名）、及び図書・情報チーム（18 名）がある（資料３-⑦-A）。それぞれの事務分掌については、細かく定めている（資料３-⑦-B）。また学生に対しては、別添資料３-⑦-１にあるように「学生対応事務組織」として事務分掌の状況を提示し、教育活動に対するサポートを明示している。

本学部にはコース・環単位での教務関係の事務を補佐する非常勤職員のアカデミック・アシスタント（ＡＡ）が計 30 名（平成 24 年４月現在）配置されている（資料３-⑦-C）。ただし、ＡＡの雇用は各コース・環に配分されたＡＡのための人件費枠内で行うこととされ、人数や１人当たりの勤務時間には、コース・環ごとに違いがある。また、ＴＡ制度を導入しており、大学院博士前期課程の学生は学部の授業のＴＡを、大学院博士後期課程の学生は学部と大学院博士前期課程の授業のＴＡを務めている。その配置状況を（資料３-⑦-D）に示す。本学部においては、開講授業のうち、演習科目や多人数講義などＴＡを必須とする授業をあらかじめ決めてから、ＴＡを配置するようにしている。したがって、平成 23 年度は全開講授業数 777 のうちＴＡの申請があったのは 143

にとどまっているが、実際に配置されたのは 132 で、申請授業の 92%以上におよぶ。

資料3－⑦－A　教育支援担当事務職員等の配置状況(平成 23 年5月現在)

区 分	事務職員	技術職員	計
教務チーム	17 人	0 人	17 人
ファカルティ支援チーム	7 人	0 人	7 人
学生･キャリア支援チーム	14 人	1 人	15 人
図書･情報チーム	18 人	0 人	18 人
計	56 人	1 人	57 人

※非常勤職員、派遣職員も含む。
※アカデミック・アシスタントは事務職員に含む。

資料3－⑦－B　教務関係事務職員の事務分掌

○国立大学法人お茶の水女子大学事務組織規則(抜粋)

(教務チーム)
第13条　教務チームは、次に掲げる事務をつかさどる。
一　本学の教育改革に係る企画立案及び管理に関すること。
二　教育に係る競争的資金(他のチームの所掌事務に属するものを除く。)に関すること。
三　全学教育システム改革推進本部本部会議その他の会議に関すること。
四　教務事務に関し、総括し、及び連絡調整に関すること。
五　教育課程及び授業に関すること。
六　学生の入学、卒業及び修了に関すること。
七　学生の修学指導に関すること。
八　学籍及び学業成績の管理に関すること。
九　在学、卒業及び修了等の証明に関すること。
十　教育職員免許状に関すること。
十一　教育実習に関すること。
十二　科目等履修生、聴講生、特別聴講学生、特別研究学生、委託生及び研究生に関すること。
十三　入学料及び授業料債権発生に関すること。
十四　学位論文に関すること。
十五　全学教育システム改革推進本部に属するセンターに関すること。
十六　大学院研究･教育委員会に関すること。
十七　学務情報システムに関すること。
十八　所掌事務に係る調査統計及び諸報告に関すること。
十九　その他教務事務に関すること。
(ファカルティ支援チーム)
第14条　ファカルティ支援チームは、次に掲げる事務をつかさどる。
一　各教授会その他の会議に関すること。
二　研究科長及び学部長選考の選挙に関すること。
三　研究科及び学部の教員選考に関すること。
四　研究科及び学部の自己点検･評価及び外部評価に関すること。
五　研究科及び学部の将来構想に関すること。
六　研究科及び学部内各種委員会に関すること。
七　各学部及び大学院間の連絡調整に関すること。
八　所掌事務に係る調査統計及び諸報告に関すること。
九　その他研究科及び学部の管理運営に関すること。
(学生･キャリア支援チーム)
第15条　学生･キャリア支援チームは、次に掲げる事務をつかさどる。
一　学生･キャリア支援に関し、総括し、及び連絡調整に関すること。
二　学生委員会その他の会議に関すること。
三　学生寄宿舎の管理及び民間アパート等のあっせんに関すること。

四　入学料及び授業料の免除等に関すること。
五　日本学生支援機構その他の育英事業団体の奨学金に関すること。
六　大学独自奨学金に関すること。
七　学生の表彰及び懲戒に関すること。
八　学生会館及び課外活動施設の管理に関すること。
九　学生の厚生施設の管理運営に関すること。
十　学生団体に関すること。
十一　学生の課外活動に関すること。
十二　学生のアルバイトのあっせんに関すること。
十三　通学証明書及び学生旅客運賃割引証の発行に関すること。
十四　学生の広報に関すること。
十五　保健管理センターに関すること。
十六　学生支援センターに関すること。
十七　キャリア支援センターに関すること。
十八　学生教育研究災害傷害保険等に関すること。
十九　学資金貸付制度に関すること。
二十　後援会に関すること。
二十一　所掌事務に係る調査統計及び諸報告に関すること。
二十二　その他学生・キャリア支援に関すること。
（図書・情報チーム）
第21条　図書・情報チームは、次に掲げる事務をつかさどる。
一　附属図書館の事務に関し、総括し、及び連絡調整に関すること。
二　附属図書館運営委員会その他の会議に関すること。
三　国立大学図書館協会その他の対外機関との連絡調整及び連携に関すること。
四　附属図書館の企画に関すること。
五　図書館資料(図書、逐次刊行物、視聴覚資料、データベース及び電子リソースを含む。以下同じ。)の発注、受入れ及び支払いに関すること。
六　図書館資料の製本に関すること。
七　図書館資料の分類、目録、装備及び供用に関すること。
八　図書館資料の配架及び保存に関すること。
九　図書館資料の寄贈受入れに関すること。
十　図書館業務システムに関すること。
十一　附属図書館の利用に関すること。
十二　図書館資料の閲覧及び貸出に関すること。
十三　参考調査及び図書館間相互利用に関すること。
十四　文献複写に関すること。
十五　情報基盤整備の企画及び連絡調整に関すること。
十六　事務用コンピュータの利用に関し、総括し、及び連絡調整に関すること。
十七　情報基盤センターとの連絡調整に関すること。
十八　大学資料委員会及び歴史資料館に関すること。
十九　学術情報リポジトリ推進委員会及び教育・成果コレクションに関すること。
二十　附属図書館ホームページに関すること。
二十一　所掌事務に係る調査統計及び諸報告に関すること。

資料3－⑦－C　AAの人数（平成24年4月現在）

所属コース・環・講座	人　数
哲　学	2
比較歴史学	2
地理学	2
日本語・日本文学	3
中国語圏言語文化	3
英語圏言語文化	4
仏語圏言語文化	2

日本語教育	2
社会学	1
教育科学	2
心理学	1
舞踊教育学	1
音楽表現	2
グローバル文化学環	3
合　　計	30

資料3－⑦－D　TAの配置状況(平成 23 年5月現在)　出典：ファカルティ支援チーム作成

区 分	開講授業数	TA申請授業数	TA配置授業数
文教育学部	777	143	132

別添資料･web 資料

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
別添資料3－⑦－1	教育関係等事務職員の事務分掌(『キャンパスガイド』、p.28) (http://www.ocha.ac.jp/campuslife/campus_guide/2012.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

教育課程を遂行するに必要な事務職員が、職掌を定め適切に配置されている。また、より学生に身近な教育支援体制としてＡＡが導入されている。そして、必要な授業には、ほぼＴＡが適切に配置されている。以上から、教育課程を遂行するに必要な教育支援者及びＴＡ等の教育補助者の活用が図られていると判断される。

（２）優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

女性教員の比率が高く、女性リーダーの育成を目指す本学の方針と合致している。

【改善を要する点】

① 財政的理由から専任教員の欠員補充が難しい状況が見通され、今後の動勢によっては、多様な専門分野をもつ現在のカリキュラムを維持するための対策を講じておく必要がある。

② コース・環単位での事務処理のほとんどを、単位ごとに勤務状況が異なる非常勤職員（アカデミック・アシスタント）に依存しており、業務の継続性や学生へのより均質的な支援体制をつくる方向で、今後の検討が望まれる。

基準４　学生の受入

（１）観点ごとの分析

観点①：　入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められているか。

【観点に係る状況】

本学では、平成 12 年度に、それぞれの教育の目的に沿って、学士課程における全学、各学部、各学科等に関する入学者受入方針（アドミッション・ポリシー。以下ＡＰ）を策定し、求める学生像や入学者選抜の基本方針等を明示することとした。学部入試については、入学者選抜要項及び各種入試の学生募集要項に掲載し、公表、周知しているとともに、ウェブサイトからも、これらの募集要項等は自由にダウンロードできるようになっている（別添・web 資料４-①-１～７）。

別添資料･web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
web 資料4－①－1	平成 24 年度　入学者選抜要項 p.1 (http://www.ao.ocha.ac.jp/application/H24_about.pdf)
web 資料4－①－2	平成 24 年度　学生募集要項(一般入学者選抜)p.1 (http://www.ao.ocha.ac.jp/application/h24_general.pdf)
web 資料4－①－3	平成 24 年度　特別選抜学生募集要項　アドミッション･オフィス入試(AO 入試)p.2 (http://www.ao.ocha.ac.jp/application/H24_ao.pdf)
web 資料4－①－4	平成 24 年度　特別選抜学生募集要項　推薦入学　帰国子女･外国学校出身者特別選抜　p1 (http://www.ao.ocha.ac.jp/application/H24_recommendation.pdf)
web 資料4－①－5	平成 24 年度　私費外国人留学生(学部留学生)特別選抜学生募集要項 p1 (http://www.ao.ocha.ac.jp/application/h24_foreign.pdf)
web 資料4－①－6	平成24年度　第3年次編入学学生募集要項 文教育学部 生活科学部(社会人特別選抜を含む)p1 (http://www.ao.ocha.ac.jp/application/h24_bun_sei.pdf)
別添資料4－①－7	平成 21 年度　高大連携特別選抜学生募集要項

【分析結果とその根拠理由】

ＡＰは、学部、各学科の教育目的に沿って策定され、募集要項の配布やウェブサイトにおける掲載等により、多方面に公表、周知されている。以上のことから教育の目的に沿って、求める学生像や入学者選抜の基本方針等が記載されたＡＰが明確に定められていると判断される。

観点②：　入学者受入方針に沿って、適切な学生の受入方法が採用されているか。

【観点に係る状況】

本学部では学科等の募集単位ごとに、ＡＰに沿った学生の受入れを実施している。

一般選抜の前期日程入試においては、大学入試センター試験及び本学の個別学力検査を課し、募集単位ごとに受験科目や配点に配慮することでＡＰに対応したものとなっている（前掲 web 資料４-①-２）。

一般選抜の後期日程入試、推薦入学特別選抜、帰国子女・外国学校出身者特別選抜、私費外国人留学生特別選抜、第３年次編入学学生選抜においては、学力検査等に加え、小論文試験や、面接又は口述試験等も行い、ＡＰ

に沿った能力や適性を判定している（前掲web資料４-①-１，２，４～６）。

ＡＯ入試では、ＡＰに掲げた人物像を重視するため、学際性、国際性、コミュニケーション能力等について、文系理系双方の講義や英語の講義を聞いてグループ討議などを行い、それを踏まえて小論文を論述させるなどの試験を行っている（前掲web資料４-①-３）。

高大連携特別選抜では、大学教員との連携による授業（「選択基礎」）を履修している附属高校生徒を対象とし、授業の履修過程において、募集単位のＡＰとの適合性を判定している（前掲別添資料４-①-７）。

【分析結果とその根拠理由】

ＡＰに沿った学生を選抜するため、受験科目や配点への配慮（一般入試）、小論文や面接の実施（推薦入試、一般入試後期）、グループ討議や英語講義の実施（ＡＯ入試）、連携授業による適性の確認（高大連携特別選抜）などを行っている。以上のことから、ＡＰに沿って適切な学生の受入方法が採用されていると判断される。

観点③：　入学者選抜が適切な実施体制により、公正に実施されているか。

【観点に係る状況】

入試実施体制として、全学の入学試験実施委員会の下に、学部入試実施部会を設置している（web資料４-③-１～２）。入学者選抜に係る各種の要項については、教授会の検討を経て入試実施部会で決定している。

実施に当たっては、学部入試実施部会の下に、入試方法専門部会、入試問題専門部会、ＡＯ入試専門部会を置いている（資料４-③-Ａ～Ｃ）。入試問題専門部会では一般選抜における作問の取りまとめを、入試方法専門部会では入試の実施方法に関する具体的な検討を行い、ＡＯ入試専門部会では、ＡＯ入試に関する企画や実施等を担当している。入試の実施に係る業務や採点等は、学部入試実施部会が直接掌握し、運営している。

合格者判定については、入試実施部会の定める判定方針のもとに、厳密な採点とその検査を経て、多数の集計員による厳格な成績集計確認のもとに判定資料が作成される。この資料に基づき各学科で判定原案を作成し、学部教授会の議を経て合格者の決定を行っている。各入試の応募・合格判定・入学の状況については、教育研究評議会および学部教授会に報告され、年度末には入試実施部会で総括を行っている。

なお、情報公開の観点から、一般選抜終了後には、各出願区分の合格者数、合格者平均点等の情報をウェブサイトで公開しており（web資料４-③-３）、希望者には入試成績の開示を行っている（前掲web資料４-①-２、p. 31）。

資料4－③－Ａ　入試方法専門部会細則

（設置）

第1条　国立大学法人お茶の水女子大学学部入試実施部会規程第7条第1項の規定に基づき、学部入試実施部会に入試方法専門部会（以下「専門部会」という。）を置く。

（趣旨）

第2条　この細則は、学部入試実施部会規程第7条第2項の規定に基づき、専門部会に関し必要な事項を定める。

（審議事項）

第3条　<u>専門部会は、学部入試実施部会のもとで、入学者選抜方法について具体的方策を検討するとともに、その実施にあたる。</u>

資料4－③－B　入試問題専門部会細則

（設置）
第1条　国立大学法人お茶の水女子大学学部入試実施部会に入試問題専門部会（以下「専門部会」という。）を置く。
（趣旨）
第2条　この細則は、学部入試実施部会規程第7条第2項の規程に基づき、専門部会に関し必要な事項を定める。
（審議事項）
第3条　専門部会は、学部入試実施部会委員のもとで、一般選抜に係る学力検査実施教科・科目について、出題の具体的措置を定めるとともに、その実施にあたる。

資料4－③－C　アドミッション・オフィス入試専門部会細則

（設置）
第1条　国立大学法人お茶の水女子大学学部入試実施部会規程第7条第1項の規定に基づき、学部入試実施部会にアドミッション・オフィス入試専門部会（以下「専門部会」という。）を置く。
（趣旨）
第2条　この細則は、学部入試実施部会規程第7条第2項の規定に基づき、専門部会に関し必要な事項を定める。
（審議事項）
第3条　専門部会は、学部入試実施部会のもとで、アドミッション・オフィス入試方法について具体的方策を検討するとともに、その実施にあたる。

別添資料・web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
web 資料4－③－1	入学試験実施委員会規則 （http://www.ocha.ac.jp/reiki/act/frame/frame110000029.htm ）
web 資料4－③－2	学部入試実施部会規程 （http://www.ocha.ac.jp/reiki/act/frame/frame110000030.htm ）
web 資料4－③－3	お茶の水女子大学入試ウェブサイト（合格者平均点掲載ページ） （http://www.ao.ocha.ac.jp/average.html ）

【分析結果とその根拠理由】

学生募集要項等の作成から判定資料の作成まで、学部入試実施部会が全過程を掌握し実施している。合否判定は厳密に作成された資料を基にした学科原案を教授会で審議することによってなされ、入学者選抜の公正さが確保されている。また、入試の集計データをウェブサイトで公表するとともに、個人に対する入試成績開示を行い、透明性を高めている。以上のことから、実際の入学者選抜が適切な実施体制により、公正に実施されていると判断される。

観点④：　入学者受入方針に沿った学生の受入が実際に行われているかどうかを検証するための取組が行われており、その結果を入学者選抜の改善に役立てているか。

【観点に係る状況】

入試の企画、広報等を行っている組織として、教育機構内に入試推進室が設置され、各種入試の問題点や改善点を抽出し、ＡＰに沿った学生の受入れが行われたかを検証している（資料４-④-A）。また、新入生に対して

アンケート調査を実施し、入試改善のための基礎情報を収集し、分析している（別添資料４-④-１）。文教育学部内では入試方法検討委員会を設置し、学部の入試方法に関する問題を検討している（別添資料４-④-２）。具体的には上記の基礎資料の活用や入試推進室との連携のもとに、センター試験の科目指定の検討、推薦入試のあり方に関する検討、第３年次編入学試験の定員に関する検討などを行い（別添資料４-④-３）、平成24年度入試では芸術・表現行動学科音楽表現コースの入学定員を改訂した（推薦１名増、後期１名減）入学者アンケートでは、文教育学部を第１志望とする入学者の割合は77.4%、文教育学部及び学科のＡＰを参考にしたと回答する比率は59.9%（別添資料４-④-１ p.4, p.19）である。

資料４－④－Ａ　学生の受入状況を検証する組織

○国立大学法人お茶の水女子大学機構規則(抜粋)
（業務） 第12条　入試推進室は、次に掲げる業務を行う。 一　入学者選抜に関する将来構想計画及び企画立案、実施に関すること。 二　その他所掌業務に関し必要なこと。

別添資料･web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
別添資料4－④－1	2011 年度新入生アンケート集計(抜粋版 p.4, p.19)
別添資料4－④－2	入試方法検討委員会要項
別添資料4－④－3	2011 年度第2回入試方法検討委員会議事録

【分析結果とその根拠理由】

以上から、ＡＰに沿った学生の受入れが実際に行われているかどうかを検証するための取組みが行われており、その結果を入学者選抜の改善に役立てていると判断される。

観点⑤：　実入学者数が、入学定員を大幅に超える、又は大幅に下回る状況になっていないか。また、その場合には、これを改善するための取組が行われるなど、入学定員と実入学者数との関係の適正化が図られているか。

【観点に係る状況】

入学定員に対する実入学者数の過去３年間の割合は、入学試験実施状況に示すとおりである(資料４-⑤-A)。文教育学部に関しては適正な値となっている。第３年次編入学試験における入学定員に対する実入学者数の過去３年間の割合は、第３年次編入学試験実施状況に示すとおりである（資料４-⑤-B)。平成22年度は定員を大きく上回っているが、平成23、24年度においては適正な値となっている。

実入学者数の改善に関する取組みは、入試推進室等で入学者動向を分析するとともに、役員会等で入学者数の管理に関する検討を行っている。学部内においては第３年次編入学試験について、入試方法検討委員会において検討を行っている（前掲別添資料４-④-２、３）。

資料４－⑤－Ａ　入学試験実施状況

学部名	平成22年度					平成23年度					平成24年度					3カ年平均				
	入学定員	志願者数	入学者数	志願倍率	定員充足率	入学定員	志願者数	入学者数	志願倍率	定員充足率	入学定員	志願者数	入学者数	志願倍率	定員充足率	入学定員	志願者数	入学者数	志願倍率	定員充足率
文教育学部	202	1,100	218	5.45	1.08	202	1,090	216	5.40	1.07	202	1,108	213	5.49	1.05	202	1,099	216	5.44	1.07
人文科学科	55	344	61	6.25	1.11	55	300	61	5.45	1.11	55	393	57	7.15	1.04	55	346	60	6.28	1.08
言語文化学科	80	388	87	4.85	1.09	80	409	83	5.11	1.04	80	347	86	4.34	1.08	80	381	85	4.77	1.07
人間社会科学科	40	234	43	5.85	1.08	40	249	43	6.23	1.08	40	235	42	5.88	1.05	40	239	43	5.98	1.07
芸術・表現行動学科	27	134	27	4.96	1.00	27	132	29	4.89	1.07	27	133	28	4.93	1.04	27	133	28	4.93	1.04

（出典：入試チーム作成）

資料４－⑤－Ｂ　第３年次編入学試験実施状況

区分		募集人員		平成22年度						平成23年度						平成24年度					
				志願者数		合格者数		入学者数		志願者数		合格者数		入学者数		志願者数		合格者数		入学者数	
		一般	社会人	一般	社会人	一般	社会人	一般	社会人	一般	社会人	一般	社会人	一般	社会人	一般	社会人	一般	社会人	一般	社会人
文教育学部	哲学・倫理学・美術史	10名		5	0	1	0	1	0	6	1	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0
	比較歴史学			4	0	1	0	1	0	7	0	1	0	1	0	1	1	0	0	0	0
	地理学			2	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	日本語・日本文学			5	1	0	1	0	1	10	0	0	0	0	0	13	1	0	0	0	0
	中国語圏言語文化			5	0	2	0	2	0	7	1	1	1	1	1	3	0	1	0	1	0
	英語圏言語文化			25	3	2	0	2	0	19	2	1	1	1	1	23	4	1	0	1	0
	仏語圏言語文化			6	0	1	0	1	0	5	1	1	0	1	0	5	2	1	1	1	1
	社会学			15	1	2	0	2	0	11	1	2	0	2	0	14	1	2	0	2	0
	教育科学			12	2	1	1	1	1	8	1	1	1	1	1	6	3	1	1	1	1
	心理学			2	2	2	0	2	0	4	0	1	0	1	0	5	0	1	0	1	0
	音楽表現			1	2	1	0	1	0	1	1	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0
	グローバル文化学環			16	3	2	0	2	0	13	0	1	0	1	0	18	1	1	0	1	0
	計	10名		98	14	16	2	16	2	92	8	9	3	9	3	94	17	8	2	8	2

（出典：入試チーム作成）

【分析結果とその根拠理由】

入学定員に対する実入学者の割合は、入学定員に対して実入学者数が大幅に超える、あるいは、大幅に下回る状況にはなっていない。平成22年度の第３年次編入学試験についてはやや高めであるものの、平成23年度以降は適正な水準となっており、入学定員と実入学者数との関係の適正化が図られていると判断される。

（２）優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

特になし

【改善を要する点】

特になし

基準５　教育内容及び方法

（１）観点ごとの分析

＜学士課程＞

観点①：　教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められているか。

【観点に係る状況】

本学部のカリキュラム・ポリシーは学部全体として３項目、そしてさらに学科ごとに２～４項目ずつに明文化し、全学（５項目）及び他学部のものと並んでウェブサイト上にて広く公表している（資料５-①-A）。

資料5－①－A　文教育学部の教育課程編成･実施方針(学部全体及び人文科学科の例)

文教育学部の教育課程編成･実施方針

1. 人間の文化と社会への関心を核とし、人文･社会科学系の学問を中心とした学術研究のための確かな基礎と、国際的に通用する問題発見･解決能力、情報処理能力、コミュニケーション能力の養成を目指す。
2. 人文科学、言語文化学、人間社会科学、芸術表現行動学にかかわる多彩な専門教育プログラムと専門科目を開設し、講義･演習･実習などの多様な形態の授業を通して、学修者のニーズに応じて、人間の文化と社会の複雑な事象を追究･分析するために必要な知識や技能を習得させることを目指す。
3. 学科により、高等学校･中学校･小学校･幼稚園教員免許取得ならびに、社会調査士、学芸員、社会教育主事資格取得のための科目を設置する。

(1) 人文科学科

人間の文化について、深く幅広い知識を習得し、それらに立脚したオリジナルな問いを自ら見つけ出し、必要な資料･データを収集･整理した上で、独自の論理を築き上げる総合的な力を身につけさせることを目指す。

人文科学科が開設する専門教育プログラムの編成方針は以下のとおりである。

- ① 哲学･倫理学･美術史プログラムは、人類が求めてきた真･善･美という価値に関わる事象について、専門的かつ体系的知識を習得するとともに、それらの価値の問い直しをはかることを通じて、人間について深くまた多角的に分析･考察する力を養成することを目指す。
- ② 比較歴史学プログラムは、日本、アジア、西洋という地域軸と古代から現代までの時間軸を手がかりに、相互の比較や連関･交流に着目することで社会全体を俯瞰する視角を身に付け、社会の全体像を総合的に把握できるような柔軟な思考力を養うことを目指す。
- ③ 地理環境学プログラムは、研究では文系と理系の知をローカルな地域･場所で考え、結びつける総合科学をめざし、実践では現実的な諸問題の解決のために、ローカル、ナショナル、グローバルの地理的マルチスケールのセンスを養成することを目指す。

（以下、言語文化学科、人間社会科学科、芸術･表現行動科学科、グローバル文化学環と続く）

本学ウェブページ:http://www.ocha.ac.jp/program/curriculum_policy/undergrad.html

【分析結果とその根拠理由】

カリキュラム・ポリシーは、ウェブサイトにて広く一般に向けても公表されている通り、大学全体として５項目、文教育学部として３項目、さらに学科として２～４項目に、明確かつ階層的に定められていると言える。

観点②：　教育課程の編成・実施方針に基づいて、教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切なものになっているか。また、選択履修制度は定着しているか。

【観点に係る状況】

本学部は、文教育学部履修規程第３条（資料５-②-Ａ）に示すコア科目・専門教育科目（プログラム制をとらない場合は専攻科目・関連科目と呼ぶ）・学部共通科目・全学共通科目・教職共通科目・教職に関する科目及び外国人留学生特別科目を設置する。教育目的ならびに授与学位、各学科の専門性に応じて、必修及び選択必修科目と自由選択科目とに所定単位が配分されている（資料５-②-Ｂ）。１年次には一般教養の修得を主眼とした文理融合リベラルアーツや外国語をはじめとするコア科目と各学科の概論などの学科共通科目とを中心とし、２年次には主プログラムを選択決定し専門教育科目の履修が中心となっていく。更に３年次から第二のプログラムとして強化プログラム、又は副プログラム・学際プログラムを選択決定して履修する（資料５-②-Ｂ（別表第１-１備考４～７）、資料５-②-Ｃ、Ｄ）。主プログラムや強化プログラムなどの各プログラムの構成科目表では難易度の目安となるカラーコードベンチマーク（CCBM）が明記されている（資料５-②-Ｅ）。芸術・表現行動学科については、実技を中心とする専門教育の特色を生かすためプログラム選択制をとらないが、副プログラムを開設し他学科学生がこれを選択履修することができる。

資料5－②－Ａ　国立大学法人お茶の水女子大学文教育学部履修規程

○国立大学法人お茶の水女子大学文教育学部履修規程
（授業科目の区分） 第3条　授業科目は、コア科目、専門教育科目、専攻科目、関連科目、学部共通科目、全学共通科目、教職共通科目、教職に関する科目及び外国人留学生特別科目とする。 2　コア科目は、文理融合リベラルアーツ、基礎講義、情報、外国語(英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語及び朝鮮語)及びスポーツ健康とする。 3　専門教育科目は、主プログラム、強化プログラム、副プログラム及び学際プログラムを構成する科目とする。 4　専攻科目は、各学科・環において設置する科目とする。 5　関連科目は、芸術・表現行動学科に関連の深い科目であって、必修又は選択として指定する。 6　各学科・環で共通して履修できる科目として、学部共通科目を置く。 7　全学で共通して履修できる科目として、全学共通科目を置く。 8　教育職員免許法(昭和24年法律第147号)及び教育職員免許法施行規則(昭和29年文部省令第26号)に定める教職に関する科目を置く。また、教科に関する科目として教職共通科目を置く。 9　外国人留学生に対して、外国人留学生特別科目を置く。

資料５－②－B　国立大学法人お茶の水女子大学文教育学部履修規程　別表第1-1、1-2

別表第１－１（第６条関係）

学科別＼科目区分	必修及び選択必修の科目・単位								自由に選択して履修する科目・単位									卒業に必要な履修単位数
	コア科目					専門教育科目(必修プログラム)												
	文理融合リベラルアーツ	基礎講義	情報	外国語	スポーツ健康	主プログラム	強化プログラム	副プログラム	学際プログラム	コア科目	専攻科目	学部共通科目	他学科の専攻科目	他学部の科目	全学共通科目	教職共通科目	教職に関する科目	必修以外の選択プログラム	
人文科学科	18			16	2	44	20			24									124
言語文化学科	18			20	2	44	20			20									124
人間社会科学科	18			10	2	48	20			26									124
グローバル文化学環	18			18	2	44	20			22									124

備考
1　情報処理演習（情報）２単位は、必修とする。
2　外国語の必修単位に関しては、別表第３を参照すること。また、外国語の履修方法は別に定める。
3　スポーツ健康は、スポーツ健康実習２単位を必修とし、その履修方法は別に定める。
4　主プログラムは、所属学科から選択すること。
5　強化プログラム・副プログラム・学際プログラムは、所属学部のプログラムから一つを選択すること。
6　強化プログラムは、同一名の主プログラムを選択していることが履修要件となる。
7　選択している主プログラムと同領域の副プログラムを選択することはできない。
8　必修以外の選択プログラムは、別表第２の所属学科が指定するプログラム選択一覧に従い、副プログラム、学際プログラムから選択すること。
9　教職に関する科目（教職概論、教育実習及び教職実践演習は除く。）の単位については、10 単位までを自由に選択して履修する科目・単位として取り扱う。
10　外国人留学生特別科目（外国人留学生対象）の単位については、20 単位までをコア科目として取り扱う。ただし、スポーツ健康実習の単位に充てることはできない。
11　グローバル文化学環履修者は、所属学科によらず、グローバル文化学環の欄に記載される科目・単位を履修すること。また、必修プログラムとして、グローバル文化学主プログラムと所属学科の副プログラムを履修すること。

別表第１-２（第６条関係）

学科別＼科目区分	必修及び選択必修の科目・単位							自由に選択して履修する科目・単位								卒業に必要な履修単位数
	コア科目					専攻科目	関連科目	コア科目	専攻科目	学部共通科目	他学科の専攻科目	他学部の科目	全学共通科目	教職共通科目	教職に関する科目	必修以外の選択プログラム	
	文理融合リベラルアーツ	基礎講義	情報	外国語	スポーツ健康												
芸術・表現行動学科	18			10	2	64		30								124

備考
1　情報処理演習（情報）２単位は、必修とする。
2　外国語の必修単位に関しては、別表第３を参照すること。また、外国語の履修方法は別に定める。
3　スポーツ健康は、スポーツ健康実習２単位を必修とし、その履修方法は別に定める。
4　必修以外の選択プログラムは、別表第２の所属学科が指定するプログラム選択一覧に従い、副プログラム、学際プログラムから選択すること。
5　教職に関する科目（教職概論、教育実習及び教職実践演習は除く。）の単位については、10 単位までを自由に選択して履修する科目・単位として取り扱う。
6　外国人留学生特別科目（外国人留学生対象）の単位については、20 単位までをコア科目として取り扱う。ただし、スポーツ健康実習の単位に充てることはできない。

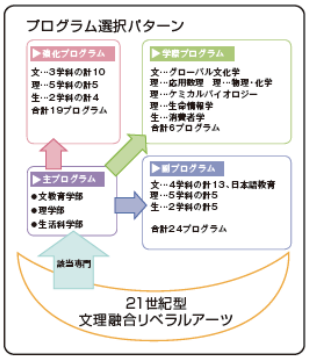
履修ガイド（平成24年度）p.47, pp.184-5：http://www.ocha.ac.jp/campuslife/registration/index.html

資料5－②－C　プログラムの選択履修について

皆さんは、自分の目標に合わせてプログラムを設定していくことになりますが、一つ目、二つ目のプログラム（第１、第２プログラム）の設定は、自分の所属する学部、学科の提供するものから選択しなければなりません。また、三つ目のプログラム（第３プログラム）は、それぞれ他学科、他学部の提供する副プログラムや学際プログラムからも選択可能ですので、「Ⅱ　授業科目一覧」を見て確認してください。

また、プログラムの種類・内容及び単位数の関係については、次の表を参照してください。

第１プログラム	必　　修	主プログラム（自分の所属する学科から選択）
第２プログラム	選択必修	強化プログラム又は副プログラム又は学際プログラム（自分の所属する学部内から選択）
第３プログラム	自由選択	副プログラム又は学際プログラム



履修ガイド（平成24年度）p.17：http://www.ocha.ac.jp/campuslife/registration/index.html

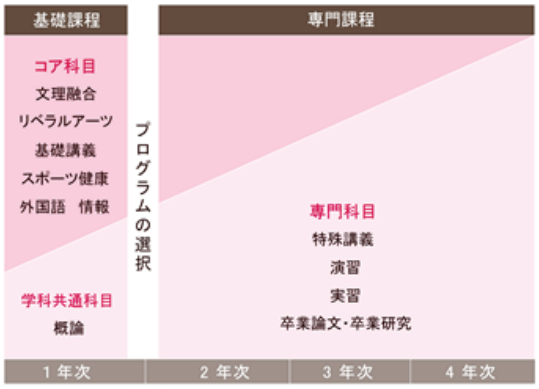
資料5－②－D　複数プログラム選択履修制度

主プログラム（コース・環）を自分で選ぶ

人文科学科・言語文化学科・人間社会科学科の学生は、2年次に進む時に主プログラムを選び、コース・環に進む制度になっています。主プログラムは、自学科のコースのいずれか、またはグローバル文化学を選びます。芸術・表現行動学科の学生の場合は、入学時のコースに進みます。コース・環は、各種プログラム（主・強化・副・学際）を提供し運営していく組織であり、そしてプログラムの科目群を担当する教員や、主プログラムを選択した学生が所属する組織、すなわち専門教育を学んでいく足場、拠り所となるところです。

1年生向けに専門の基礎科目や入門科目が置かれており、主プログラムの選択の参考にすることができます。そして、1年生の時には、それらの科目や文理融合リベラルアーツ・基礎講義などで広い視野から多角的に問題を見ることを学びます。

主プログラムを選択できる上限人数はゆるやかに設定されていますので、ほとんどの場合は希望するコース・環に進むことができます。上限を大幅に超えた場合や各コース・環が定めた条件を満たしていない場合は、一定の方法で選考をおこないます。



プログラムの組み合わせを自分で選ぶ

自分で選んだ主プログラムが、専門の学習の主軸となります。この主プログラムにどのプログラムを結合させるか、さらに自分で選びます。主プログラムでの学習を徹底するならそのコースの強化プログラム、別の分野を副専攻的に学んで学際研究を目指すなら、他コースまたは他学科設置の副プログラムあるいはグローバル文化学環の学際プログラムを選びます。さらに第三のプログラムとして、文教育学部あるいは他学部のプログラムを履修することもできます。なお、芸術・表現行動学科の学生も、第三のプログラムを選択して履修することができます。

グローバル文化学環と日本語教育副プログラム

グローバル文化学環の場合は、グローバル文化学主プログラムを専門教育の主軸とし、自分が在籍する学科のいずれかのコースの副プログラムを組み合わせて学際的に学習します。また、人文科学・言語文化・人間社会科学科の各コースの主プログラムを選んだ人も、グローバル文化学学際プログラムを選ぶことができます。

また言語文化学科では日本語教育副プログラムが提供され、日本語を母語としない人の日本語教育やコミュニケーションのあり方を学ぶことができます。このように学部全体で多彩なプログラムの組み合わせにより、多様なキャリアパスを実現することができます。

卒業後の進路の例	履修の仕方の例	
	主プログラム	副または学際プログラム
アジアで国際協力	グローバル文化学	中国語圏言語文化
将来は国際公務員	グローバル文化学	社会学
海外の企業で働く	英語圏言語文化	グローバル文化学
教員になる	教育科学ほか	日本語教育

文教育学部ウェブサイト（文教育学部の概要）：http://www.li.ocha.ac.jp/gakubuannai.html

資料5－②－E　カラーコードベンチマーク（英語圏言語文化コースの例）

言語文化学科　英語圏言語文化コース

主：44 単位	強化：20 単位

主プログラム

①教育目標

英語圏言語文化主プログラムは、英語圏の言語文化に関する研究を専攻し、柔軟な英語運用能力を習得するとともに、学術的研究の成果や深い思想を英語で正確に表現し、自信を持って広く世界に発信できる能力を身につけることを目指すものです。スピーキングの技能に関して言えば、単なる日常的会話のレベルにとどまることなく、将来は海外の研究者・知識人と対等に議論できるレベルの技能の習得を目標とします。

②内容・構成

本プログラムは、英語で学術的論文を書きまたその内容を口頭で正確に発表できるようになるための、方法論的問題を学ぶ科目群および基礎から中級レベルに至る専門的知識・教養を学ぶ科目群を中心に組まれています。また中学・高等学校の教員免許（英語）を取得するために必要な科目の単位も、本プログラムの中で取得できるように組まれています。本プログラムをとる学生は、最終年次に英語で卒業論文を提出することが義務づけられています。

強化プログラム

①教育目標

英語圏の言語文化についての高度な専門的知識・技能を身につけるためのプログラムである。本プログラム履修者は、卒業後国際社会で通用する洗練された英語力と、豊かにして深い文化的教養を身につけて巣立つことを期待されています。また卒業後に大学院進学を目指す人が履修するのにも、ふさわしいプログラムです。

②内容・構成

英語圏言語文化主プログラムが、専門的研究の基本的方法論を学び、英語で学術論文を書く技術を修得するための科目を中心に組まれているのに対し、本プログラムは主としてより専門性の高い科目群を中心に構成されています。分野にとらわれず一般性の高い方法論等を学ぶ科目群においては、最終的には上級レベルまで到達すべく組まれています。

授業科目	単位	履修年次	CCBM	プログラム◎必修○選択			
				主プログラム	備考	強化プログラム	備考
日本文学概説	2	Ⅰ～Ⅱ	Pink	○	以下の科目から８単位選択		
日本語学通論	2	Ⅰ～Ⅱ	Pink	○			
英語圏言語文化入門	2	Ⅰ～Ⅱ	Pink	○			
中国現代文学史	2	Ⅰ～Ⅱ	Pink	○			
中国古典文学史（宋～清）	2	Ⅰ～Ⅱ	Pink	○			
ヨーロッパ言語文化論	2	Ⅰ～Ⅱ	Pink	○			
言語学入門Ⅰ	2	Ⅰ～Ⅱ	Pink	○			
言語学入門Ⅱ	2	Ⅰ～Ⅱ	Pink	○			
英米文学演習（初級）	2	Ⅱ～Ⅳ	Pink	◎			
英作文演習（初級）	2	Ⅱ	Pink	◎			
英会話演習（初級）	2	Ⅱ	Pink	◎			
対照表現学演習Ⅰ	2	Ⅲ～Ⅳ	Red	◎			
対照表現学演習Ⅱ	2	Ⅲ	Red	◎			
英文法Ⅰ	2	Ⅰ	Pink	◎			
英文法Ⅱ	2	Ⅰ	Pink	◎			
卒業論文	8	Ⅳ	Red	◎			
特別演習（言語研究方法論）Ⅰ	2	Ⅲ	Red	○	以下の単位から６単位選択		
特別演習（言語研究方法論）Ⅱ	2	Ⅲ～Ⅳ	Red	○			
特別演習（英米文学研究方法論）Ⅰ	2	Ⅲ	Red	○			
特別演習（英米文学研究方法論）Ⅱ	2	Ⅲ～Ⅳ	Red	○			
特別演習（作品分析）	2	Ⅳ	Red	○			
特別演習（言語資料分析）	2	Ⅳ	Red	○			
英語学入門	2	Ⅱ	Pink	○	○の科目から８単位選択		
英語学概論	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○			
英文法演習	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○		○	以下の科目から６～８単位選択
英語音声学演習	2	Ⅱ	Green	○		○	
英文学史Ⅰ	2	Ⅱ～Ⅲ	Green	○		○	
英文学史Ⅱ	2	Ⅱ～Ⅳ	Green	○		○	

『履修ガイド（平成24年度）』p.61：http://www.ocha.ac.jp/campuslife/registration/index.html

【分析結果とその根拠理由】

観点①で示したカリキュラム・ポリシーに基づいて、人文科学科・言語文化学科・人間社会科学科及びグロー

バル文化学環は複数プログラム選択履修制度による教育課程を明確かつ体系的に編成していると言える。芸術・表現行動学科はその専門性・特殊性に相応しい専門教育カリキュラム編成を取りつつ、他学科他学部学生にむけた副プログラムを開設している。これらの複数プログラム選択履修制度によって授与学位（人文科学）に相応しい教育内容を体系的に構成しつつ、各授業科目にカラーコードベンチマーク（CCBM）を明記することで、カリキュラム構成上も学生の授業選択上も適切な水準を達成できるよう設計されており、体系的な専門教育と主体的な選択履修や学際性を制度的に保証しているといえる。

観点③：　教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。特に学生の満足度や不満を把握しているか。

【観点に係る状況】

本学部では、全学科を横断したグローバル文化学環の設置（資料５-③-Ａ）、観点②において詳述した複数プログラム選択履修制度（前掲資料５-②-Ｃ，Ｄ）、他学部科目履修の一定範囲での卒業単位化（前掲資料５-②-Ｂの「他学部の科目」）によって、多様で学際的な学問的知識の探究と修得を可能にしている。グローバルCOEプログラムによる先進的な研究成果を学部授業科目「格差社会の人間発達科学論Ａ・Ｂ」として開講している（資料５-③-Ｂ）。複数プログラム選択履修制度の導入にあたっては、日本の国際化に寄与する「日本語教育副プログラム」を設置した。国内大学・国外大学との間で単位互換や交換留学を行っており（資料５-③-Ｃ、Ｄ、Ｅ）、インターンシップ制度も全学共通科目「インターンシップ」として正規カリキュラムの中に位置付けられている（資料５-③-Ｆ）。編入生に対しては、定められた上限単位数まで、入学前の大学での取得単位を認定している（資料５-③-Ｇ）。

学生の満足度などについては、平成22年度に「お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」が実施され、意味のあった教養教育・専門教育の割合、専攻科目の配置の適切性や難易度、少人数教育・教員指導への評価など、多岐にわたる満足度について詳細に調査・分析がなされている（資料５-③-Ｈ）。また平成23年度には「キャリア意識調査」が実施されている（資料５-③-Ｉ）。

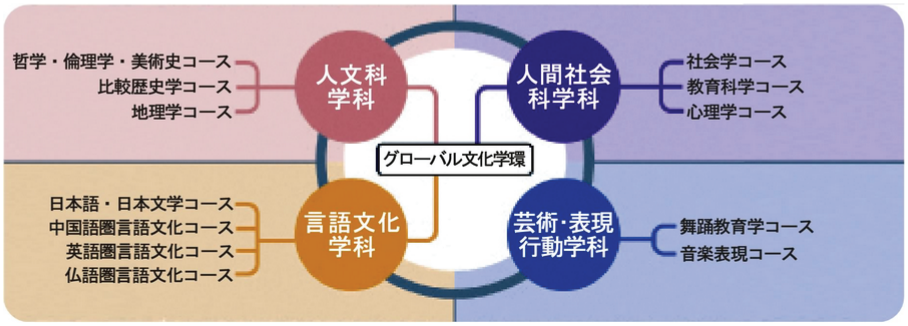
資料5－③－A　学科横断的なグローバル文化学環の設置

文教育学部の概要

特色と組織

文教育学部には、人間をとりまくマクロな社会や環境から、ミクロな個々人の思想や心理や言語、あるいは文学・美術や音楽・舞踊といった芸術まで、多彩な研究分野があり、そこでは「生きている」人間とその文化や社会への関心が核となっています。法学や経済学が目にみえるルールを扱うとすれば、普段は意識されにくい人間社会の暗黙のルール（規範や掟）を探り出していくところに、そのおもしろさがあるといえるでしょう。教育や研究の対象は、古代から現代へ、日本から世界へと広がり、誕生から死まで人間の一生を追いかけます。

文教育学部は、人文科学科、言語文化学科、人間社会科学科、芸術・表現行動学科という4つの学科からなり、各学科に複数のコースと、学科の枠を越えたグローバル文化学環とが設置され、専門教育のプログラムを提供します。人間が長い歴史のなかで作りあげてきた文化や社会のあり方を研究するとともに、グローバル化する世界のなかで生きる力を養います。「複数プログラム選択履修制度」では、自分のニーズや個性にあわせてプログラムを選び、ひとつの専門を深めることも、複数の専門分野を広く学ぶこともできます。



文教育学部ウェブサイト（文教育学部の概要）：　http://www.li.ocha.ac.jp/gakubuannai.html

資料5－③－B　「格差社会の人間発達科学論」のシラバス（Aの例）

格差社会の人間発達科学論A [12N0066]

科目名	格差社会の人間発達科学論A [12N0066] Science of Human Development in Gap widening Society A
科目区分・科目種	全学共通科目
クラス	全学科
単位数	2.0単位

担当教員・所属	菅原　ますみ [文教育学部]
	松本　聡子 [文教育学部]
	李　美静 [文教育学部]
	室橋　弘人 [文教育学部]
	猪股　富美子 [文教育学部]
	王　杰 [文教育学部]
主担当学科	人間社会科学科（教育）
連絡場所	

履修年次	1 ～ 4年
学期	前期
曜日・時限	水曜 7.0～8.0
教室	①共通講義棟3号館第1講義室

授業の形態

講義,討論

教科書・参考文献

教科書は使用しません。参考文献は授業のなかで適宜指示・紹介します。

評価方法・評価割合

小論文(レポート)=70%、締切9/19(水)　授業内で回収,出席=30%

主題と目標

本学グローバルCOEプログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」(2007~2011年度)では、社会的格差と人間発達に焦点を当て、社会学、教育学、心理学を組み合わせた学際的な観点から、様々な研究を行ってきました。本講座はその成果を本学教育に還元することを目的としています。
　講座A「子どもの発達に見る格差:地域・学校・家庭」では、幼児期から青年期に至る子どもの発達過程に伴う格差について集中的に取り上げていきます。幼児期の言語発達に見られる格差、幼児～児童期の養育環境の違いがその後の発達に与える影響、中高生におけるクオリティオブライフなどの格差の現状、青少年とメディアとの関わりが引き起こす諸問題、進路選択における格差の形成といった話題について、各分野を専門とする講師がグローバルCOEプログラムの研究成果を元に講義を行います。これにより社会の様々な側面に存在する格差について理解を深め、今後考えていくきっかけとなることを目標とします。

授業計画

本講義の授業計画は以下の通りである。

1.ガイダンス(担当講師全員)
2.青少年有害情報対策から読み解く「子どもとメディア」ー日韓米比較(猪股　冨美子)
3.地域格差と多文化・多言語環境に生きる子どもの言語教育(李　美静)
4.子どもの言語発達における家庭と学校の影響要因(李　美静)
5.養育環境の心理学的検討:環境心理学の視点から(松本　聡子)
6.養育環境における格差と子ども発達(松本　聡子)
7.GCOE学校調査に見る中高生の格差(Ⅰ):統計的に差を捉えるとはどういうことか(室橋　弘人)
8.GCOE学校調査に見る中高生の格差(Ⅱ):個人差と学校間差を分離する(室橋　弘人)
9.GCOE学校調査に見る中高生の格差(Ⅲ):QOLの時系列的な変化の差を捉える(室橋　弘人)
10.進路選択と格差の形成(王　傑)
11.子どもの健康とメディアリテラシーー「格差」に基づく事例研究(猪股　冨美子)
12.モバイル社会における"ネットいじめ"の現状と教育的介入の課題(猪股　冨美子)
13.学部生の進路選択ーキャリア指導の役割を考える(王　傑)
14.と15.シンポジウム

学生へのメッセージ

この授業を通して様々な分野の基礎知識から研究手法、データ解析、分析結果の読み方まで学ぶことができます。複数の分野について1つの授業で学べる機会はそれほど多くありません。1年生の皆さんにとって、この授業で関心のある分野を発見できるかもしれません。2年次以上の皆さんにとって、卒業論文のテーマを考えるきっかけになるかもしれません。格差問題に興味をお持ちの理工系の皆さんも、是非ご参加ください。
期間部限定の特設科目です。学年関係なく履修可能(1年生の受講も歓迎します)。

格差社会の人間発達科学論A　http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index_kamoku.cfm?jugyo=12N0066
格差社会の人間発達科学論B　http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index_kamoku.cfm?jugyo=12N0067

資料5－③－C　他大学との単位互換実施状況（教務チーム作成）

区分	平成 22 年度		
	互換先大学等名	履修者数	単位履修者数
文教育学部	東京外国語大学	3	2
	東京藝術大学	5	3
	東京工業大学	4	0

資料5－③－D　大学間交流協定に基づく派遣先大学一覧(一部)

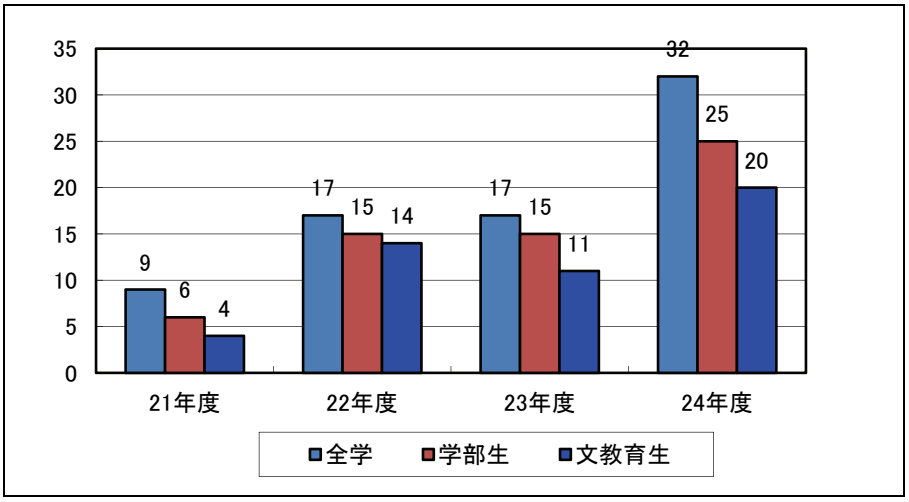
大学間交流協定校

大学間交流協定に基づく派遣先大学一覧 （平成23年6月1日現在）

	締結大学	締結年月日
	アジア	
1	韓国芸術総合学校舞踊院	2011.01.17
2	淑明女子大学校	2000.02.14
3	同徳女子大学校	2005.03.30
4	梨花女子大学校	2000.02.28
5	アジア工科大学院大学	2004.12.29
6	タマサート大学	2007.06.13
7	チェンマイ大学	2010.05.27
8	プリンス・オブ・ソンクラー大学	2009.08.14
9	国立政治大学	2001.07.25
10	国立台北芸術大学	2002.01.29
11	国立台湾大学	1999.12.17
12	大連外国語学院	2006.10.02
13	北京外国語大学	2005.10.17
14	北京大学歴史学系	2002.01.26
15	復旦大学歴史学系	2010.10.12

グローバル教育センターウェブページ(平成23年6月1日現在　46大学・機関)
http://www.cf.ocha.ac.jp/gec/out/list.html

資料５－③－E 海外交流協定校への派遣留学生数



資料5－③－F　全学共通科目「インターンシップ」web シラバス

インターンシップ [12N0016]

科目名	インターンシップ [12N0016] Internship
科目区分・科目種	全学共通科目
クラス	全学科
単位数	1.0単位

担当教員・所属	亀山　俊朗 [教育事業部]
主担当学科	キャリア支援センター
連絡場所	

履修年次	1 ～ 4年
学期	通不定期
教室	①主に学外の実習

受講条件・その注意
特になし

授業の形態
実習,発表

教科書・参考文献
こちらで用意する

評価方法・評価割合
出席=事前指導、体験報告会に必ず出席のこと,実習成果=1週間または30時間以上の実習と活動日誌の提出など,発表=体験報告会での発表

主題と目標
企業・官公庁などでのインターンシップ(体験就労)により、社会に出て働くことの意味を考える。※本科目でインターンシップ先を紹介することはありません。希望する実習先が大学の単位科目であることを受入条件にしている場合は、必ず受講してください。それ以外の学生でもマナー講習、他の学生との情報交流等を希望する方は受講してください。
主な内容:　30時間以上のインターンシップ (2)事前指導(マナー講習など)　(3)報告会
受講上の注意:　4月にガイダンス(昼休み)を開催する。日時・場所はウェブシラバスを参照のこと。

授業計画
※スケジュール(すべて必ず参加のこと)

履修ガイダンス　日時:　4月17日(火)　12:20-13:00　場所:　共2-102

事務手続き説明会(提出書類等配布)　5月

事前指導会(マナー講習)　日時未定

実習報会　日時未定

学生へのメッセージ
大学在学中に企業等で働く経験をしておくことは、将来の自己像を思い描く上で大きなプラスになると言われている。体験先には当然迷惑が掛かるので、最低限のマナーを忘れずに(事前指導でマナーの研修をします)。

http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index_kamoku.cfm?jugyo=12N0016

資料5－③－G　入学前の既修得単位等の認定

○国立大学法人お茶の水女子大学学則

（入学前の既修得単位等の認定）

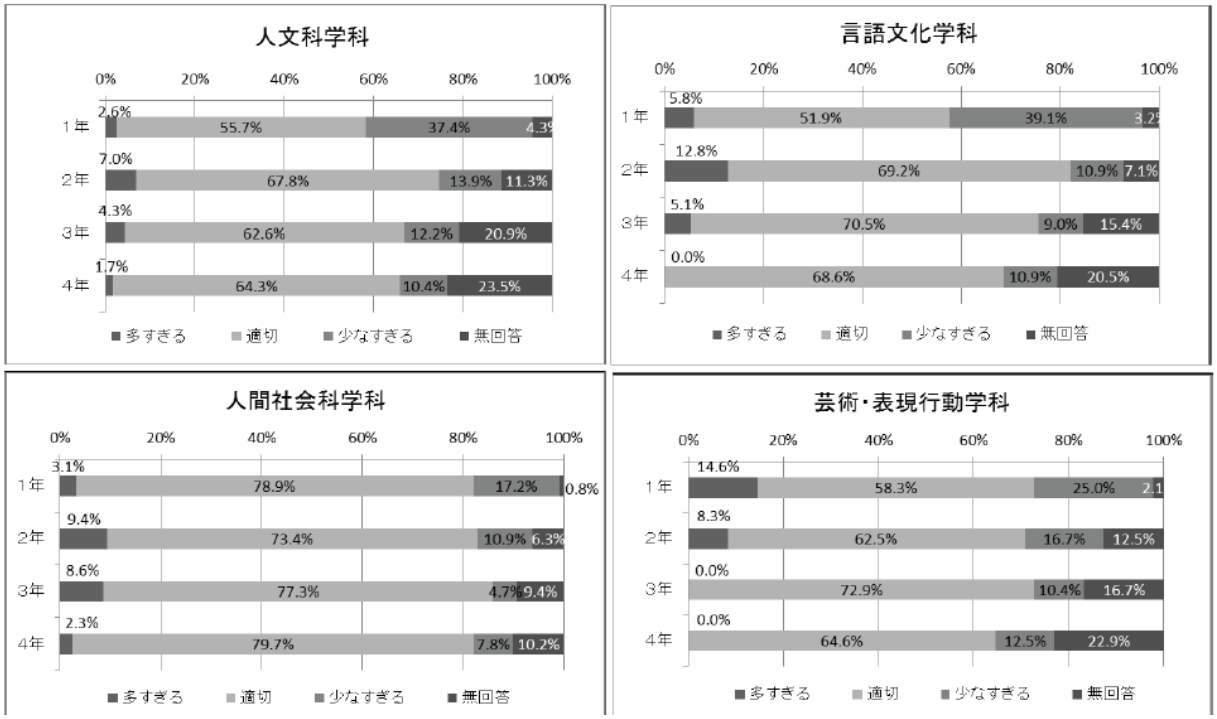
第18条　本学は、教育上有益と認めるときは、学生が本学に入学する前に大学若しくは短期大学(以下「大学等」という。)又は外国の大学等において履修した授業科目について修得した単位(科目等履修生として修得した単位を含む。)を、当該学部教授会の議を経て、本学における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。

2　本学は、教育上有益と認めるときは、学生が本学に入学する前に行った短期大学又は高等専門学校の専攻科における学修その他文部科学大臣が別に定める学修を、当該学部教授会の議を経て、本学における授業科目の履修とみなし、単位を与えることができる。

3　前2項の規定により修得したものとみなし、又は与えることができる単位数は、転学、編入学等の場合を除き、本学において修得した単位以外のものについては、第17条第3項の規定により本学において修得したものとみなす単位数と合わせて60単位を超えないものとする。

資料5－③－H　「平成 22 年度　お茶大生の学習環境と生活･意識に関する調査」の結果の例　p. 9.

図表 2－7　専攻科目の履修学年配置の適切さ（学科別）



http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/10/2_7-23.pdf

資料5－③－I　『平成 23 年度　キャリア意識調査報告書』p. 50.

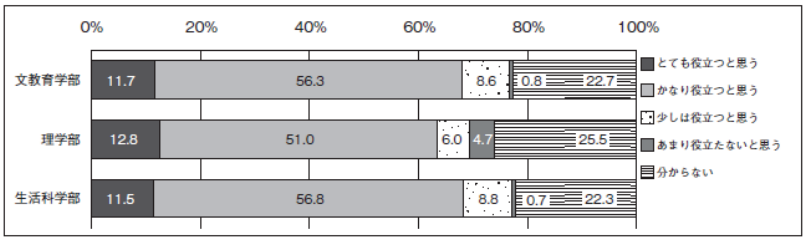
(3)キャリア関連科目の役立ち度について

本節ではキャリアデザインプログラム基幹科目受講状況と、学生がこれらの授業のキャリア形成への有効性についてどのように考えているかについての考察を進める。

1）キャリアデザインプログラム基幹科目の学部・学年別「役立ち度」

学部生対象に本学のキャリア関連の授業が今後のキャリア形成の役に立つかについて、「とても役立つと思う」「かなり役立つと思う」「少しは役立つと思う」「あまり役立たないと思う」「分らない」の５肢択一での回答を学部別に分類する（図表3-10）。

図表3-10　学部別キャリア関連授業の役立ち度



各学部ともに、「とても役立つ」と「かなり役立つ」との回答が全体の６割以上を占める結果となっている。次に、「少しは役立つと思う」は文教育学部で8.6%、理学部で6.0%、生活科学部では8.8%であった。対して、「あまり役立たないと思う」は文教育学部、生活科学部ではそれぞれ0.8%、0.7%と１%以下だったが、理学部は4.7%と比較的高い値となっている。また、「分らない」については文教育学部、生活科学部が22%台なのに対して、理学部は25.5%となっている。理学部ではプログラムの認知度も低いが、同時に他学部に比べキャリア関連プログラムを有効だと思っていないということがうかがえる。ただし、これらの結果は回答全体の結果と一致している（第１章：図表1-49）。

http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/51315/3/5_44-60.pdf

【分析結果とその根拠理由】

他学部科目履修の認定、学科の枠を超えたグローバル文化学環の設置に加えて複数プログラム選択履修制度の導入により、学生の多様なニーズに幅広い選択範囲をもって応えているといえる。グローバルCOEによる先進的研究の授業科目化により先端的な研究動向にも配慮しており、国内大学との単位互換制度、国外大学との交換留学制度、編入学生の単位認定、インターンシップの単位化によって、学内外の多様な期待や要請にも応えている。また、全学的にさまざまな観点から学生に対する意識調査・実態調査を実施して教育開発センターの専門スタッフが詳細に分析して結果を公表することにより、学生の満足度・不満や要望をよく把握しているといえる。

観点④：　教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

【観点に係る状況】

本学部の専門教育科目・専攻科目については、各学科・コース・環ごとに、主に１・２年次に履修する入門的な科目として基礎論・概論・概説に関する講義が、２・３年次以降に履修するより専門的な科目として講義に加えて演習が、さらに芸術・表現行動学科では実習・実技が多数開講されている（資料５-④-Ａ）。半数弱の科目（平成22年度は246科目（44.6%）、平成23年度は237科目（44.5%））では、教育効果を向上させるための工夫として、講義や演習等を中心としながらも複数の授業形態を組み合わせている（web資料５-④-１）。その一環として討論を取り入れている科目も、平成22年度には124科目（22.5%）、平成23年度には113科目（20.2%）あり、双方向的な授業が一定数開講されている（web資料５-④-１）。演習系と実習・実験系の科目では、授業を円滑に実施するためＴＡを可能な限り配置している（資料５-④-Ｂ）。

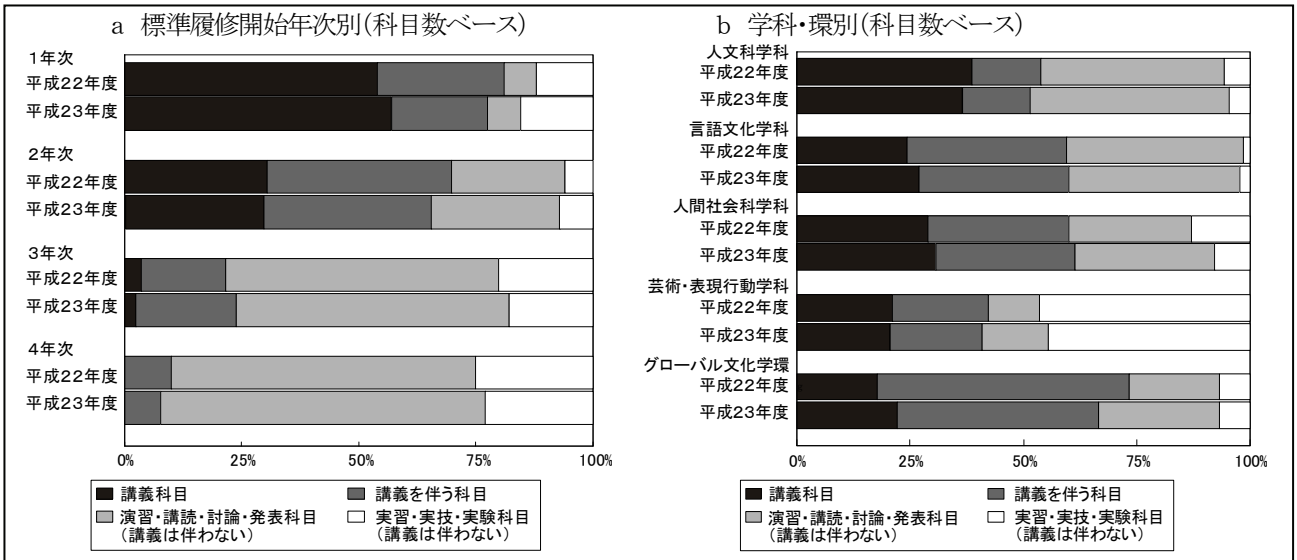
また、本学部の特色として、適切な人数による授業の実現を図っている。本学部専攻科目の平均履修者数は、２年次以降履修の科目で少なく、授業形態別には演習系と実習・実験系の科目は講義科目の半数以下の履修者数である（資料５-④-Ｃ）。授業内容の高度化とともに少人数教育が維持されているといえる。

本学部の専攻科目に対する学生の評価をみると、授業について平成22年度には89.8%、平成23年度には91.7%の学生が「創意工夫がとても感じられた・感じられた」としている（資料５-④-Ｄ）。少人数教育については、93.0%の学生が「良さを感じている・まあ良さを感じている」としている（別添資料５-④-２）。

以上のような従来からの教育上の工夫に加え、比較歴史学コース、地理学コース、教育科学コース、グローバル文化学環などでは、海外・国内における野外調査・研究および実習・ボランティアなどを企画している（科目名「歩いて学ぶ比較歴史」「地理学フィールドワーク」「社会教育実習」「多文化交流実習」「地域研究実習」「国際協力実習」など）。教員についても、公共・民間の事業に取り組んできた、さまざまな経験を持つ人を講師に招く授業が行われてきている（同「国際機構論」「経済学概論・通論」「フランス社会文化論」など）。

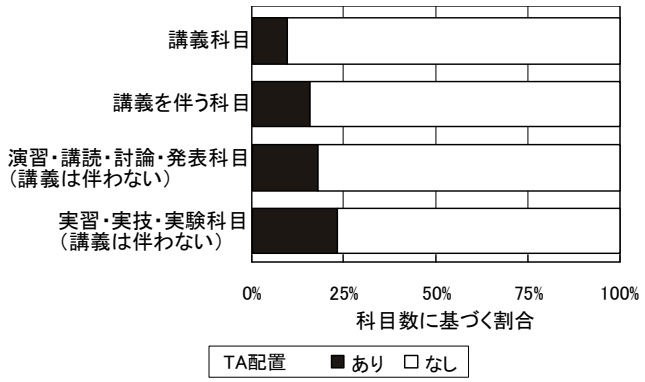
授業の構成・方法に基づく教育の成果を学生の授業理解度からみると、本学部の授業について平成22年度には86.8%、平成23年度には88.9%の学生が「とてもよく理解できた・理解できた」としており（資料５-④-Ｅ）、全体としての教育効果が相当程度認められる。

資料5－④－A　授業形態別の科目構成



※シラバス(http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index.cfm)情報から作成

資料5－④－B　授業形態別にみたTA配置状況(平成 23 年度)



※文教育学部専門科目のTA配置科目一覧(教務チーム提供)及びシラバス(http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index.cfm)情報から作成

資料5－④－C　授業形態別・標準履修開始年次別の平均履修者数

授業形態	標準履修開始年次	平成22年度 平均履修者数	平成23年度 平均履修者数
講義科目	全体	35.2	31.6
	1年次	41.7	37.2
	2年次以降	28.0	24.9
講義を伴う科目	全体	22.9	21.0
	1年次	34.9	31.2
	2年次以降	18.7	18.2
演習・講読・討論・発表科目(講義は伴わない)	全体	12.6	12.4
	1年次	18.1	27.2
	2年次以降	12.3	11.4
実習・実技・実験科目（講義は伴わない）	全体	13.1	12.3
	1年次	17.6	16.6
	2年次以降	11.3	10.1

※シラバス(http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index.cfm)情報及び履修者情報(教務チーム提供)から作成

資料5－④-D　授業(専攻科目)における創意工夫(平成 22-23 年度「学生による授業評価アンケート」)

Q9 この授業には内容理解や議論の活性化などについての創意工夫が感じられましたか。

区分	まったく感じられなかった	あまり感じられなかった	感じられた	とても感じられた	無回答	計
平成22年度合計	119	1,614	10,457	5,411	67	17,668
	(0.7%)	(9.1%)	(59.2%)	(30.6%)	(0.4%)	(100.0%)
平成23年度合計	73	1,147	9,618	4,422	49	15,309
	(0.5%)	(7.5%)	(62.8%)	(28.9%)	(0.3%)	(100.0%)

資料5－④-E　授業（文教育学部）における理解度（平成 22-23 年度「学生による授業評価アンケート」）

Q14 この授業の内容は最終的にどの程度理解できましたか。

区分	全く理解できなかった	あまり理解できなかった	理解できた	とてもよく理解できた	無回答	計
平成22年度合計	169	2,080	12,318	3,023	78	17,668
	(1.0%)	(11.8%)	(69.7%)	(17.1%)	(0.4%)	(100.0%)
平成23年度合計	125	1,510	11,042	2,568	64	15,309
	(0.8%)	(9.9%)	(72.1%)	(16.8%)	(0.4%)	(100.0%)

別添資料・web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
web 資料5－④－1	シラバス（大学ウェブサイト「お茶の水女子大学シラバス」 （http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index.cfm ）
別添資料5－④－2	少人数教育の良さ（「平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」P.15，付表 p.17・Q7） （http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/1/11_1-101.pdf ）

【分析結果とその根拠理由】

本学部専攻科目の授業形態は、教育の進度に応じて組み合わせが適切であり、また分野による多様性も存在し、各種の学生アンケートからも教育効果が相当程度上がっていると判断される。さらに現状維持にとどまるのではなく、野外（フィールド）での学習や海外との交流、多様な人材の教育への参加を生かすことによって、新しい授業形態の模索も進められている。

観点⑤：　単位の実質化への配慮がなされているか。

【観点に係る状況】

本学の授業は 15 週を単位に開講され、授業期間は１年間に原則 35 週が確保されている（別添資料５-⑤-１）。また、授業時間外の学習を促すために以下の取り組みを行っている。

- web シラバスを使用して各科目の授業計画、参考図書を公表している（web 資料５-⑤-２）。
- 各授業でレポート作成を課している（web 資料５-⑤-２）。
  平成 22 年度　　本学部専攻科目中 315 科目で実施（57.2%）
  平成 23 年度　　同　専門教育・専攻科目中 318 科目で実施（59.7%）
- 24 時間学内外からアクセス可能な授業・学習支援システム（Plone、Moodle）を導入し、予習・復習用資

料の閲覧、質問・回答、グループディスカッション等を可能としている（web 資料５-⑤-３）。

Plone　平成 23 年度　本学部では 17 の専門教育・専攻科目で使用（教育開発センター調べ）

Moodle　平成 23 年度　本学部教員が担当する 11 のコア外国語・情報科目で使用（外国語教育センター、情報基盤センター調べ）

- コース・環ごとに授業時間外に利用できる図書室、学生控え室、コンピュータ等、学習用施設・設備を整備している（資料５-⑤-A）。
- 教員オフィスアワーを設定し、学部のホームページにより学生へ周知している（資料５-⑤-B）。
- 履修登録単位の上限について年間 50 単位の目安を設定している（別添資料５-⑤-４）。

以上の取り組みに対する学生の評価は総じて高い。例えばシラバスは、本学部学生の 70.3%が「非常に満足・やや満足」、オフィスアワーの設置や教員の対応は、55.0%の学生が「非常に満足・やや満足」としている（別添資料５-⑤-５）。また、授業・学習支援システムの利用状況をみると、本学教育開発センターの調査では回答した本学部学生の利用頻度はかなり高く（資料５-⑤-C）、他の調査から明らかになった利用者の１日の平均利用時間は 43.0 分であった（別添資料５-⑤-６）。

本学部学生の学習状況は、必要な予習や復習をした上で授業にのぞんでいる学生が 59.1%と多い（別添資料５-⑤-７）。科目ごとに授業外の学習時間をみると、本学部ではひとつの履修科目につき１週間に１時間以上学習する学生が、平成 22 年度には 19.8%、平成 23 年度には 29.0%であった（資料５-⑤-D）。

また、授業外の学習時間の週間平均値は 9.3 時間であった（別添資料５-⑤-８）。調査結果をみる限り、近年、本学部学生の授業外の学習時間は漸増しているが、教育の実質化（単位制の実質化）の観点からも、さらに学生の能動的な学習意欲を喚起する必要がある。

資料5－⑤－A　学部の学習環境の状況(お茶の水女子大学教育情報の公表レビュー　平成 23 年7月 P67 より)

（３）学部学科、大学院の学習環境【ファカルティー支援チーム】

１）学部学科

	学部学科等	学習環境の状況				
		学生控え室の有無	図書室の有無	学生用ﾊﾟｿｺﾝの有無	個人ロッカーの有無	その他、各学科等の状況
文教育学部	人文科学科					
	哲学・倫理学・美術史ｺｰｽ	有(文 1-620)	有(文 1-619)	有(1 台)	有(文 1-620)	
	比較歴史学コース	有(文 1-612)	有(文 1-612)	有(10 台)	有(文 1-612)	他、図書室(文 1-613)
	地理学コース	有(文 1-716)	有(文 1-709)	有(13 台)	有(文 1-716)	地図室、計算機室、地学標本室など有
	言語文化学科					
	日本語・日本文学コース	有(文 1-523)	有(文 1-522)	有(3 台)	有(文 1-523)	
	中国語圏言語文化コース	有(文 1-417)	有(文 1-413)	有(4 台)	有(文 1-417)	学習、休憩のｽﾍﾟｰｽあり。
	英語圏言語文化コース	有(文 1-818)	有(文 1-420)	有(3 台)	有(文 1-818)	他、図書室(文 1-421)
	仏語圏言語文化コース	有(共 3-405)	有(共 3-206)	有(1 台)	有(共 3)	
	人間社会科学科					
	社会学コース	有(文 1-821)	有(文 1-616)	有(10 台)	有(文 1-821)	控室ﾊﾟｿｺﾝ、ﾛｯｶｰは教育科学ｺｰｽと共同
	教育科学コース	有(文 1-821)	有(文 1-218)	有(10 台)	有(文 1-821)	AA が学生の学習、アドバイスを支援
	心理学コース	有(文 1-227)	有(文 1-812)	有(9 台)	有(文 1-227)	ﾊﾟｿｺﾝは院生と共通
	芸術・表現行動学科					
	舞踊教育学コース	有(文 2-207)	有(文 2-213)	有(4 台)	有(文 2-207)	ﾊﾟｿｺﾝは院生と共通
	音楽表現コース	有(文 2-207)	有(文 2-109)	有(2 台)	有(文 2-207)	個人用ピアノ練習室 10 室有
	グローバル文化学環	有(文 1-305)	有(文 1-708)	有(6 台)	有(文 1-305)	

資料5－⑤－B　文教育学部教員オフィスアワー

哲学・倫理学・美学コース

教員名	曜日	時間	場所	備考
中野 裕考	木	12:10-13:20	研究室	
三浦 謙	月	15:00-15:30	研究室	
高島 元洋	火	12:10-13:20	研究室	
頼住 光子	月	12:10-13:20	研究室	事前にアポイントメントを取ること
秋山 光文	月	14:00-16:00	研究室	事前にアポイントメントを取ることが望ましい
天野 知香	火	12:20-13:20	研究室	

比較歴史学コース

教員名	曜日	時間	場所	備考
安田 次郎	木	昼休み	研究室	
小風 秀雅	月	12:50-13:20	研究室	
岸本 美緒	木	15:00-17:00	研究室	
三浦 徹	木	15:00-16:30	研究室	
古瀬 奈津子	水	昼休み	研究室	
新井 由紀夫	金	12:10-13:20	研究室	
安成 英樹	木	12:10-13:20	研究室	
神田 由築	火	昼休み	研究室	

（文教育学部ウェブサイト：http://www.li.ocha.ac.jp/staff/index.html）

資料5－⑤－C　学生による授業・学習支援システムの利用頻度（学部別）

本学教育開発センター「学修の支援（システム）に関するアンケート調査」
（2011 年 12 月～2012 年1月に実施）の結果から集計

a　Moodle

利用頻度	文教育学部			理学部			生活科学部		
1. ほとんど毎日	1	(0.5)	(0.5)	4	(3.7)	(4.0)	1	(0.8)	(1.0)
2. 1と3の選択肢のあいだ	36	(16.9)	(18.6)	23	(21.1)	(23.2)	15	(11.8)	(14.9)
3. 1学期につき数回程度	98	(46.0)	(50.5)	48	(44.0)	(48.5)	47	(37.0)	(46.5)
4. 使ったことがない	59	(27.7)	(30.4)	24	(22.0)	(24.2)	38	(29.9)	(37.6)
無回答	19	(8.9)	－	10	(9.2)	－	26	(20.5)	－
回答者数	213	(100.0)	－	109	(100.0)	－	127	(100.0)	－

右側の構成比は「無回答」を除いた場合の値である。

b　plone

利用頻度	文教育学部			理学部			生活科学部		
1. ほとんど毎日	0	(0.0)	(0.0)	0	(0.0)	(0.0)	0	(0.0)	(0.0)
2. 1と3の選択肢のあいだ	27	(12.7)	(15.1)	8	(7.3)	(9.6)	5	(3.9)	(5.6)
3. 1学期につき数回程度	64	(30.1)	(35.8)	18	(16.5)	(21.7)	26	(20.5)	(29.2)
4. 使ったことがない	88	(41.3)	(49.2)	57	(52.3)	(68.7)	58	(45.7)	(65.2)
無回答	34	(16.0)	－	26	(23.9)	－	38	(29.9)	－
回答者数	213	(100.0)	－	109	(100.0)		127	(100.0)	－

右側の構成比は「無回答」を除いた場合の値である。

資料5－⑤―D　文教育学部授業の授業外学習時間（平成 22-23 年度「学生による授業評価アンケート」）

Q5 この授業に関する授業時間外の学習を1週間あたり、どの程度おこないましたか。

区分	30 分未満	30 分以上 1 時間未満	1 時間以上 2 時間未満	2 時間以上 3 時間未満	3 時間以上	まったくしなかった	計
平成22 年度合計	5,700	3,965	2,272	754	453	4,464	17,608
	(32.4%)	(22.5%)	(12.9%)	(4.3%)	(2.6%)	(25.4%)	(100.0%)
平成23 年度合計	3,882	3,815	2,841	1,037	531	3,116	15,222
	(25.5%)	(25.1%)	(18.7%)	(6.8%)	(3.5%)	(20.5%)	(100.0%)

別添資料･web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
別添資料5－⑤－1	学年暦(「キャンパスガイド」 p.27) (http://www.ocha.ac.jp/campuslife/campus_guide/2012.pdf)
web 資料5－⑤－2	シラバス(大学ウェブサイト「お茶の水女子大学シラバス」 (http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index.cfm)
web 資料5－⑤－3	授業･学習支援システム(教育開発センターウエブサイト (https://crdeg.cf.ocha.ac.jp/crdeSite/lms.html)
別添資料5－⑤－4	単位制(「履修ガイド」 p.26) (http://www.ocha.ac.jp/campuslife/registration/2012ug_gaiyou.pdf)
別添資料5－⑤－5	教育サービス満足度(オフィスアワーの設置、教員の対応)(「平成22年度お茶大生の学習環境と生活･意識に関する調査」 付表 p.22～23･Q16-1.11) (http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/1/11_1-101.pdf)
別添資料5－⑤－6	授業･学習支援システムの利用時間(「平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活･意識に関する調査」の結果から集計) p.80 (http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/3/9_67-81.pdf)
別添資料5－⑤－7	授業への取り組み方(予習復習)(「平成22年度お茶大生の学習環境と生活･意識に関する調査」 p23,付表 p.19･Q11-5) (http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/1/11_1-101.pdf)
別添資料5－⑤－8	授業以外で勉強している時間(「平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活･意識に関する調査」 付表 p.32･Q39) (http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/1/11_1-101.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

全学で履修登録上限の単位数について目安を示しつつも上限をこえる履修を一律に禁止していないのは、本学部の持つ広範な専門領域をカバーする授業科目について、学生が多様な専門知識にふれる学習機会を奪わないためである。その分本学部では、授業時間外でも学生が充実した学習に取り組めるように、ソフト面・ハード面の対応に力を入れている。

したがって、単位の実質化への配慮はなされていると判断される。ただし、本学部でも、大学設置基準に定められた必要学習時間の充足は課題である。むろん学習課題（発表、小レポートなど）を増やせば授業外での学生の学習時間は増えるが、その指導や評価など教員側の負担も大きくなる。e-learning などを活用し、学生の能動的な学習意欲をより一層発揮させるための方策を考える必要がある。

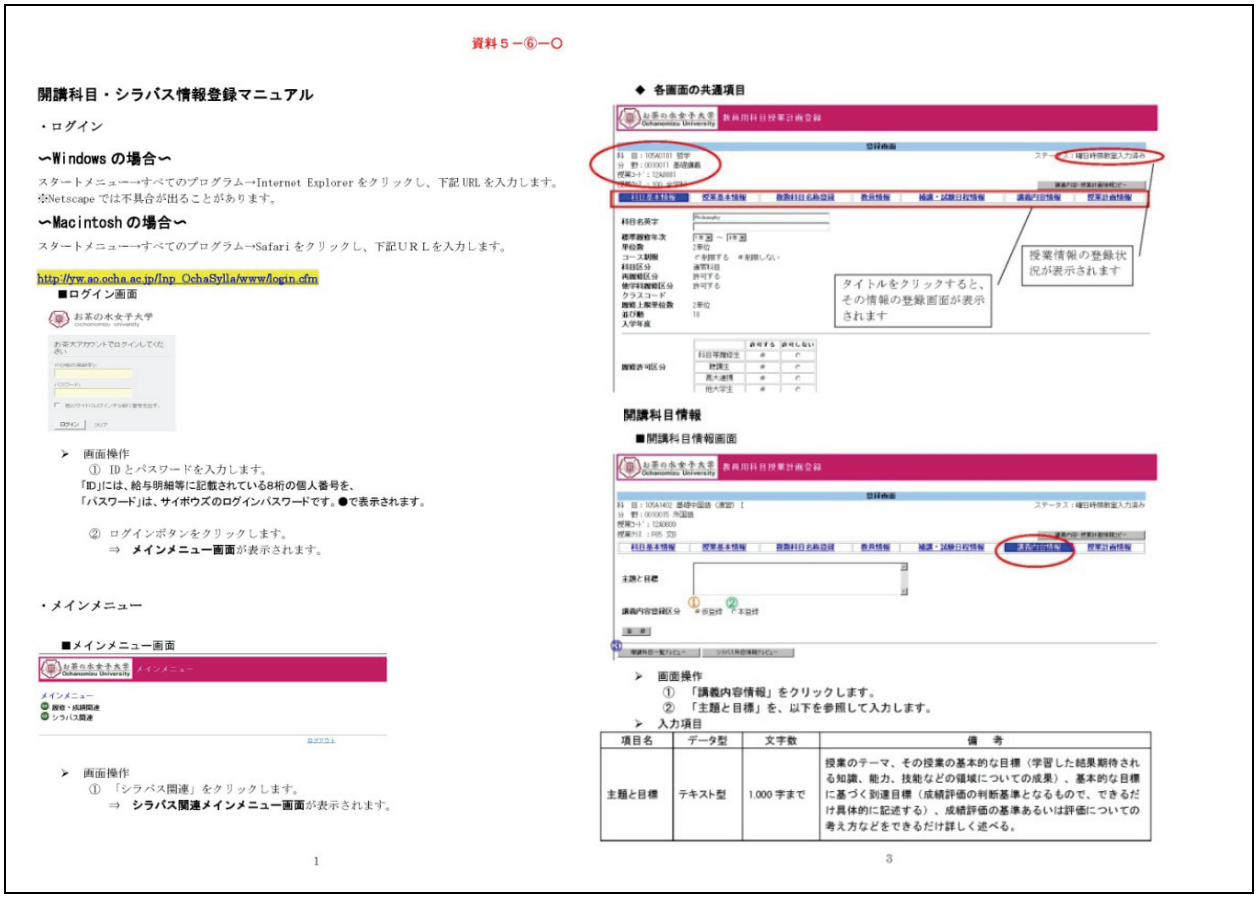
観点⑥： 適切なシラバスが作成され、活用されているか。

【観点に係る状況】

本学のシラバスは、大学ウェブサイトから閲覧できる（資料５-⑥-１）。その構成は、記載項目ごとにフォーマット化されており、作成時に参照するマニュアルも整備されている（資料５-⑥-A）。

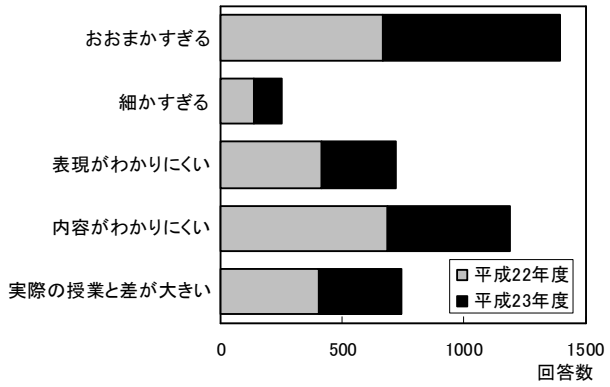
本学部学生によるシラバスの評価は、「非常に満足・やや満足」とする学生が 70.3%と多いものの、25.2%の学生が「非常に不満・やや不満」としている（資料５-⑥-２）。「学生による授業評価アンケート」からシラバスの内容に関して否定的な評価をみると、「おおまかすぎる」「内容がわかりにくい」「実際の授業と差が大きい」「表現がわかりにくい」と指摘する学生が多い（資料５－⑥－B）。

資料5－⑥－A　シラバスの作成要項(教員シラバス登録マニュアル(抜粋))



資料5－⑥－B　学生からみたシラバスの内容に関する問題点

平成 22 年度前期・後期、平成 23 年度前期・後期実施「学生による授業評価アンケート」の結果から作成



別添資料・web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
web 資料5－⑥－1	シラバス(大学ウェブサイト「お茶の水女子大学シラバス」 (http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index.cfm)
別添資料5－⑥－2	教育サービス満足度(シラバス)(「平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」 付表..22・Q16-1) (http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/1/11_1-101.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

教育課程の編成趣旨に沿ったシラバスが作成されている。ただし、学生からは問題点も指摘されており、学習支援や情報発信の重要性が高まる中、シラバスの内容について各教員が検討を続ける必要がある。

観点⑦：　基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。

【観点に係る状況】

基礎学力不足の学生に関する対応としては、文教育学部に特に関係する科目として英語について重点的な取り組みがされている。外国語教育センターによって、平成 18 年度から文法や語彙など英語の基礎力の強化を目的とする全学共通科目「英語基礎強化ゼミ」が実施されている（定員 20 名）（資料５-⑦-A）。また、１・２年生の英語基本科目では、習熟度別クラス編成を行い、学生がレベルに合った教育を受けられるよう配慮している（別添資料５-⑦-１）。さらに、英語学習相談室が開設されており、外国語教育センターの英語講師が助言・指導にあたっている（資料５-⑦-B）。文献講読、レポート作成、発表に必要とされる基礎学力については、演習・講読・発表形式の授業を通して個別に指導を行っており（前掲資料５-④-A）、サプリメント科目を設ける必要は生じていない。

資料5－⑦－A　シラバス(英語基礎強化ゼミ)

英語基礎強化ゼミ [11N1003]

科目名	英語基礎強化ゼミ [11N1003] Basic English Skills Development
科目区分・科目種	全学共通科目
クラス	全学科
単位数	2.0単位

担当教員・所属	英　美由紀 [お茶の水女子大学]
主担当学科	言語文化学科（英文）
連絡場所	

履修年次	1 ～ 4年
学期	前期
曜日・時限	水曜 9.0～10.0
教室	①共通講義棟1号館204室

授業の形態
講義,演習

教科書・参考文献
初回の授業時に指示しますので、あらかじめ購入する必要はありません。

試験・補講日程情報
[補講]2011/09/28 共通講義棟1号館204室 9～10限（16:40～18:10）

評価方法・評価割合
その他=100% 出席率、小テストの結果や発言など、通常の授業への取り組み(期末試験は行わな　い予定)。なお単位の修得には、一定以上の出席の割合を必要とします。

主題と目標
高校までの既習事項を確実なものとし、大学での英語の授業にスムースに移行できるようにすることを目的とする。

授業計画
初回の授業はオリエンテーションにあて、授業の内容や進め方について説明します。第2週以降は英文法を復習し、英語でよく用いられる口語表現も身につけていきます。その時間の学習事項を確実にするために、なるべく小テストも行うようにしたいと思います。

学生へのメッセージ
英語の基礎固めをし、大学での授業に不安を残さないようにします。

（大学ウェブサイト「お茶の水女子大学シラバス」：http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index.cfm）

資料5－⑦－B　英語学習相談室

英語学習相談室

◇外国語教育センターでは、英語学習相談室を開設しています。英語の実力がなかなかつかない。どのような教材を使いどのような勉強をしたらよいのか分からない等の悩みについて、センターの英語講師が相談に応じます。◇また、みなさんと相談のうえで一定の目標(TOEICスコアを700点台にする、留学のためTOEFLの基準点をめざす、苦手な文法を克服する、等々)を決め、その目標に応じた自習プログラムを作成する活動もしています。語学力をつけるためには、目標を決め、それに向けて自律的な学習を続けることが効果的です。ぜひ英語学習相談室を訪れ、語学力のパワーアップを目ざしてください。

◇相談室の場所と開室日時は以下のとおりです。

相談室の場所：	文教育学部1号館809室
開室時間 (授業のある週のみです)：	火曜日12:15～13:15 水曜日12:15～13:15、16:40～17:40 木曜日12:15～13:15

＊コア英語科目の授業内容についての質問には応じられません。授業内容については、授業を担当している先生に質問してください。

＊相談を希望する方は、都合のよい日時を以下までお知らせください。
こちらから相談日時を連絡します。

外国語教育センター(共通講義棟1号館103号室)
☎ 03-5978-5144
✉ flec@cc.ocha.ac.jp

(外国語教育センターウェブサイト:http://www.ocha.ac.jp/intl/le/conference.html)

別添資料･web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
別添資料5－⑦－1	習熟度別クラス編成(履修ガイド　p.7) (http://www.ocha.ac.jp/campuslife/registration/2012ug_gaiyou.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

基礎力不足学生への配慮は、英語の習熟度別クラス編成やサプリメント科目の設定、演習・講読・発表形式の授業を多数設けて文献の読解力や文章力や発表力を個別に指導しうる体制がとられ、学部としての組織的な対応が行われている。

観点⑧：　学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められているか。

【観点に係る状況】

学位授与方針(ディプロマ･ポリシー)が定められ、大学ウェブサイトにおいて公示されている(資料５－８－A)。

資料5－⑧－A　学士課程ディプロマ･ポリシー(抜粋)

1. 所定の年限在学し、コア科目の中から所定の単位数を修得し、さらに、本学部の教育理念と教育目標に基づいて開設された専門教育プログラムと専門科目から所定の単位数を修得した者に、学士の称号を授与する。
2. 修了に際しては、教員の指導のもとに卒業論文ないしは卒業研究のテーマを決定し、専攻する学問分野の手法に則り、卒業論文ないしは卒業研究を完成することが求められる。
3. 人文･社会科学系の学問を中心とした学術研究のための確かな基礎、国際的に通用する問題発見･解決能力、情報処理能力、コミュニケーション能力が着実に習得されていることが修了の要件である。

(1) 人文科学科

哲学、倫理学、美術史学、歴史学、地理学を研究するのに必要な基礎知識と専門知識を体系的に習得した上で、人間の文化に対する深い洞察力を身につけていることが修了の要件である。

(以下、言語文化学科、人間社会科学科、芸術･表現行動学科、グローバル文化学環とつづく)

大学ウェブページ:http://www.ocha.ac.jp/program/diploma_policy/undergrad.html

【分析結果とその根拠理由】

学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)は、明確かつ階層性をもって定められているといえる。

観点⑨：　成績評価基準が組織として策定され、学生に周知されており、その基準に従って、成績評価、単位認定が適切に実施されているか。

【観点に係る状況】

成績評価は、文教育学部履修規程に基づき、試験、平常の成績及び出席状況を総合して決定している。評価は「Ｓ」「Ａ」「Ｂ」「Ｃ」「Ｄ」の５種類の標語をもって表し、最上位の「Ｓ」については、全評価対象の 15%以下（評価対象が 20 人未満の場合は２名以下）に留めるというガイドラインを設けている。また平成 23 年度から、より客観性が高く国内外における他大学との共用性を有する成績指標としてＧＰＡ制度を導入した（資料５-⑨-Ａ）。さらに原成績の差異を正確に成績評価（ＧＰ）に反映させるためにファンクショナルＧＰＡという方法をとっている（web 資料５-⑨-１）。

これらの成績評価基準は『履修ガイド』に明記して学生全員に配布している（別添資料５-⑨-２）。またＧＰＡ制度の詳細については、入学時のオリエンテーション等で学生に周知をはかり、大学ウェブサイトにおいても説明ページを掲載している（web 資料５-⑨-１）。教員は文教育学部履修規程に基づき、成績評価の方法（出欠、レポート、試験の評価割合など）を策定し、シラバス等を通じて学生への周知を図っている（資料５-⑨-Ａ、web 資料５-⑨-３）。

資料5－⑨－A　成績の評価

○国立大学法人お茶の水女子大学文教育学部履修規程(抜粋)　履修ガイド p.183
（成績の評価） 第9条　成績の評価は、原則として試験、平常の成績及び出席状況を総合して決定する。 2　成績の評価は、「S」(基本的な目標を十分に達成し、きわめて優秀な成果をおさめている)、「A」(基本的な目標を十分に達成している)、「B」(基本的な目標を達成している)、「C」(基本的な目標を最低限度達成している)、「D」(基本的な目標を達成していない。再履修が必要である)の5種類の評語をもって表し、「S」、「A」、「B」及び「C」を合格とし、「D」を不合格とする。 3　前項の成績の評価又は科目の原成績(素点)に基づき、成績の数値平均 Grade Point Average(以下「GPA」という。)を算出するものとする。GPA に関し必要な事項は別に定める。

別添資料･web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
web 資料5－⑨－1	GPA 制度の説明(教育開発センターホームページ) (https://crdeg.cf.ocha.ac.jp/crdeSite/gpa.html)
別添資料5－⑨－2	成績評価基準(『履修ガイド』p31、32) (http://www.ocha.ac.jp/campuslife/registration/2012ug_gaiyou.pdf)
web 資料5－⑨－3	シラバス(大学ウェブサイト「お茶の水女子大学シラバス」 (http://tw.ao.ocha.ac.jp/syllabus/index.cfm　)

【分析結果とその根拠理由】

成績評価基準は、学則及び文教育学部履修規程に基づいて策定し、『履修ガイド』等に明記のうえ、入学時のオ

リエンテーション等において説明を行っている。また成績評価は、当該授業のシラバスに記された成績評価の方法を予め学生に周知のうえ、担当教員によって授業ごとに適切に行われている。以上より、成績評価基準が組織として策定され、学生に周知されており、これらに従って成績評価、単位認定が適切に実施されていると判断される。

観点⑩：　成績評価等の客観性、厳格性を担保するための組織的な措置が講じられているか。

【観点に係る状況】

観点⑨にみたように、成績評価の基準を学部履修規程で定め、『履修ガイド』やウェブサイトにおいて公開しており、シラバスには成績評価の方法を明示している。成績評価に関する学生からの疑義については、直接担当教員に申し出る以外に教務チームでも問合せを受ける旨『履修ガイド』に明記されている（別添資料５-⑩-１）。教務チームには平成 23 年度の１年間に 93 件の成績に関する問合せがあったが、それぞれ適切に処理されている（資料５-⑩-Ａ、Ｂ）。

資料5－⑩－A　成績評価に対する申立件数（平成 23 年度）　（出典：教務チーム作成）

区　分	件数
文教育学部	93 件

資料5－⑩－B 成績評価に関する申立への対応一覧（出典：教務チーム作成）

№.	申立ての内容	その対応
学部1	成績評価に納得がいかないので、評価方法等を教えてほしい。	担当の先生に問合せ、詳細を確認した上で教務チームより回答している。（担当教員本人が直接回答する場合もある。）
学部2	未採点科目があるが、いつ評価がつくのか？	授業担当教員に採点を督促した。
学部3	履修登録あるいは取消をしたはずなのに、反映されていない。	システムのログを確認し、本人に過失がない場合には修正登録・取消を行っている。

別添資料・web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
別添資料5－⑩－1	教務関係の相談窓口（『履修ガイド』p.37） （http://www.ocha.ac.jp/campuslife/registration/2012ug_gaiyou.pdf ）

【分析結果とその根拠理由】

成績評価については、予め基準を公示し、評価についての学生からの異議申立は教務チームで対応する仕組みを設けている。以上より、成績評価の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられていると判断される。

観点⑪：　学位授与方針に従って卒業認定基準が組織として策定され、学生に周知されており、その基準に従って卒業認定が適切に実施されているか。

【観点に係る状況】

学位規則では、本学部の所定の課程を修め、本学を卒業した者には、学士（人文科学）の学位を授与すると定められている（別添資料５-⑪-１）。卒業認定基準は、学則第 22 条（資料５-⑪-A）、文教育学部履修規程（前掲資料５-②-B）及びディプロマ・ポリシー（前掲資料5-⑧-A）において策定しており、『履修ガイド』等に明記し学生全員に配布している。卒業要件である卒業論文・卒業研究については、各コース及び環において成績評価基準を取り決めており、コース教員による卒論指導、指導教員による「特別演習」授業、さらに卒論構想発表会等の機会を通じて学生に周知が図られている。各コース及び環ごとに卒業認定審査を行い、最終的には教授会の議を経て卒業認定を行っている（資料５-⑪ - A）。

資料5－⑪－A　卒業認定に関する規則

○国立大学法人お茶の水女子大学学則(抜粋)『履修ガイド』p.177
(卒業) 第22条　学部に4年以上在学し、定められた授業科目を履修し、124単位以上を修得した者は、卒業者としてこれに卒業証書を授与する。ただし、生活科学部食物栄養学科については、138単位以上を修得した者とする。
○国立大学法人お茶の水女子大学教授会規則(抜粋)
(審議事項) 第4条　教授会は、次に掲げる事項を審議する。 一　学部又は研究科の教育課程の編成に関する事項 二　学生の入学、卒業又は課程の修了その他その在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項 三　教員の採用及び昇任のための選考に関する事項 四　その他当該学部等の教育研究及び運営に関する重要事項

別添資料･web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
別添資料5－⑪－1	国立大学法人お茶の水女子大学学位規則(『履修ガイド』p223、225) (http://www.ocha.ac.jp/campuslife/registration/index.html)

【分析結果とその根拠理由】

卒業認定基準は学則及び教授会規則及びディプロマ･ポリシーにおいて策定し､『履修ガイド』等に明記のうえ、卒論指導の機会等を通じて学生への周知が行われており、基準に従って卒業認定が適切に実施されていると判断される。

【優れた点】

① 従来からの強みである少人数教育の利点や英語教育の習熟度クラス編成などの学生の多様性に対応した教育体制に加えて、学内外の多彩な人材の教育への活用が推進されている。

② 複数プログラム選択履修制度によって、教育内容の体系化・明確化と同時に学生の主体的で多様な選択が制度的に保証された点は非常に優れていると言える。

③ 教育開発センターを中心とした学生の生活実態や意識の調査・分析や授業評価が全学で定期的に行われることで学生の側での評価やニーズに対する感応性が高められている。

【改善を要する点】

① 多彩で自由な履修を保証する反面、厳密な履修単位の上限制を取らないので、１－２年次の履修科目が過大になることもあり、４年間を通した計画的な学習と単位の実質化を促す方策を検討する必要がある。

② ウェブシラバスシステムは定着してきたが、今後更にシラバスの実質化と有効活用を推進していくことが望まれる。

基準６　学習成果

（１）観点ごとの分析

観点①：　各学年や卒業（修了）時等において学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、単位修得、進級、卒業（修了）の状況、資格取得の状況等から、あるいは卒業（学位）論文等の内容・水準から判断して、学習成果が上がっているか。

【観点に係る状況】

平成22～23年度の卒業者（22年度258名、23年度237名）の取得単位数を見ると、平均で150.9単位であり、卒業に必要な124単位を約２割上回っており、学生の学修意欲と成果は高いといえる。コース・環によって、平均取得単位の多寡がみられるが、教職免許・学芸員資格等の免許や資格を取得する学生は一般に履修単位数が多く、それがコース・環の平均値にも関連している。22年度は平均154.2単位でやや過剰者が多かったが、23年度はその傾向が抑制され、単位の実質化という点で改善がみられる（資料６-①-A）。

平成22～23年度の標準修業年限内の卒業率は87%前後、「標準修業年限×1.5」年内卒業率は91、95%であり、前者は他学部に比べるとやや低目であるが、後者はほぼ同等にまで回復している（資料６-①-B、C）。また留年率が他学部より高くなっている（資料６-①-D、E）。これらは文教育学部が他学部に比べて在学中の交換留学者数が多い（資料６-①-F）ことが一因と考えられる。教職免許は、平成22年度は24.1%が取得し、平成23年度は13.5%に大きく減少しているが、後者は教職免許更新制が導入されるということでの一時的な減少であり、その後回復している（資料６-①-G）。学芸員資格取得者は平均14.5名で全学の約3/4をしめる（資料６-①-H）。

受賞を見ると、ダンスフェスティバルで毎年芸術・表現行動学科舞踊教育学コースが受賞している（資料６-①-Ｉ）。

資料6－①－A　平成22-23年度卒業者取得単位数(9月卒業生を含む)（教務チーム作成　以下同じ）

学科	コース・環	平成22年度		平成23年度		平成22-23平均	
		卒業者数	平均取得単位	卒業者数	平均取得単位	卒業者数	平均取得単位
人文科学科	哲学・倫理学・美術史	18	146.3	18	154.6	18	150.4
	比較歴史学	39	164.6	30	148.5	34.5	156.5
	地理学	5	171.2	5	168.6	5	169.9
言語文化学科	日本語日本文学	38	145.7	32	146.3	35	146.0
	中国語圏	6	163.3	5	140.4	5.5	151.9
	英語圏	31	149.1	34	142.6	32.5	145.8
	仏語圏	18	142.4	14	132.9	16	137.6
人間社会科学科	教育科学	24	169.3	12	144.3	18	156.8
	社会学	13	141.6	19	160.9	16	151.3
	心理学	10	137.7	15	137.3	12.5	137.5
芸術・表現行動学科	舞踊教育学	12	152.9	16	140.1	14	146.5
	音楽表現	16	200.8	11	184.8	13.5	192.8
人文・言文・人社	グローバル文化学	28	137.3	26	141.6	27	139.4
総　計		258	154.2	237	147.6	247.5	150.9

資料6－①－B　標準修業年限内の卒業率

区 分	平成 22 年度			平成 23 年度		
	標準修業年限内の卒業者(a)	標準修業年限前の入学者数(b) ※19 年度入学者	標準修業年限内の卒業者(修了)率 (a)/(b)	標準修業年限内の卒業者(a)	標準修業年限前の入学者数(b) ※20 年度入学者	標準修業年限内の卒業者(修了)率 (a)/(b)
文教育学部	217	250	86.8%	209	240	87.1%
理学部	134	148	90.5%	131	147	89.1%
生活科学部	135	147	91.8%	129	147	87.8%

資料6－①－C　［標準修業年限内×1.5］年内卒業

区　分	平成 22 年度						平成 23 年度					
	(d)のうち［標準修業年限×1.5］年間に学位を取得した者の数(c)				［標準修業年限×1.5］年前(平成 17 年度)の入学者数(d)	［標準修業年限×1.5］年内卒業(修了)率(c)/(d)	(d)のうち［標準修業年限×1.5］年間に学位を取得した者の数(c)				［標準修業年限×1.5］年前(平成 18 年度)の入学者数(d)	［標準修業年限×1.5］年内卒業(修了)率(c)/(d)
	H20 年度卒業	H21 年度卒業	H22 年度卒業	計			H21 年度卒業	H22 年度卒業	H23 年度卒業	計		
文教育学部	201	14	6	221	244	91%	215	30	6	251	264	95%
理学部	131	5	2	138	154	90%	140	8	1	149	153	97%
生活科学部	124	9	2	135	152	89%	131	6	1	138	147	94%

資料6－①－D　留年・休学・退学の状況

(留年率)

区 分	平成 22 年度			平成 23 年度		
	全学生数[前年度] (a)	留年者数 (b)	留年率 (b/a)	全学生数[前年度] (a)	留年者数 (b)	留年率 (b/a)
文教育学部	991	67	6.8%	989	48	4.9%
理学部	586	19	3.2%	569	13	2.3%
生活科学部	589	19	3.2%	584	20	3.4%

(休学率)

区 分	平成 22 年度			平成 23 年度		
	全学生数[前年度] (a)	休学者数[前年度] (c)	休学率 (c/a)	全学生数[前年度] (a)	休学者数[前年度] (c)	休学率 (c/a)
文教育学部	991	9	0.9%	989	19	1.9%
理学部	586	4	0.7%	569	4	0.7%
生活科学部	589	5	0.8%	584	7	1.2%

（退学率）

区 分	平成 22 年度			平成 23 年度		
	全学生数[前年度] (a)	退学・除籍者数 (d)	退学率 (d/a)	全学生数[前年度] (a)	退学・除籍者数 (d)	退学率 (d/a)
文教育学部	991	6	0.6%	989	10	1.0%
理学部	586	6	1.0%	569	9	1.6%
生活科学部	589	2	0.3%	584	3	0.5%

資料6－①－E　留年者の割合（各年度の5月1日現在）

区 分	平成 22 年度			平成 23 年度		
	4 年次生数(a)	留年者数(b)	留年者率 (b/a)	4 年次生数(a)	留年者数(b)	留年者率 (b/a)
文教育学部	310	67	21.6%	289	48	16.6%
理学部	162	19	11.7%	154	13	8.4%
生活科学部	166	19	11.4%	165	20	12.1%

資料6－①－F　派遣交換留学の状況

区 分	平成 22 年度	平成 23 年度	合計
	派遣留学者数	派遣留学者数	
文教育学部	14	11	25
理学部	0	1	1
生活科学部	1	3	4

資料6－①－G 教職免許資格取得の状況

区 分	平成 22 年度			平成 23 年度		
	卒業者数(a)	教職免許取得者数(b)	取得率(b/a)	卒業者数(a)	教職免許取得者数(b)	取得率(b/a)
文教育学部	257	62	24.1%	237	32	13.5%
理学部	146	53	36.3%	137	31	22.6%
生活科学部	144	32	22.2%	140	24	17.1%

資料6－①－H 学芸員、社会教育主事、社会調査士の資格取得者数（22-23 年度卒業）

資格	平成 22 年度	平成 23 年度
学芸員	19（23）	10（15）
社会教育主事	5（6）	7（9）
社会調査士	13（28）	11（23）

（ ）内は、学部・大学院を含む資格取得者総数。（教務チーム、担当コースのデータによる）

資料6－①－I 受賞の記録（OCHADAI GAZETTE より）

H22 年度	第 23 回全日本高校・大学ダンスフェスティバル NHK 賞：文教育学部芸術・表現行動学科舞踊教育学コース
H23 年度	第 24 回全日本高校・大学ダンスフェスティバル特別賞：文教育学部芸術・表現行動学科舞踊教育学コース

【分析結果とその根拠理由】

十分な単位が修得され、卒業者率は平均約 90％で、卒業の状況、資格取得の状況等から判断して、学習の成果が十分にあがっていると判断される。

観点②：　学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

【観点に係る状況】

本学では毎学期、授業評価アンケートを行い、授業改善に利用している（資料６-②-Ａ）。それによると平成 22～23 年度の文教育学部の平均値では、平成 22 年度が授業の満足度 4.2（全学 4.1）、達成度 3.8（全学 3.7）、有益度 4.2（全学 4.2）、平成 23 年度が授業の満足度 4.2（全学 4.1）、達成度 3.8（全学 3.8）、有益度 4.2（全学 4.2）、となっている（資料６-②-Ｂ）。

平成 22 年度には全学生を対象に「お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」が実施された。資料６-②-Ｃによれば、「意味があった教養教育」は（意味があった授業の割合を回答する。以下同じ）学部全体で 5.4 割で全国 4.4 割より高い。学部別にみると文教育学部が 5.5 割で最も高い。「意味があった専門教育」は学部全体で 7.2 割と全国 5.9 割を大きく上回っている。

資料６-②-Ｄによれば、教員指導の満足度は教養・共通教育、専門教育共に８割以上が満足、またはある程度満足としている。文教育学部は、教養・共通教育は他学部より高いが、専門教育では他学部のほうが高くなっている。卒業論文・卒業研究の指導についても全学では 7.5 割が満足、またはやや満足であったが、文教育学部では 6.9 割で他学部に比べて低く（資料６-②-Ｅ）、不満・やや不満とする比率は、芸術・表現行動学科が 50％ともっとも高く、人間社会科学、言語文化、人文科学の順になっている。

資料６-②-Ｆによれば、お茶大で身についたことをみると、「専門分野での知識・理解」、「専門分野の基礎となるような理論的理解・知識」、「論理的に文章を書く力」、「人にわかりやすく話す力」、「外国語の力」、「ものごとを分析的・批判的に考える力」、「幅広い知識・もののみかた」などは、「かなり身についた」「ある程度身についた」の割合が他学部より多くなっている。ただし「将来の職業に関する知識や技能」は、他学部に比べて少ない。

資料６-②-Ｇによれば、成功度について文教育学部を全国平均と比較すると、「専門分野の理論を深く教育する」は 85.0％（全国 78.1％）、「専門の基礎をなす基本的知識や考え方を教育する」は 87.4％（全国 83％）で、いずれも高い。「専門にこだわらない幅広い教育を行う」も 85.7％で全国 74.2％より高い。ただし「職業にすぐ役立つ教育をおこなう」は 31.3％で、大学全体 38.9％や全国 62.2％よりも低く、成功していないという回答は人文科学科と言語文化学科では 70％以上、人間社会科学科 61.7％、芸術・表現行動学科は 45.8％と学科によって評価が異なっている。

文教育学部独自の学生アンケート調査（平成23年度実施、後掲資料８-④-Ｃ）によれば、教養・共通教育については、ＬＡが専門以外の領域が学べることが一定の評価を得ており、特に理系分野が学べることに評価が高かった。改善すべき点として「ＬＡとコア科目が、教職科目や専門科目と時間割上で重なる」「理系のＬＡとコアの科目が文系の学生にはわかりにくい」という意見もあった。専門科目については、少人数教育の良さを評価する回答が多かった。「じっくり学べる、アットホームである、指導がきめ細かい、先生との距離が近い、質問しやすい、集中できる、質が高い」などの肯定的意見があった。改善点として「科目数が少ない、教員が少ない、領域が偏っている」など、総じて、科目数の拡充と教員数を増加が求められている。卒業論文・卒業研究の指導については、全般に丁寧で親身であり充実しているということで評価は高かった。「研究指導の一環として、論

文の書き方、文献の探し方などの授業をコアの必修科目にしてほしい」という要望もあった。

資料6－②－A　学生の授業評価アンケート

○授業アンケート結果集計表事例（上）と満足度、達成度、有益度（下）

（１枚目）

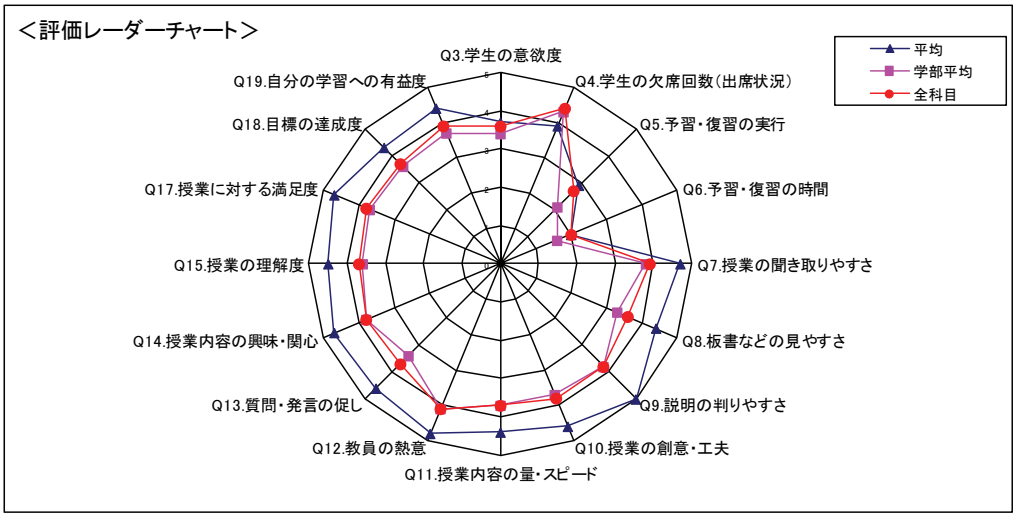
授業アンケート結果集計表

学部・学科	○○○学科	履修者数	18 名
教員	□□　□□	回収数	12 名
科目	○△○△演習	回収率	62.50 %

項目別回答分布（人数と平均値）

質疑内容	回答						平均			満足度との相関係数
	1	2	3	4	5	無回答	平均	学部計	全学計	
Q1. シラバスの活用	0 0.0%	2 20.0%	0 0.0%	0 0.0%	8 80.0%	0 0.0%	—	—	—	—
Q2. 授業の選択理由	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	7 70.0%	3 30.0%	0 0.0%	—	—	—	—
Q3. 学生の意欲度	0 0.0%	1 10.0%	1 10.0%	8 80.0%	0 0.0%	0 0.0%	3.7	3.4	3.6	−0.307
Q4. 学生の欠席回数（出席状況）	0 0.0%	0 0.0%	2 20.0%	7 70.0%	1 10.0%	0 0.0%	3.9	4.3	4.4	0.284
Q5. 予習・復習の実行	2 20.0%	0 0.0%	5 50.0%	3 30.0%	0 0.0%	0 0.0%	2.9	2.1	2.7	−0.272
Q6. 予習・復習の時間	3 30.0%	3 30.0%	3 30.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 10.0%	2.0	1.6	2.0	−0.864

（２枚目）



資料6－②－B　授業評価アンケート　文教育学部の満足度・達成度・有益度（平成 22～23 年度）

区分	満足度		達成度		有益度	
	文教育学部	全学	文教育学部	全学	文教育学部	全学
H22 前期	4.2	4.1	3.8	3.7	4.2	4.2
H22 後期	4.2	4.1	3.8	3.7	4.2	4.2
H23 前期	4.2	4.1	3.8	3.8	4.2	4.2
H23 後期	4.2	4.1	3.8	3.8	4.2	4.2

資料6－②－C　教養教育と専門教育の有益度（平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査

P7 http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/10/2_7-23.pdf ）

図表 2－1　これまで受けた授業のなかで意味があった教養教育（コア科目）と専門教育の割合（学部）

	合計				1年				2年			
	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差
意味があった教養教育	949	5.4	5.0	2.35	221	5.8	6.0	2.37	211	5.4	5.0	2.33
意味があった専門教育	947	7.2	8.0	2.23	215	7.1	8.0	2.57	211	7.1	8.0	2.27

	3年				4年			
	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差
意味があった教養教育	216	5.4	5.0	2.25	301	5.1	5.0	2.40
意味があった専門教育	218	7.1	8.0	2.27	303	7.5	8.0	1.88

	文教育学部				理学部				生活科学部			
	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差
意味があった教養教育	438	5.5	6.0	2.41	247	5.3	5.0	2.34	264	5.3	5.0	2.27
意味があった専門教育	435	7.2	8.0	2.29	246	7.5	8.0	2.19	266	7.0	8.0	2.16

	人文科学科				数学科				食物栄養学科			
	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差
意味があった教養教育	111	5.6	6.0	2.50	38	5.0	5.0	2.48	72	5.3	5.0	2.40
意味があった専門教育	110	6.8	8.0	2.48	40	7.1	8.0	2.66	73	7.9	8.0	1.89

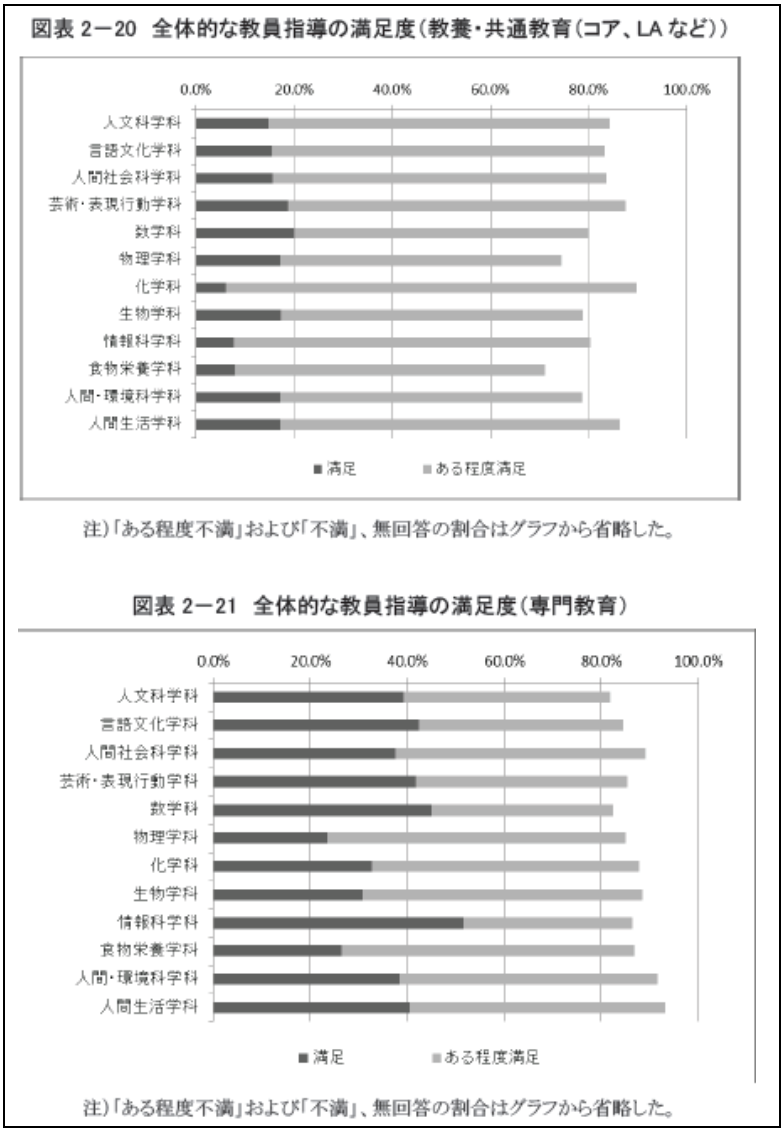
	言語文化学科				物理学科				人間・環境科学科			
	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差
意味があった教養教育	152	5.8	6.0	2.49	46	5.2	5.5	2.40	47	5.3	5.0	2.36
意味があった専門教育	149	7.2	8.0	2.39	47	7.0	8.0	2.37	47	6.9	7.0	2.15

	人間社会科学科				化学科				人間生活学科			
	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差
意味があった教養教育	128	5.3	5.0	2.28	47	5.7	6.0	2.15	145	5.4	5.0	2.19
意味があった専門教育	128	7.1	7.5	2.09	44	8.1	8.0	2.00	146	6.7	7.0	2.19

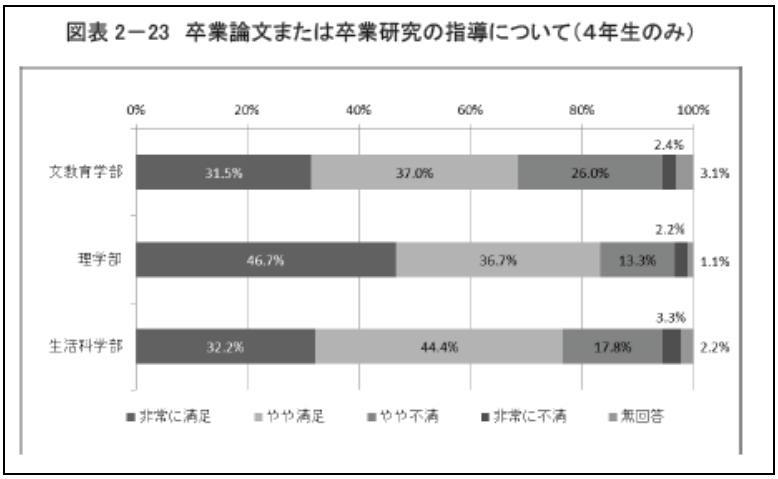
	芸術・表現行動学科				生物学科			
	N	平均値	中央値	標準偏差	N	平均値	中央値	標準偏差
意味があった教養教育	47	5.1	5.0	2.25	52	5.6	6.0	2.29
意味があった専門教育	48	8.1	9.0	1.81	52	7.6	8.0	2.06

	情報科学科			
	N	平均値	中央値	標準偏差
意味があった教養教育	64	5.0	5.0	2.37
意味があった専門教育	63	7.5	8.0	1.90

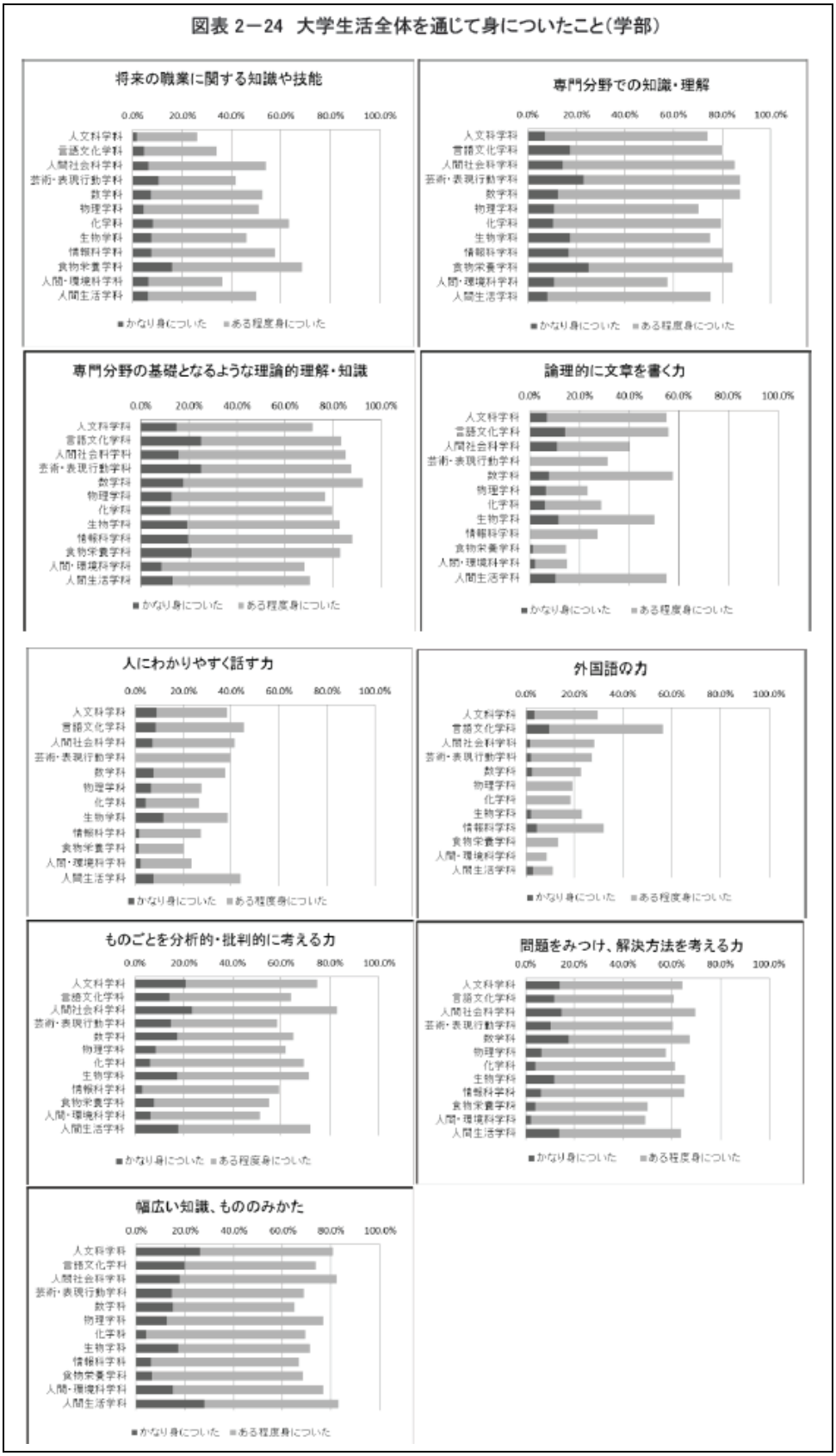
資料6－②－D　教員の指導について(コア、専門教育)(平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査 P.15-16 http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/10/2_7-23.pdf)



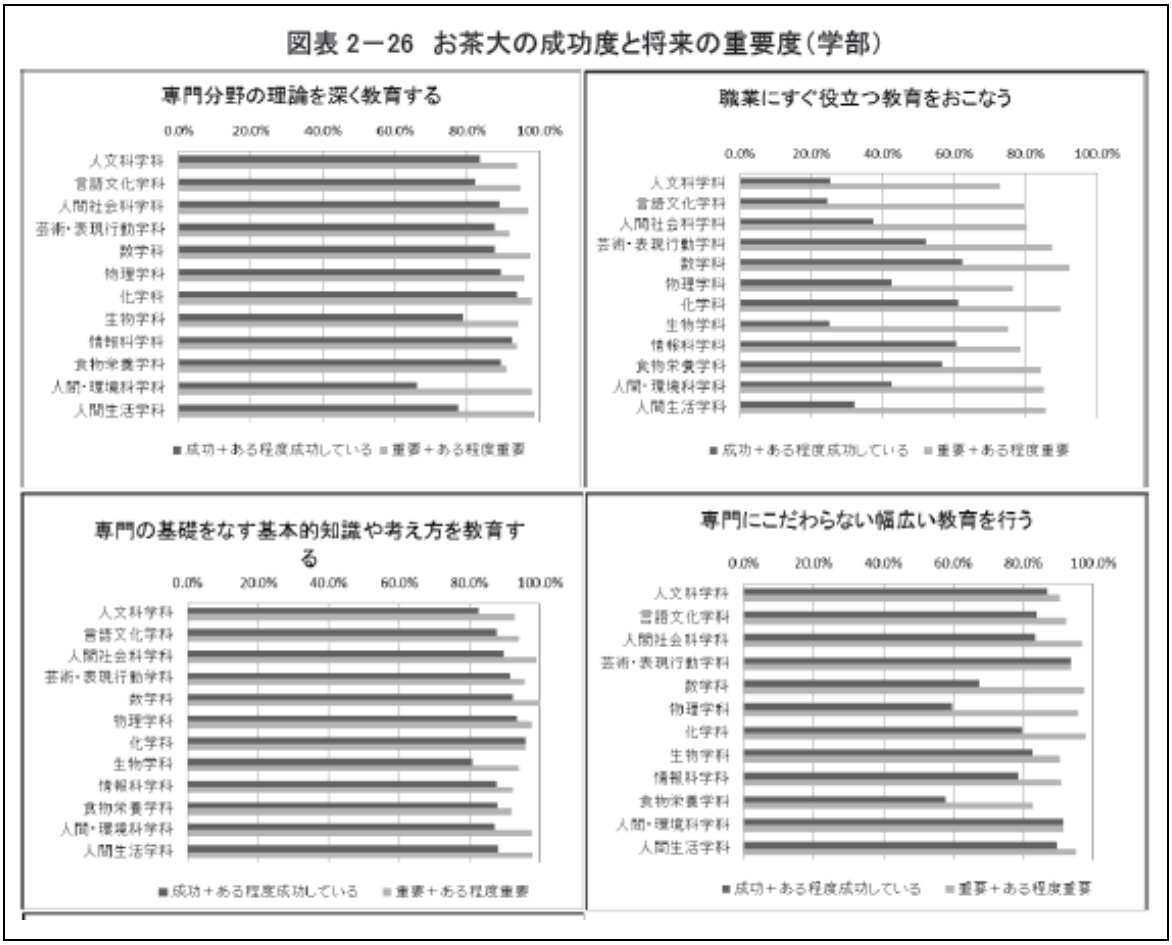
資料6－②－E 教員の指導について(卒業論文)(平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査 P.17 http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/10/2_7-23.pdf))



資料6－②－F 教員の指導について（大学で身についたこと）（平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査 P.17 http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/10/2_7-23.pdf ））



資料6－②－G　教員の指導について（成功度と将来の重要度）（平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査 P.20-21 http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/10/2_7-23.pdf ））



【分析結果とその根拠理由】

学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習の達成度や満足度は高く、他方で授業科目の数や内容について積極的な要望がだされていることは学生の学習意識の高さを示すものと考えられる。以上から、学習成果があがっていると判断される。

観点③：　就職や進学といった卒業（修了）後の進路の状況等の実績から判断して、学習成果が上がっているか。

【観点に係る状況】

資料６-③-Ａによれば、文教育学部は他学部に比べ、就職者数 60～70％と多い反面、進学者数は２割前後である。また資料６-③-Ｂによれば、毎年、国家公務員、地方公務員（都道府県市町村）、銀行、総合商社、メーカー、マスコミ・情報産業、小中高教員などへ就職し、就職希望者の就職率は平成 22 年度は 84.4％と金融ショックの影響をうけて減少していたが、平成 23 年度は、大学が就活支援を強化したこともあり、96.5％に回復した。就職先は多種多様であるが、それぞれの業種でのトップランクの企業や機関も多く含まれており、その活躍が期待される。「卒業生の声」（資料６-③-Ｃ）によれば、それぞれのコース・環ごとの特色を生かした教育が、卒業後の進路選択や就職先での仕事に生かされていることがわかる。

資料6－③－A　進路の状況

区 分	平成22年度							平成23年度						
	卒業者数(a)	進学状況		就職状況				卒業者数(a)	進学状況		就職状況			
		進学者数(b)	進学率(b/a)	就職者数(d)	就職率(d/a)	就職希望者数(c)	就職希望者の就職率(d/c)		進学者数(b)	進学率(b/a)	就職者数(d)	就職率(d/a)	就職希望者数(c)	就職希望者の就職率(d/c)
文教育	257	54	21.0%	151	58.8%	179	84.4%	237	47	19.8%	164	69.2%	170	96.5%
理	146	92	63.0%	47	32.2%	47	100.0%	137	84	61.3%	46	33.6%	48	95.8%
生活	144	48	33.3%	79	54.9%	84	94.0%	140	46	32.9%	84	60.0%	90	93.3%

資料6－③－B　平成22年度学科別卒業先一覧(『大学案内』2012より)

■人文科学科(哲学)
医療法人秀峰会、リンク情報システム(株)、プロカメラマン(事務所アシスタント)、あいおいニッセイ同和損害、保険(株)、(株)メディカルリサーチアンドテクノロジー、(株)東京海上日動キャリアサービス、群馬県職員、ジャパンケーブルネット(株)、第一生命保険(株)、横浜市職員

■人文科学科(歴史)
日本SE(株)、(株)三菱東京UFJ銀行、金融庁、(株)エヌ・ティ・ティ・データ、横浜市役所、東京都職員、(株)スリムビューティハウス、新日本法規出版(株)、タマノイ酢(株)、日本マスタートラスト信託銀行(株)、
ブレーンバンク(株)、(株)アネビー、東京国立博物館、(株)うさぎ薬局、公立学校共済組合、東日本電信電話(株)、海上自衛隊、(株)サマンサタバサジャパンリミテッド、(株)山梨中央銀行、三井住友海上火災保険(株)

■人文科学科(地理)
(株)ゼンリン、明治安田生命保険相互会社、全日空商事(株)、(株)ハウスメイトパートナーズ

■言語文化学科(日文)
小金井市役所職員、アクサ生命保険(株)、(株)インターメディカ、(株)ジュンク堂書店、中部電力(株)、(株)富士通ミッション、クリティカルシステムズ、陵南セミナー、(株)MS&Consulting、(株)ゆうちょ銀行、(株)フジ弘報社、伊藤忠フレッシュ(株)、(株)アイ・ディ・エス(バナナ園)、栃木県職員、板橋区役所、東芝テック(株)、(株)ジェイキャスト、アパホテル(株)、くまざわ書店、富山県庁、(株)トライグループ

■言語文化学科(中文)
日立電子サービス(株)、(株)岩手日報社、(株)内田洋行、タマノイ酢(株)、(株)テクノスジャパン、

■言語文化学科(英文)
日本興亜損害保険(株)、日立オートモティブシステム(株)、(株)日本保育サービス、日本電信電話(株)、三井住友海上火災保険(株)、東京海上日動火災保険(株)、群馬県庁、宇都宮市役所、(株)デンソー、(株)京王エージェンシー、(株)ホクタテ、防衛省、(株)シンカーミクセル、(株)早川書房、アンダーソン・毛利・友常法律事務所、郵便事業(株)、東京都立高等学校、大妻多摩中学高等学校、(株)日本政策投資銀行

■言語文化学科(仏文)
(株)ファイブフォックス、(株)ユニクロ、松山市役所、(株)マイネット・ジャパン、総務省、東京医科歯科大学職員、千葉大学(図書館職員)、郵船不動産(株)、(社)全日本ピアノ指導者協会(PTNA)、

■人間社会科学科(社会)
(株)日本アクセス、(株)メディアコンピュータシステムズ、有限責任監査法人トーマツ、東大和市役所、三井不動産住宅リース(株)、東日本電信電話(株)、(株)三井住友銀行、山梨県庁、(株)ミツカングループ、共栄火災海上保険(株)

■人間社会科学科(教育)
(株)ハブ、文京区役所、横浜市、(株)イトーヨーカ堂、郵便事業(株)、東急建設(株)、(株)学究社、東京都(小学校教員)、大和証券(株)、(株)ビジュアルビジョン、横浜市(小学校教員)、福島県(小学校教員)、(福)社会福祉事業団協議会、

■人間社会科学科(心理)
立教大学職員、お茶の水女子大学職員、コヴィディエンジャパン(株)、(株)三井住友銀行、東日本旅客鉄道(株)

■芸術・表現行動学科(舞踊)
Noism、(株)ベンチャーバンク、東京都庁、(学)大原学園、日本生命関連会社

■芸術・表現行動学科(音楽)
群馬県公立中学校、(株)資生堂、日本生命保険相互会社、

■グローバル文化学環
総務省、大和証券(株)、(株)電通、(株)イデア、日本郵政(株)、千代田区役所、大和証券(株)、(株)博報堂、(株)大広、日本ヒューレット・パッカード(株)

資料6－③－C　卒業生の声(『大学案内』2012年版より)

大学では興味のあることを幅広く学ぶことができました。先生方の講義は知らなかったことはもちろん、知っていると思っていたことでも新しい認識を与えてくれるものだったように思います。学芸員資格も実践を重視した丁寧な指導のもとに取得することができ、卒業後は博物館に就職することができました。(比較歴史卒業生　東京国立博物館学芸研究部)

落ち着いた静かな環境の中で、全国から集まった仲間と、親身になって教えてくださる素晴らしい教授陣の下で、のびのびと充実した学生生活を送ることができました。卒業後は、外資系や日系企業に転職をしながらキャリアを積んでいます。キャリアは自分で選択するもの、というモットーで、周りの方々に支えられながら、日々チャレンジする毎日を過ごしています。(日本文学　日産自動車株式会社グローバル情報システム本部)

お茶大は少人数教育で 1 年生から密度の濃い授業を受けました。リポート提出は大変でしたが、スタンダールやモーリアック、ヴァレリーに関する先生方の講義は、今でも心に残っています。フランス人の先生にはフランス人の価値観や考え方も教わり、留学生活で非常に役立ちました。「いつかパリ特派員に」と夢見ていることからも、大学で学んだことは私の原点になっています。(仏文　朝日新聞政治部記者)

大学内は緑が多く歩いているとほっとします。少人数なので違う学部・コースの人とも仲良くなることができます。私は幼稚園と小学校の教員免許の取得を通して、教育について幅広くかつ興味に沿って学ぶことができました。現在「ニュースウォッチ9」のキャスターとして一つ一つのニュースに向き合う日々ですが、大学4年間で学んださまざまな知識が大切な土台となって私を支えています。(教育科学　NHK アナウンサー)

心理判定員として県の相談機関で働いています。心理学コースでは各領域の先生に科学的視点から「人のこころ」についてさまざまな角度から教えていただきました。相手と話し、行動を観察、検査、それらを基に評価して仮説を立て、支援の方法を探るという日々の仕事に役だっています。探求心をもって取り組めるのも、ゼミや講義、卒論を通し、心理学の奥深さそして楽しさを学んだからです。(心理学、群馬県心身障害者福祉センター)

肢体不自由の特別支援学校に勤務をしています。生徒と共に歌って踊る、楽しい毎日を過ごしています。障害に関わらず、誰でも踊って楽しむことができるダンスの力というものを感じています。(舞踊　岡山県立岡山養護学校高等部体育科教諭)
「グローバルに活躍する人材」と言われたら、多言語を操り海外を飛び回っているというイメージでしたが、グローバル文化学環で過ごす中で、日本国内のグローバル化や多文化共生といった分野に出会い、在日外国人が直面している問題に関わり、多文化共生の最前線の現場にいたいという思いから、地方公務員という職業を選びました。来庁する外国人と接していて、難しさを感じることも多いですが、グローバル文化学環で学んだことは、私の礎となっています。(グロ文　横浜市職員2008年卒業生)

【分析結果とその根拠理由】

大学院進学率が約20％を維持し、就職率も高いレベルにあり、卒業後の進路の状況等の実績から判断して、学習成果があがっていると判断される。

（２）優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

① 文教育学部では、専門教育の基礎となるような知識や考え方に対する教育、及び教養教育に対する評価が高くなっている。

② 専門に特化された教育よりは幅広く学ぶことできる教育に対する評価が高く、多面的に仕事ができるジェネラリストを求める官公庁・金融・総合商社、マスコミ・情報産業などへの就職を有利に導いている。

【改善を要する点】

教員の指導全般に対する満足度は84.2％であるが、卒業研究・論文指導に対する満足度は68.5％に減少する。専門教育の階梯を上がるとともに、専門教育と職業（就業力）とが乖離していると感じ、専門教育の仕上げともいえる卒業研究・卒業論文の意義を見失う学生が存在していると考えられる。この点について、さらに学生の声を聞き、有効な対策をとる必要がある。

基準７　施設・設備及び学生支援

（１）観点ごとの分析

観点②：　教育研究活動を展開する上で必要なＩＣＴ環境が整備され、有効に活用されているか。

【観点に係る状況】

専門教育の運営単位である各コース・環では、学生が自由に利用できるパソコンを設置し、その管理を行っている。いずれのパソコンも、基本となるアプリケーションがインストールされ、専門教育の内容に応じて、地理情報システム（GIS）や統計ソフトなども使えるようになっている。パソコンは、情報コンセントを通して学内LANとインターネットに接続している（資料７―②－Ａ）。文教育学部１号館、２号館の各階に無線LANのステーションが設置され、学生は自身のパソコンでインターネットに接続することもできる。情報セキュリティの管理は、各コース・環から委員によって構成される文教育学部情報ネットワーク委員会が管轄する。平成23年度は、情報基盤センターの協力をえて、情報ネットワーク委員会の研修セミナーを行うなど、セキュリティ対策の向上につとめている。

資料7－②－A　学生用パソコンの設備(コース・環別)

学科	講座・スーコ・環	学生用PC台数		設置場所	備考（アプリなど）
		H22	H23		
人文科学科	哲学・倫理学・美術史	1	1	学生室	
	比較歴史学	5	10	図書室・学生室	
	地理学	14	18	計算機室	ArcGIS
言語文化学科	日本語日本文学	3	4	図書室・学生控室・大学院生研究室	
	中国語圏	4	4	学生控室・演習室	
	英語圏	3	3	図書室	
	仏語圏	1	1	コース室	
	日本語教育	7	1	コース室	
人間社会科学科	教育科学(社会学と共用)	6	6	図書室	
	社会学(教育科学と共用)	4	4	学部学生控室	SPSS
	心理学	6	9	図書室	
芸術・表現行動学科	舞踊教育学	4	6	実験室	SPSS
	音楽表現	2	2	図書室	
人社・言文・人文	グローバル文化学	6	6	学生室	SPSS
計		66	75		

別添資料・web資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
別添資料7－②－1	教育サービス満足度(情報機器の利用方法)(平成22年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査　付表p.22・Q16-7) (http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/9/3_24-30.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

各コース・環には、学生用のパソコンと必要となるアプリケーションやLAN&インターネット接続が確保され、有効に活用されている。しかし、「平成22年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」（別添資料７-②-１）では、文教育学部生の情報機器（全体）の利用方法の満足度（非常に満足、やや満足）は49.5%で、不満とするものが41.8%にのぼる。ウェブサイトによる履修登録・成績照会・授業情報の収集が必須となっている状況で、よりいっそう学生の利用・活用が高まるように、ハード面およびソフト面での向上が望まれる。

観点③：　図書館が整備され、図書、学術雑誌、視聴覚資料その他の教育研究上必要な資料が系統的に収集、整理されており、有効に活用されているか。

【観点に係る状況】

文教育学部では、コースごとに図書室を設け、専門教育に必要な図書・雑誌を購入し、整理・配架・閲覧の業務を行っている。所蔵図書の総数は、平成23年５月時点で20万6,000冊（うち洋書77,000冊）であり、学生一人当たり約250冊となる（資料７-③-A）。所蔵雑誌の総タイトル数は、2,376タイトル（内用雑誌666タイトル）である（資料７-③-B）。各コースの図書室は、学生の自学・自習の場として定着している。なお、グローバル文化学環もまたその予算によって図書・雑誌を購入しているが、利用の便から附属図書館に配架する方針をとっており、下記の集計には含まれていない。

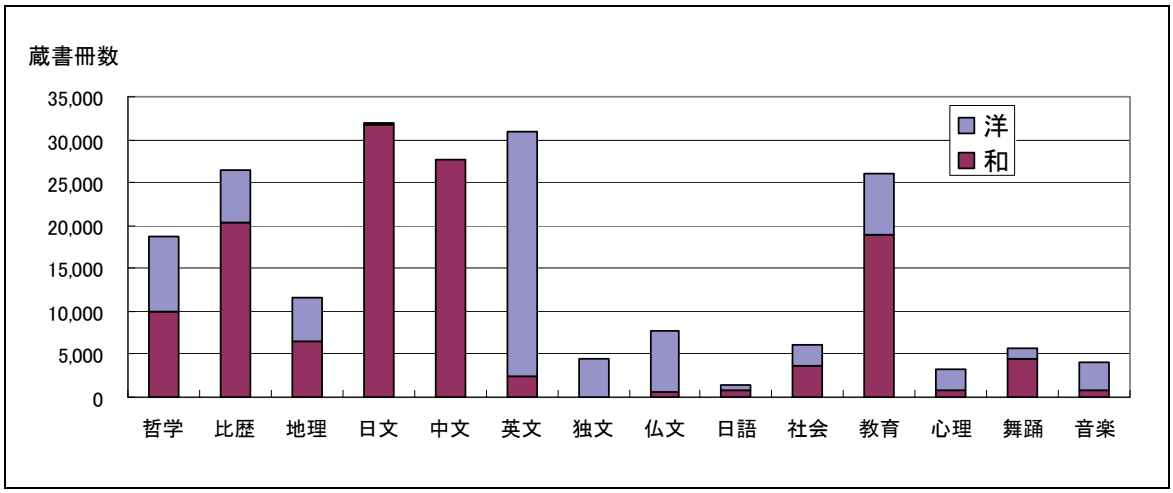
他方、コース図書室の開室は、アカデミック・アシスタントの勤務時間外や休日や夏期休暇などの利用は制限されることになる。平成22年度「お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」（別添資料７-③-１）では、学部・講座の図書室を改善すべきという意見は文教育学部生回答の43.6%をしめている。近年、附属図書館が授業時間外の開館を行っており、また貸出業務も電子化されているため簡便である。この点からすれば、文教育学部の所蔵図書・雑誌の附属図書館への移管をすすめることが、収納スペースの点でも管理の点でも有効であるが、平成23年時点での移管数は、約11,000点、5.4%である。

資料7－③－A　文教育学部所蔵図書数(コース別、平成23年5月)

コース	和	洋	計	比率
哲学	9,906	8,882	18,788	9.1%
比歴	20,383	6,131	26,514	12.9%
地理	6,535	5,078	11,613	5.6%
日文	31,816	147	31,963	15.5%
中文	27,633	94	27,727	13.5%
英文	2,385	28,524	30,909	15.0%
独文	55	4,422	4,477	2.2%
仏文	701	6,981	7,682	3.7%
日語	827	524	1,351	0.7%
社会	3,716	2,373	6,089	3.0%
教育	18,912	7,135	26,047	12.6%

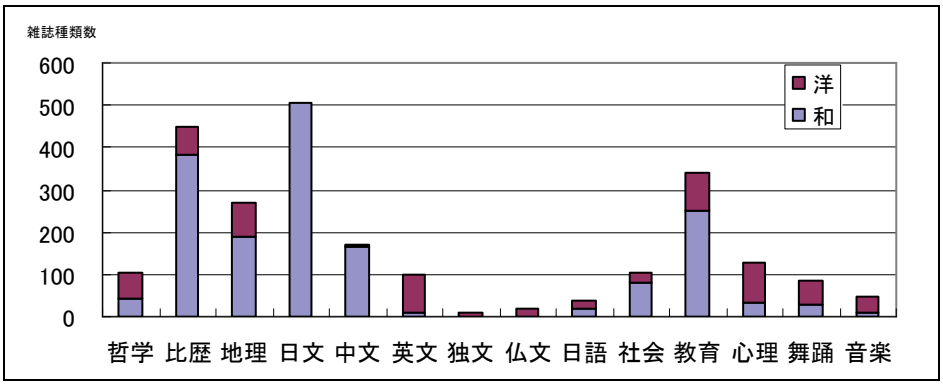
心理	782	2,386	3,168	1.5%
舞踊	4,403	1,328	5,731	2.8%
音楽	898	3,188	4,086	2.0%
計	128,952	77,193	206,145	100.0%

※独文･仏文は、仏語圏コースが管理、日語は日本語教育講座を示す。



資料７－③－Ｂ　　文教育学部所蔵雑誌数（コース別、平成 23 年５月）

コース	和	洋	計	比率
哲学	42	61	103	4.3%
比歴	383	68	451	19.0%
地理	187	83	270	11.4%
日文	506	1	507	21.3%
中文	166	3	169	7.1%
英文	9	91	100	4.2%
独文	0	8	8	0.3%
仏文	1	19	20	0.8%
日語	17	23	40	1.7%
社会	80	26	106	4.5%
教育	250	89	339	14.3%
心理	31	97	128	5.4%
舞踊	30	57	87	3.7%
音楽	8	40	48	2.0%
計	1,710	666	2,376	100.0%



別添資料･web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
別添資料7－③－1	改善ずべき点(学部･講座図書室)(平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活･意識に関する調査 付表 p.21　Q13) (http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/9/3_24-30.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

専門教育に必要とされる図書・雑誌を系統的継続的に購入し、整理して閲覧に供しており、学生に活用されている。他方、図書・雑誌を収納するスペースはほぼ満杯になっており、また、図書室の開室は、コースの事務を担当するアカデミック・アシスタントの管理のもとにあり、開室時間は原則としてその勤務時間内とせざるをえない。附属図書館の収納力にも制限があるが、附属図書館と協議しつつ、計画的な移管を進める必要がある。

観点④：　自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

【観点に係る状況】

学生に対する自主的学習環境設備については､全学の共通施設である図書館およびその学習スペースである｢ラーニング・コモンズ｣､外国語教育センターのマルチメディア語学ラボや情報基盤センターのＩＴルームなどがあり、外国語教育センターに関しては、文教育学部の教員が中心となって学生の学習支援に貢献している。また文教育学部の各コースでは、図書室や学生室（学生控室）などに学生用の自習スペースを設け、パソコンなどを設置して利用できるようにしている（前掲資料５-⑤-Ａ)。人文系のコースは、実験系講座に比べると実験室などの設備をもたず、学生の専門学習スペースも限られているが、学生は図書室や学生室を自主学習の場としてよく利用している。｢平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査｣の施設・設備に関する項目で改善すべきと意見の比率は、学生室 25.5%、附属図書館の自習スペース 19.7%であり、一般の教室の冷暖房や情報機器や備品を改善すべきという意見が 40%以上であるのに対して、相対的に低く、これらの施設が自主的学習の場として好んで利用されていることがうかがわれる。(別添資料７-④-１)

別添資料･web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
別添資料7－④－1	教育施設・設備等で改善すべきもの（平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査　付表 p. 21　Q13) (http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/9/3_24-30.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

自主的学習環境は、ハード面及び組織面では全学的に大幅に改善されており、周知も図られ、有効に利用されてきている。他方、これに関わる学部独自の施設・設備は、スペースや予算が限られているため、パソコンや情報機器の整備以外では大きな進展はみられない。専門教育に関わる自主的学習環境としては、専門的なツール（参考図書やデータベース、アプリケーション、実験器具など）が身近で使用できるかどうかが重要である。全学的に共通利用できる自主学習環境の整備とともに、それぞれの専門の学修に応じた自主学習環境の改善計画を立案することも必要である。

観点⑤：　授業科目、専門、専攻の選択の際のガイダンスが適切に実施されているか。

【観点に係る状況】

文教育学部では、入学時に学部・学科ガイダンスを行い、学科ごとに（芸術・表現行動学科はコースごとに）学科およびコースのカリキュラムやコアや専門科目の履修方法などの説明を行っている。１年次の後期には、主プログラム（専門コース）の選択にむけコースごとに適宜ガイダンスを実施し、さらに２年次に主プログラム（専門コース）が決定すると、専門教育科目を中心としたガイダンスや交流会を実施している。３年次からは演習（ゼミ）が、４年次には卒業論文・卒業研究がそれぞれ学修の軸となるため、これらについてのガイダンスがコースないし演習ごとに行われている。（資料７-⑤-Ａ）

資料７－⑤－Ａ　コース・環のガイダンス実施状況資料

○「グローバル文化学環の活動」（2011 年度）抜粋（出典：『グローバル文化学環』会報 Vol.4）
4 月 11 日　新入生オリエンテーション（新 1 年生）午前
同　進学者オリエンテーション＆歓迎会（新2年生 32 名・編入学生1名と 3 年生）午後
4 月 14 日　新3・4年生ガイダンス
4 月 19 日　グロ文副専攻学生向けガイダンス
10 月 7 日　グロ文主プログラム説明会（1 年生）
10 月 13 日　卒業研究ガイダンス（3・4年生）
1 月 6/10/12 日　グロ文主プログラム選択希望者面談

【分析結果とその根拠理由】

これまでは、各学科・コースによるガイダンスが、学年進行に応じて適切に実施されてきたと判断される。平成 23 年度から導入された複数プログラム選択履修制度では、複数のプログラム・専門分野の学習が可能となり、副プログラムのガイダンスや分野間の関連性の表示など新たな対応が必要になる可能性もある。他方で、各プログラム（主・強化・副・学際）は従来のコースの専門分野から構成されており、基本的に専門分野の内容については、現行のガイダンスを基盤に、さらに学生の質問や要望に応えていくことで、適切な理解が得られると考える。

観点⑥：　学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており、学習相談、助言、支援が適切に行われているか。

また、特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり、必要に応じて学習支援が行われているか。

【観点に係る状況】

教員のオフィスアワーを設定し、学部のウェブサイトに情報を掲載し、学生に周知している（前掲資料５-⑤-Ｂ）。電子メール普及のため、各教員のオフィスアワーの相談やコース事務担当窓口（アカデミック・アシスタント）に加えて、各教員と学生間で直接、教務上・学習上の質問や相談が日常的に行われているため、この観点に関しては以前より望ましい状況となっている。「平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」で、オフィスアワーや教員の対応を満足とする比率は 55％である（別添資料７-⑥-１）。

また新入生の大学生活への順応を支援するものとして、「ピア・サポート・プログラム」を実施している（web 資料７-⑥-２）。２年生以上の在学生のピアサポーターを募り（各コース数人、総計 50 名程度）、研修を行い、新入生の希望者全員に配置し、入学直後のもっとも重要な時期に、個別に学修上や生活上の質問や相談に対応できるようにしている（資料７-⑥-Ａ）。「文教育学部ピア・サポート・プログラムの取り組み活動報告」によればサポートをうけた新入生のうち、「とても役に立った、少し役にたった」とする回答は 79.4％、次年度以降も「是非実施すべき、実施した方がよい」とする回答は 81.9％にのぼり（資料７-⑥-Ｂ）、上級生になるとサポーター役に転じる。

留学生については、グローバル協力センターや留学生相談室が対応にあたり、交換留学生の場合は受入指導教員がつく（別添資料７-⑥-３）。編入学生については、当該学年担当が出身大学での履修単位の認定や時間割設計の相談にのっている。心身など健康上の問題や学費などの生活上の問題を抱える学生に対しては、必要似応じて学年担当又は指導教員が相談にあたっている。

資料７－⑥－Ａ　文教育学部ピア・サポート・プログラム活動日程

○「文教育学部ピア・サポート・プログラムの取り組み活動報告(2009 年４月～2011 年３月)」より
2010 年度 １月末日までにサポーター選出 ４月２日(金)　サポーター研修会（第一回、文 1-302） ４月５日(月)　サポーター研修会（第二回、文 1-302） ４月６日(火)　入学式（10 日までにサポーターとの顔合わせ） サポーター研修会（第三回、文 1-511） ４月 13 日(火)～　サポート開始 ４月 16 日(金)　懇親会（文教第一会議室、文教 1-302） ７月上旬　新入生に対するアンケート調査

資料７－⑥－Ｂ　新入生のピア・サポート・プログラムの評価

○「文教育学部ピア・サポート・プログラムの取り組み活動報告(2009 年４月～2011 年３月)」より

ピア・サポートは役に立ったか？

区分	平成21年度		平成22年度	
とても役に立った	48	25.4%	97	49.7%
少し役に立った	90	47.6%	58	29.7%
どちらともいえない	22	11.6%	18	9.2%
あまり役に立たなかった	10	5.3%	9	4.6%
全く役に立たなかった	3	1.6%	4	2.1%
サポートを全く受けなかった	16	8.5%	9	4.6%
計	189	100.0%	195	100.0%

来年以降のピア・サポートについて

区分	平成21年度		平成22年度	
是非実施すべき	37	19.6%	81	42.0%
実施した方がよい	104	55.0%	77	39.9%
どちらともいえない	40	21.2%	28	14.5%
実施しなくてよい	8	4.2%	7	3.6%
計	189	100.0%	193	100.0%

別添資料･web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
別添資料7－⑥－1	オフィスアワーや教員の対応の満足度(平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活･意識に関する調査　付表 p.23･Q16-13) (http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/1/11_1-101.pdf)
web 資料7－⑥－2	文教育学部ピア･サポート･プログラム(文教育学部ウェブサイト「ピア･サポート･プログラム」) (http://www.li.ocha.ac.jp/llc/peer/index.htm)
別添資料7－⑥－3	グローバル教育センター，留学生相談室(キャンパスガイドP45,P52) (http://www.ocha.ac.jp/campuslife/campus_guide/2012.pdf)

【分析結果とその根拠理由】

全学的な学修支援や学生支援のしくみを基盤にしつつ、個々の学生が抱える学修上・生活上の問題についても教員が個々に対応しており、適切に行われていると判断される。

（２）優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

特になし

【改善を要する点】

「平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」の施設・設備に関する項目では、一般教室の設備も含め、文教育学部生の不満（改善すべきとする意見の比率）は、一般に他学部より高い。学生のニーズを把握し、全学の施設・整備計画に連動しながら、文教育学部の専門教育に適した学習環境を計画的に整備するための案を検討する必要がある。

基準８　教育の内部質保証システム

（１）観点ごとの分析

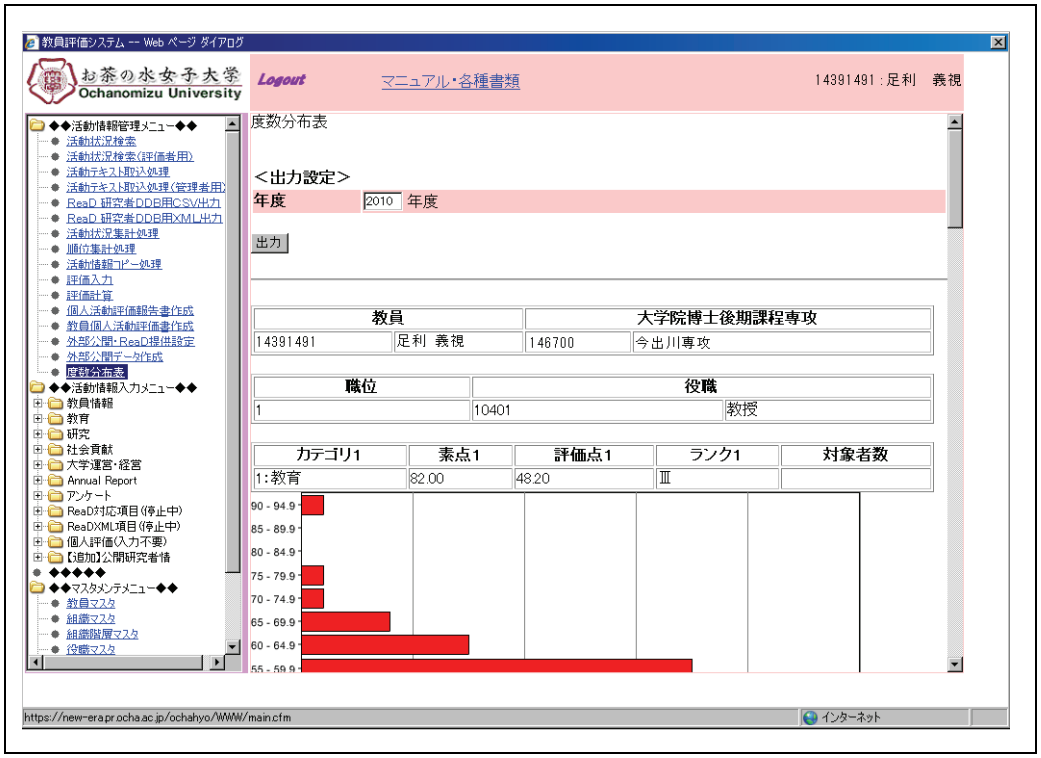
観点①：　教育の取組状況や大学の教育を通じて学生が身に付けた学習成果について自己点検・評価し、教育の質を保証するとともに、教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能しているか。

【観点に係る状況】

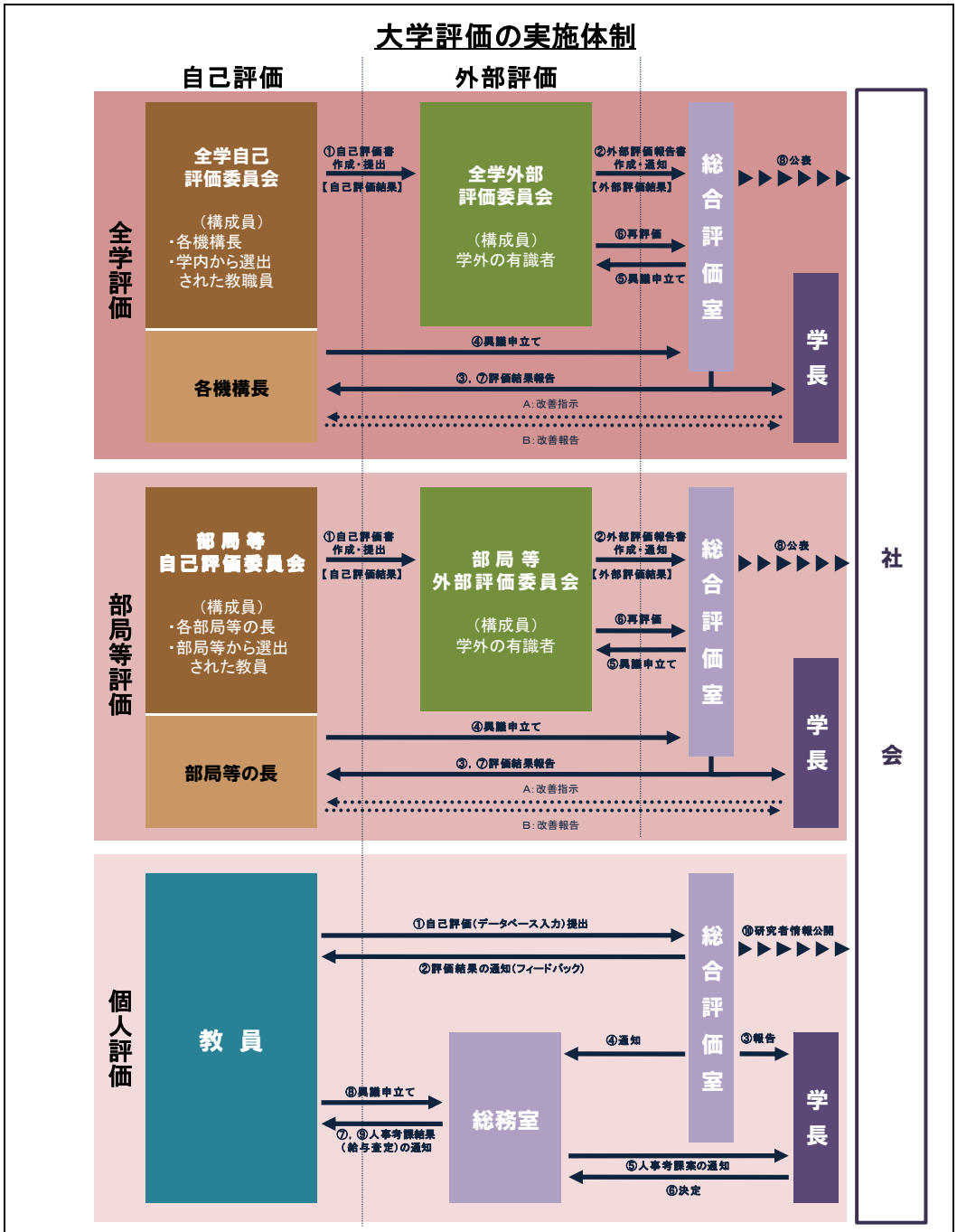
教育活動の状況および学習成果に関するデータや資料を収集･蓄積する組織は､全学的に総合評価室をはじめとして、教育企画室、学生支援室などがある。個々の教員の教育研究活動についてのデータベースは資料８-①-Ａに示されたフォーマットによって蓄積されている｡学部等の評価に関する組織体制については､(資料８-①-Ｂ)。さらに、個々の教員の教育研究活動については、同ウェブサイトの「自己点検･評価」において公表されている。また「お茶の水女子大学教育情報の公表レビュー」(web 資料８-①-１)　においては、教育研究上の基本組織や学習の成果に係る評価及び卒業等についての基準が示されている。

教育活動の状況や学習成果を自己点検･評価及び検証するシステムとしては､各学期末において実施される､学生の授業評価アンケートがあり（前掲資料６-②-Ａ)、教員の教育活動に関する成果(シラバス、授業のパフォーマンス、学生の理解度、授業成果の振り返りなど)を読み取るデータとなっている。そうした授業実施に関するPDCA サイクルの適正化を図るために、FD(Faculty Development)の活動において、シラバスの作成方法、教員間における授業参観などが実施されてきた。

資料8－①－Ａ　教員活動状況データベース



資料８－①－Ｂ　大学評価の実施体制



大学ウェブサイト「大学評価」（http://www.ocha.ac.jp/introduction/hyouka/hyouka02.html#no1 ）

別添資料･web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
web 資料８－①－１	教育研究上の基本組織や学習の成果に係る評価及び卒業等についての基準（教育情報の公表レビュー、pp. 4-5, 54-60） （http://www.ocha.ac.jp/program/project/edu_pro/edu_revue_2011.pdf ）

【分析結果とその根拠理由】

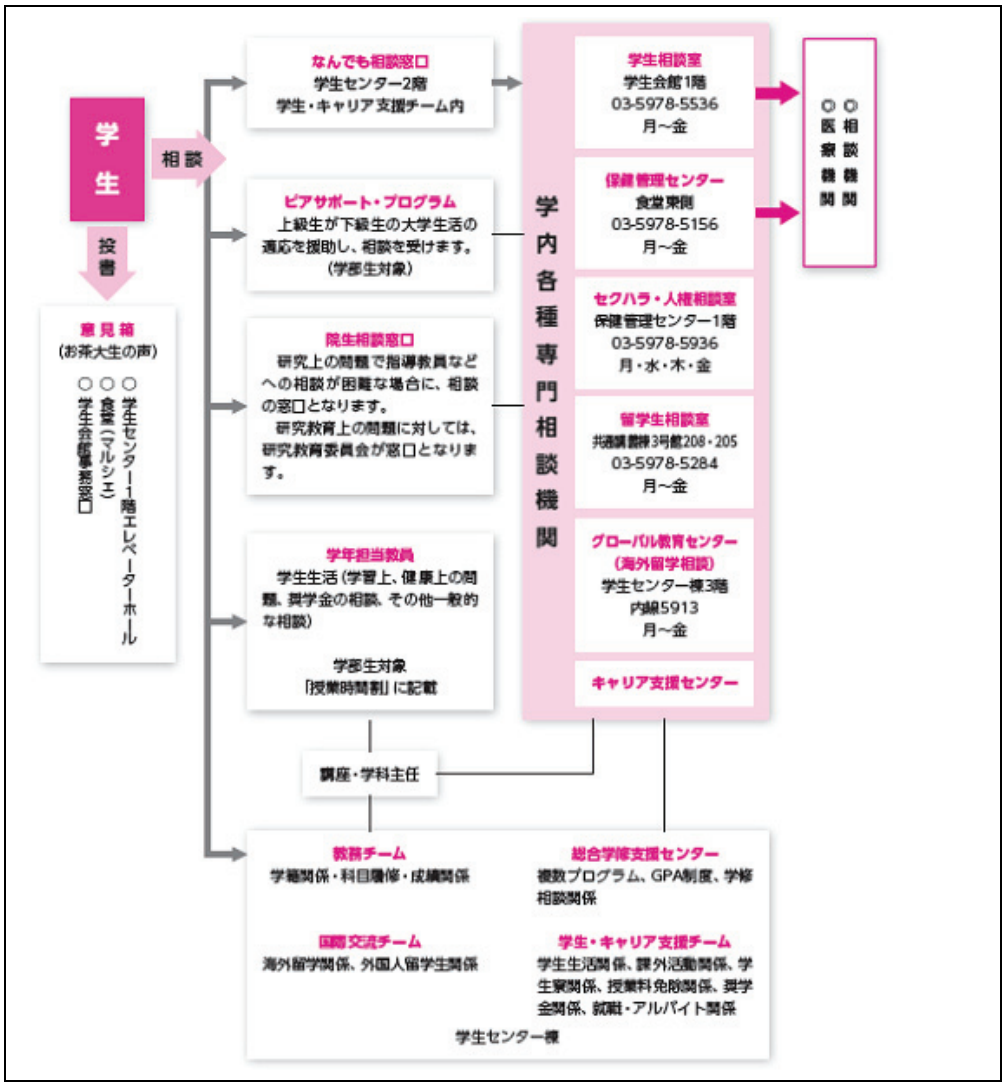
教員各自における教育活動とそれに応じた学生の学習成果との関係を評価する体制は、総合評価室をヘッドとして、事務職員と教員からなる室および室員を通じて、入念に組織されて、適切に機能しているといえる。

観点②：　大学の構成員（学生及び教職員）の意見の聴取が行われており、教育の質の改善・向上に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされているか。

【観点に係る状況】

大学の構成員からの意見の聴取、とりわけ学生からの意見については、観点①で示したように、学生による「授業評価アンケート」の実施が定着しており、定期的に聴取ができている。個別あるいはグループでの学生からの意見聴取は、学生相談室において随時行なわれており、さらに、平成 23 年度以降は総合学修支援センターが設けられ、学修に関する相談を常時受け付けるシステムになっている。また、同時に学生の就職活動に関してもキャリア支援センターが設置されて、本学の学生の社会への窓口として機能している（資料８-②-A）。文教育学部では、昨年度の FD 企画として「学生の声を聞く」をテーマとして、学生相談室担当講師（常勤）を招いてセミナーを実施し、実際に学生がどのような問題を抱えているのかを検討し、また文教育学部独自の学生アンケートを作成・実施した（後掲資料８-④-A、C）。これは教員の資質向上と共に、学生たちが普段考えていることを率直に尋ねる自由記述式のものであった。なお、教職員の意見聴取については、とくにあらためてアンケートなどを実施していないが、教授会や主任会議での発言や問題提起によって補完されているとも言える。

資料8－②－A　学生相談体制(キャンパスガイド p.49)



【分析結果とその根拠理由】

各種のアンケートや学生相談、教員の会議などを通じて、大学の構成員（学生及び教職員）の意見の聴取が適切に行われ、教育の質の改善・向上に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされていると判断される。他方、学生による授業評価アンケートについては規格化した内容のために、コア科目などの受講生数の多い科目には有効性があるが、少人数の専門科目（とくに演習）の場合には、もう少し別の意見聴取の方法も今後考える必要があるだろう。多くのコースで実施しているガイダンスや、進路や卒業論文・卒業研究指導などの面接は、こうしたアンケートには出てこない学生の要望や感想などを知るためのよい機会であるので、この声を改善・向上に活かすとともに、教員の教育改善活動として評価するシステムが必要と思われる。そのことによって、お茶の水女子大学の文教育学部ならではの丹念な学生指導を客観的に評価することができる。

また教職員の意見聴取は、組織から個人を評価するだけでなく、個々の教員から組織を「評価」するシステムあるいは通路があるとよいだろう。

観点③：　学外関係者の意見が、教育の質の改善・向上に向けて具体的かつ継続的に適切な形で活かされているか。

【観点に係る状況】

平成 18 年度部局別自己点検・自己評価をもとに、自己点検や外部評価で受けた優れた点や問題点を部局ごとに検討した。平成 20 年に「お茶の水女子大学　部局別評価結果報告書」がまとめられ、改善案等の概要は web 上で閲覧が可能である（web 資料８-③-１）。このような自己点検・自己評価とそれをもとにした外部評価委員による評価・意見聴取は、６年ごとに定期的に実施するシステムとなっており、今回のものがそれにあたる。

別添資料･web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
web 資料8－③－1	部局別評価結果報告書（部局ごとの自己点検･外部評価で指摘された点の改善状況 P26-27） （http://www.ocha.ac.jp/introduction/hyouka/pdf/050101_18hyoukakekka-bukyoku.pdf ）

【分析結果とその根拠理由】

平成 18 年度以降、定期的に自己評価・自己点検とそれにもとづく外部評価を実施するシステムがとられ、教育の質の向上がはかられている。

観点④：　ファカルティ・ディベロップメントが適切に実施され、組織として教育の質の向上や授業の改善に結び付いているか。

【観点に係る状況】

文教育学部 FD 委員会は平成 23 年度に合計３回のセミナーを実施した。セミナーの内容は、FD 委員会の議事録（資料８-④-A、B）に報告され、平成 23 年度は年間活動テーマを「学生の声をいかにして聞くか」に設定し、さまざまな角度から教員が検討・討議できるように構成された。また、FD セミナーでの討議を経て、「文教育学部の教育についての学生アンケート」調査を実施し、結果を平成 24 年１月 18 日～２月 28 日まで学生ポータルサ

イトに公開した。（資料８-④-C）

資料8－④－A　平成 23 年度　文教育学部 FD 委員会活動報告書（抄）

平成 24 年 1 月 5 日

平成 23 年度　文教育学部FD委員会　活動報告書

三浦　徹　文教育学部長
文教育学部FD委員会
新井由紀夫　大塚常樹　坂元章　（委員長）永原恵三

1. 年度活動テーマ「学生の声をいかにして聞くか」
2. 活動趣旨
今年度は、FDの活動自体を見直し、大学の教員がFDに積極的に関与し、特に文教育学部という学部教育をよりいっそう充実したものにするために、「学生の声をいかにして聞くか」という課題に取り組んだ。今年度はカリキュラムが全学的に改められ、複数プログラム制という新たな制度、そしてGPAという成績評価システムも導入され、学生にとっては、その学習の面において、大きな変化が生じている。そのため、できるだけ、学生の声を聞くことで、教える側の教員のあり方を見直すきっかけとしたい、と考えた。
今年度計画と案内文　別添資料0
3. 実施内容
以下、3回のFDセミナーを、教授会終了後 18:00 過ぎまでの約 1 時間に開催した。
第 1 回:6 月 8 日(水)　学生相談室の吉田惠子講師を招いて、講演と質疑。
第 2 回:9 月 7 日(水)　学生向けアンケート作成のための教員参加ディスカッション。
第 3 回:12 月 7 日(水)　アンケート実施結果に基づくディスカッション。
個々の実施内容報告については、別添資料 1～3 を参照。
4. FD委員会の開催
以下、5回のFD委員会を開催した。（中略）
5. 第 3 回FDセミナーの報告
学生向けに学生ポータルサイトに掲載する。
別添資料 9、参照。

資料8－④－B　平成 23 年度FDセミナー実施状況

文教育学部FD委員会　平成23年度実施内容および教員参加数

回数	テーマ・内容	参加人数
第 1 回	学生相談室の吉田惠子講師を招いて、講演と質疑	37
第 2 回	第 2 回:9 月 7 日(水)　学生向けアンケート作成のための教員参加ディスカッション	38
第 3 回	第 3 回:12 月 7 日(水)　アンケート実施結果に基づくディスカッション	24

資料8－④－C　平成23年度「文教育学部の教育についての学生アンケート」の結果について（一部省略）

平成24年1月17日

平成23年度「文教育学部の教育についての学生アンケート」の結果について

文教育学部長　三浦徹
平成23年度文教育学部FD委員会:
新井由紀夫、大塚常樹、坂元章、永原恵三（委員長）

1. 23年度活動課題「学生の声をいかにして聞くか」
2. 活動趣旨
今年度のFD（Faculty Development＝教育力の開発）委員会は、文教育学部の学部教育をより充実したものにするために、「学生

の声をいかにして聞くか」ということを課題として取り組んだ。23年度より、カリキュラムが全学的に改められ、新たに複数プログラム選択履修制度とGPAという成績評価システムも導入され、今後、学生にとっては、その学習の面において大きな変化が生じてくる。そのため、従来のカリキュラムのもとで学んできた学生(3年生)に対して自由記入形式のアンケートを実施し、その声を聞くことで、教える側の教員のあり方を見直すきっかけとしたい、と考えた。

3. アンケートの実施経過

以下の計3回のFDセミナーを開催した。

9月7日(水) 学生向けアンケート作成のための教員討論(教員セミナー)

10月14-28日 アンケート実施(回答数80)

12月7日(水) アンケート回答結果に基づく分析と総括の教員討論(教員セミナー)

4. 学生アンケートの分析と総括

以下は、FD委員会によるアンケートの分析と教員セミナーに基づいた総括である。

****

1. 個々の回答記述に関する分析

アンケートは、以下の11の質問項目からなり、それぞれの項目について、「良い点」と「改善すべき点」を記入する形式を基本とした。

①専門科目の授業内容について

専門科目については、良い点では、少人数教育の良さを評価する回答が多かった。「じっくり学べる、アットホームである、指導がきめ細かい、先生との距離が近い、質問しやすい、集中できる」などである。また専門の授業の質の高さを指摘する回答もあった。

改善点としては、「科目数が少ない、教員が少ない、領域が偏っている、教職やLA(リベラルアーツ)と時間割が重なる」などが見受けられたが、総じて、もっと科目数がほしい、そのために教員数を増やしてほしい、という要望があると受け止めることができる。

②LA、外国語、スポーツ健康、情報について

良い点としては、LAについて、専門以外の領域が学べることが一定の評価を得ており、特に理系分野が学べることに評価が高かった。外国語では、英語がTOEICの点でクラス分けされていることを評価する声が複数あった。

改善すべき点としては、「LAとコア科目が、教職科目や専門科目と時間割上で重なる」という意見が一番多かった。また「理系のLAとコアの科目が文系の学生にはわかりにくい」という意見も複数あった。LAと基礎講義は、月・水・金の1/2限と3/4限を開講枠にしており、これは外国語の開講時間枠(火・木)とは重ならないが、教職科目の開講時間枠と重なっている。教職免許取得希望者にはバッティングが生じることは承知していたが、学生にとっては大きな問題となっている、と受け止めることができる。

③成績評価について

出席等、平常点を加味している点を良いとする学生が多く、多様な観点からの評価が望ましいと考えていることがわかった。改善すべき点としては、レポートの添削・返却によるフィードバックが望ましいこと、評価基準があいまいだという意見もあり、評価方法や基準のいっそうの明確化・明示が求められているように思われる。

④時間割について

「他大学と違い履修コマ数の上限設定がないことは、自分で自由に履修計画をたてやすい、あまりかぶらずに取りたい科目がとれた」というポジティブ評価がみられるものの、改善すべき点も多かった。授業時間割のバッティング問題として、外国語と専門科目(とくにコースの必修科目)、LA・コアと教職必修、教職以外の資格科目とコースの必修科目や外国語を挙げる学生が多く、この点については、各コースの時間割計画のすりあわせや、全学レベルでのカリキュラム調整機能を充実させる必要があると考えられる。

⑤カリキュラムと学年進行について

必修科目だけに縛られることなく、自由度がある点を評価する意見が多かった。学年進行につれて専門科目に深化・集中していけるという意見と、「LAや専門を同時に学べるので、興味が広がり学際的な視点を持てる」という意見とがあった。1年次末の進学振り分けを含め現在のカリキュラムにおおむね満足している3年生は多いように見受けられる。いっぽう改善すべき点としては、「人文科学科学科共通科目が、必修8単位以上は専門の単位として認められないのはなぜか？」「どの授業がどれ(どの科目区分)に当たるのか、というのが分かりにくかった」等の記述があり、履修規定の細部については学生に十分な理解が得られていない部分があることがわかったので、カリキュラムへの理解を深めるよう、コース・ガイダンスのいっそうの充実がのぞまれる。

⑥入学時・進学時ガイダンスについて

「丁寧であり、有効であった」とおおむね好意的に受け取られているが、コースによって充実度や満足度にばらつきがあるようであった。改善すべき点としては、ガイダンスの周知が徹底されていない例として「貼り紙の掲示だけでは、長期休暇の直後のガイダンスは把握できない」とか、すでに実施しているコースもあるが「先輩の話を聞く機会がほしい」という要望も見られた。

⑦コース進学振り分けについて

おおむね好意的であり、振り分けの時期も適当とする意見が多かった。一方、改善すべき点としては、進学振り分けの参考となる情

報がもっとほしいという要望が見られた。例えば、「1年次にもっと専門の授業を受けたい、コース選択前には授業をもたない先生もいる、明示されていないコースの細かい履修の規定を示してほしい、専門で実質的に履修できない科目についての情報提供が十分でない」などの指摘があった。また、「1年次から進学先を決めていないと、時間割がうまく組めない」という指摘も見られた。

⑧研究指導について

3年生なので卒論についてはまだ分からないところもあるとする回答も見られたが、全般に丁寧で親身であり充実しているということで評価は高かった。しかしながら、いくつか改善点も指摘された。「教員が少なく、教員が退職しても補充がない。卒論担当の教員を選ぶため、教員のことをよく知る情報がほしい。就職と時期が重なるので、卒論指導は早くから始めてほしい。」また、「研究指導の一環として、論文の書き方、文献の探し方などの授業をコアの必修科目にしてほしい」という要望もあった。

⑨卒業後の進路と学びについて

就職支援や進路指導の問題点を指摘する回答が多かった。とくに就職支援は不十分であり、私立大学と格差があるとの指摘があった。「卒業生を紹介してほしい、就職活動セミナーをもっと行ってほしい、就職活動のマニュアルがほしい」などの要望が見られた。また、就職ばかりでなく大学院進学も踏まえた進路指導の機会がほしいという意見もあった。進路選択や就職活動のため、院生や卒業生と交流の機会を持ち、情報を得たいという要望は強かった。お茶大全体としては、21年度にキャリア支援センターを設置し、就職ガイダンスのほか、OGを招いての企業別説明会を頻繁に開催するようにしている。しかし、就職を希望する個々の企業にお茶大OGがいるかどうかといった個々の卒業生の情報は、大学として提供できる体制にはなっていない。これらについては、就活支援担当の部署に学生の要望を伝えた。

⑩設備と研究環境

a) 教室の設備

とくに文教育1号館の設備について、建物自体の問題が指摘され、設備としては、エアコンの音や調整の問題、プロジェクターの不具合、文教育1号館や共通講義棟の机が狭く椅子が古いため服がひっかかって傷む、黒板やホワイトボードが見えにくい、など様々な不備が指摘された。文教育1号館の3階の講義室については、22-23年度に机・イスの入れ替えを行ったが、机がきれいになったと評価する声があった。

b) コース室(共同利用研究室)

全体的に、部屋の狭さ、開室時間の短さ、特に平日17:00の閉室に不便を感じているようだ。ただ、助手(アカデミック・アシスタント)の方の丁寧な対応で利用しやすいとの評価もあった。他方、図書の附属図書館への移管の意見があり、そのことで学生の図書利用時間が大幅に改善される。

c) 図書、資料の利用

全体的に「専門書が古い、量が少ない」等の指摘がある一方で、「柔らかい分野もあるとよい」という意見もあった。ただ、専門の研究室なので専門書の充実が先決であろう。

⑪自由記入欄

全体的に、二つの点に集約できる。第一に、授業の質や内容は良く、学問の面での満足度は高いが、教員が少なくなっていることで、勉学意欲をそがれていることがわかる。さまざまな理由で教員が少なくなっていることが学生に大きな影響をあたえていることを、大学全体として心して受けとめるべきである。第二に、就職への不安である。ある学生は、本学で学問の面白さがわかった反面、「世の中の就活事情は学問的成熟をほぼ無視して進んでいます。それが苦しい。ゆとり世代の知識量は乏しく、学ぶことの楽しさを知らないまま過ぎてしまう。そのまま運良く就職できても、それじゃあお茶大を出た意味がない」と記している。就活といういわゆる「世間的常識」と学問的な深さとが一致しない現実に直面する、お茶大生の姿がある。「就活をするようになってお茶大生は「井の中の蛙」だと思うようになった」、あるいは、他の大規模大学などでは、「教養を強制的に、時には競争させられつらい思いをしながらも、身につけており、確固たるものとして実を結んでいる」のに、本学は強制が乏しく不安がある、との指摘もあった。

⑫満足度

80名の回答で、満足度の平均値は、3.86 であった。これは、全体として、文教育学部の教育について、好意的に受けとめていることを示しているだろう。ただ、個々の数値を見ると、5(満足)、4(やや満足)が多く見られるものの、2(やや不満足)が6名いることも、考慮すべきである。

2. 全体総括

授業内容については専門とコア・LAなどはそれぞれにお茶大の少人数教育や授業の質の高さが評価される一方で、教員の人数が少なくなっていることの指摘や増やしてほしいという要望があり、時間割の重複も問題となっていた。

また、成績評価をめぐる疑問や関心も高かった。評価方法の提示や、評価基準の問題につき、今後検討を進めることが必要と思われる。

進路指導、研究指導については、基本的に評価は好意的であったのに対し、就職支援に関する不満は強く、取り組みを強化する必要性が高い。

設備については、スカートが破れるなど、学生は教員には言わないものの、かなりの我慢を強いていたようであり、他の設備についても改善が課題である。また、コース室の図書の利用や専門書の不足などの問題は、図書館の有効活用による改善が必要である。

自由記入においては、やはり教員の不足やカヴァーできる分野に偏りが生じていることに学生は困惑していることがわかる。お茶大の学生は勉学の意欲が高く、研究の面白さを理解している。その上で様々な改善点を要望していると思われる。また、就職という一般社会とのコードを繋ぐときに「世間」の大多数のなかで大きな不安に陥っていることも事実である。就活に有利なように「世間的常識」を詰め込めばよいわけではなかろう。就活のなかでぶつかる「世間」に戸惑うことも多々あろうが、実はその戸惑いは一時的なものであって、学問的な深さを知る、という手続きは、社会に出てから本当に役に立つツールであることも、わかってもらいたい気がする。そこは、まさに教員が学生の声を受けて考えるべきことであろう。

【分析結果とその根拠理由】

文教育学部の平成 23 年度 FD 委員会は、大学の教員が FD に積極的に関与し、特に文教育学部という学部教育をよりいっそう充実したものにするために、カリキュラムが全学的に改められ、複数プログラム制という新制度、GPA 成績評価システムの導入等、学生にとり大きな変化が生じていることに注目し、「学生の声を聞くことで、教員のあり方を見直す」という目標を具体的に設定し、活動を行った。「文教育学部の教育についての学生アンケート」を作成・実施し、その結果について詳しく分析し、学生にもフィードバックしている。以上からも、ファカルティ・ディベロップメントが適切に実施され、組織として教育の質の向上や授業の改善に結び付いていると判断される。

観点⑤：　教育支援者や教育補助者に対し、教育活動の質の向上を図るための研修等、その資質の向上を図るための取組が適切に行われているか。

【観点に係る状況】

文教育学部では、学部全体としての組織的な取り組みはとくに行っていないが、各コースの実情に合わせ、必要な教育支援者・補助者に対する指導を行っている。全学的に実施される TA 研修（資料８−⑤−Ａ）に加え、コア外国語科目 TA の指導には文教育学部の外国語担当教員があたっている。

資料8－⑤－A　TA研修配布資料

TA (Teaching Assistant) について　　2011.10.19

1　ティーチング・アシスタント制度

大学院生による教育補助（TA, 国によっては、Tutor, Teaching Fellow）

注　文部科学省の定義＝「TA：学部学生等に対するチュータリング（助言）や実験、実習、演習等の教育補助業務（具体的には、演習のディスカッションリーダー、レポート・試験等の採点など）を行い、これに対する手当てを支給される大学院学生等を指す。」

⇒大学の非常勤職員としての身分（毎月の勤務報告，終了後の実績報告）

2　TAの業務

授業，実験，実習，演習等の担当者の指導のもとに，教育の補助を行う。

・セミナー，実験，実習，実技等の指導の補助

・宿題・レポート・試験等の採点補助や試験の監督補助

・履修指導、学習支援、学習相談の補助

⇒あくまでも授業科目についてのTA

3　心がけること

TAには「教える」，「教える事を通して学ぶ」というふたつの側面がある。

[教える]

・TA は指導者として，相手に対して様々な配慮をしなければならない。

①　公平性をもって接し、個を大切に

＊　落とし穴

意図せずに同じ学生にのみ質問，　学生のプライドを傷つける言葉
② 学習意欲を高める
＊TA どうしでうっかり話す言葉や態度が学生の意欲を低める場合
（「今年の学生はだめ」とか）
③ 安全に配慮
＊ 実験、実習など
④ 守秘義務
＊ プライベートなことが書かれているレポート等を許可なく配付
[学ぶ]
・「学生の立場にたって教える」ことにより学ぶ。
・ 教員に対しては――
① 教員の指示を明確に理解する。
② 教員の指示のもとに，教育効果をあげるよう努力する。
③ 結果について、報告や相談をする。

【分析結果とその根拠理由】

教育支援者・補助者に対し、全学的に実施されている教育活動の質を向上させる試みに加え、文教育学部教員が担当することの多い、コア外国語科目および LA 科目の支援者・補助者の教育に、文教育学部教員が積極的にかかわっていることから、教育支援者・補助者の質の向上をはかる取組が適切になされているといえる。

（２）優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

学部独自のファカルティ･ディベロップメントとして、学生に対し教育の内容についてのアンケートを実施し、アンケートの作成から集計および内容の分析を FD セミナーとして教員全体で討議し、また学生へのフィードバックを実施したことは、学部全体で教育内容・方法の充実と評価の適正化を図るものであり、学部独自の教育内容の充実に対する具体的・組織的な取り組みとして評価できる。

【改善を要する点】

① 学生による授業評価アンケートについては規格化した内容のために、コア科目などの受講生数の多い科目には有効性があるが、少人数の専門科目の場合には、もう少し別の意見聴取の方法も構築する必要がある。
② 学科・コースのレベルでは個別に教育の質の向上と改善の取り組みが継続的に行われており、それが効果的にデータとして可視化され、検討されることが必要であろう。

基準 10　教育情報等の公表

（１）観点ごとの分析

観点①：　大学の目的（学士課程であれば学部、学科又は課程等ごと、大学院課程であれば研究科又は専攻等ごとを含む。）が、適切に公表されるとともに、構成員（教職員及び学生）に周知されているか。

【観点に係る状況】

本学部の目的、４学科１学環の目的、およびコース（プログラム）ごとの目的は、冊子での公表のほか、ウェブサイトでも公開されている。①『大学案内』、『大学概要』、及び『募集要項』は、冊子とウェブサイトの双方で公表され、②『履修ガイド』は全学生・教員に配布されるとともに教務及び各コース室に常備され、ウェブサイトに公開され、③学則等に記された目的等は、ウェブサイトの「教育情報の公表レビュー」及び「学内規則集」のサイトで公開され、学内・学外から自由に閲覧できるようになっている。これらの冊子の配布及びウェブサイトでの公開により、本学部の目的は学内の学生、教職員のほか、受験生や一般にも周知されている（資料 10-①-Ａ）。

『大学案内』（大学見学会等で受験生に配布）では、本学部について、「人間をとりまくマクロな社会や環境から、ミクロな個々人の思想や心理や言語、あるいは文学・美術や音楽・舞踊といった芸術まで、多様な研究分野があり、そこでは「生きている」人間とその文化や社会への関心が核となっている…普段は意識されにくい人間社会の暗黙のルール（規範や掟）」を探り出していく（P. 29）」ことが目指されていると説明されており、より具体的な説明になっている。『履修ガイド』は、教育目的や履修方法を詳細に説明し、「平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査」では、本ガイドの満足（非常に、やや）とする回答は 70. 5%と高い満足度を示す（別添資料 10-①-１）。

資料10－①－Ａ　大学、大学院の目的の周知状況（平成 23 年度）

資料名	冊子	ウェブサイト	掲載内容	掲載箇所	配付先又はアクセス対象 教職員	学生	受験生	一般	主な配付先（冊子の場合）	配付数又はアクセス件数
大学案内	○	○	各学部・コースの紹介	2012 年度版 p.29 2013 年度版 p.28 (http://www.ocha.ac.jp/plaza/press/ochadai_guide_2013.pdf)	○	○	○	○	オープンキャンパス	20,000
大学概要	○	○	大学憲章	http://www.ocha.ac.jp/introduction/charter.html	○	○	○	○		2,000
教育情報の公表レビュー	－	○	各学部・学科の目的	http://www.ocha.ac.jp/program/project/edu_pro/edu_revue_2011.pdf	○	○	○	○		22,010
学内規則集	－	○	学則（学部の目的）	http://www.ocha.ac.jp/reiki/act/frame/frame110000001.htm	○	○	○	○		149,191 （注1）
履修ガイド	○	○	各学部・学科・プログラムの目的	（文教育学部）学生便覧・履修ガイド 2011(P43-98) http://www.ocha.ac.jp/campuslife/registration/index2011.htm	○	○	○	○	学生・教職員	379
文教育学部履修案内	○		各学部・学科・コースの目的	2011 年度版（p.9, 11, 13, 16, 18 など）	○	○			学生・教職員	約 300

募集要項	○	○	学部の目的、入学者受入方針（アドミッションポリシー）	（学部） http://www.ao.ocha.ac.jp/admissionpolicy.html	○	○	○	○	オープンキャンパスで配布 志願者、高等学校、予備校など	配布数合計 17,270 部 【内訳】 （学部） 選抜要項:6,414 部 推薦入試:950 部 一般入試:5,595 部 編入（文・生）:455 部 私費留学生:165 部 AO 入試:758 部 高大連携:100 部

注 1:一般向け規則集のトップページへのアクセス者数を集計。

別添資料・web 資料一覧

資料番号	資料名又は掲載内容(URL、該当頁又は該当条文)
別添資料 10－①－1	教育サービス満足度（履修ガイド）（平成 22 年度お茶大生の学習環境と生活・意識に関する調査付表 p.22　Q16-2） （http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/50744/9/3_24-30.pdf）

【分析結果とその根拠理由】

本学部や学科・学環の目的が、冊子のほかウェブサイトでも公開されていることで、本学の構成員である学生、教職員に加え、本学部を志望する受験生にも周知できるものとなっている。

観点②：　入学者受入方針、教育課程の編成・実施方針及び学位授与方針が適切に公表、周知されているか。

【観点に係る状況】

入学者受入方針、教育課程の編成・実施方針、学位授与方針は本学ではそれぞれ、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーと名付けられている。

アドミッション・ポリシーは、『募集要項』（入学者選抜要項、第３年次編入学学生募集要項など）に、本学部と４学科について明確に記載され、冊子体として受験生等に配布されるとともに、ウェブサイトにおいて公開されている。

カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーは、平成 23 年度に大学規則として定められ、大学ウェブサイトの「教育・研究プログラム」の学士課程カリキュラム・ポリシーにおいて、本学部および学科・学環のものが公表されている（資料 10-②-A を参照）。また『履修ガイド』の「授業科目一覧」の中の「専門教育科目」において、コースごとに、主プログラムと強化プログラム、副プログラムと学際プログラムのそれぞれのカリキュラム・ポリシーが記載されている（前掲資料５-②-E）。

資料10－②－A　アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの周知状況

資料名			掲載内容	掲載箇所	配付先又はアクセス対象				主な配付先（冊子の場合）
	冊子	ウェブサイト			教職員	学生	受験生	一般	
履修ガイド	○	○	各プログラムのカリキュラム・ポリシー	（文教育学部）学生便覧・履修ガイド（P43-98）	○	○	○	○	学生・教職員

募集要項	○	○	入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)	(学部) http://www.ao.ocha.ac.jp/admissionpolicy.html	○	○	○	○	オープンキャンパスで配布(志願者、高等学校、予備校など)
教育・研究プログラム(大学ウェブサイト)	－	○	カリキュラム・ポリシー	http://www.ocha.ac.jp/program/curriculum_policy/undergrad.html	○	○	○	○	
			ディプロマ・ポリシー	http://www.ocha.ac.jp/program/diploma_policy/undergrad.html					
文教育学部履修案内	○		各コース・プログラムのカリキュラム・ポリシー	『文教育学部履修案内』	○	○			入学時のガイダンス

【分析結果とその根拠理由】

アドミッション・ポリシーは受験生にとって必要な情報であり、募集要項に明確に記載されていることで、受験生への周知がなされている。

カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーは、在学生の学修にとっての必須の情報である。両者は、ウェブサイトで公開されるとともに、各プログラムのカリキュラム・ポリシーは『履修ガイド』に明記され、各学科・コースごとのガイダンスなどを通して学生に周知されている。

（２）優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

教育の目的をはじめとする本学部・学科・コースの教育情報は、大学案内、大学概要、履修ガイド、募集要項文教育学部履修案内などのさまざまな冊子およびウェブサイトを通じて、教職員、学生、受験生、一般に広くかつ体系的に周知されている。

【改善を要する点】

特になし